

史跡

K A M A T S U K A

釜塚古墳

福岡県糸島市神在所在の大型円墳
糸島市文化財調査報告書

第24集

2020

糸島市教育委員会

序

釜塚古墳が1982（昭和57）年に国史跡に指定されてから38年の歳月が流れました。1972（昭和47）年に古墳の周辺一帯で公営住宅の建設計画が浮上した際には古墳の周辺環境の保護も危ぶまれる状況になりましたが、原田大六氏、大神邦博氏、糸島高校歴史部各位のご尽力により九州でも屈指の規模を誇る円墳であることが明らかとなり、辛うじて破壊を免れることとなりました。

続いて1980（昭和55）年に行われた発掘調査によって、古墳の頂上地下に残された横穴式石室がわが国の古墳の埋葬施設の変遷を考えるうえで極めて重要なことや、古墳時代の北部九州社会の動向をうかがう上でも欠くことのできない古墳であることが明らかとなったことから、1982（昭和57）年5月に国の史跡に指定されました。

その後、平成13～15年度に隣接する公営住宅の再整備が計画されたことに伴い改めて発掘調査が行われた際に、新たに周濠を囲繞する外堤や石見型木製品などが出土したことで、古墳の重要性はさらに高まり、本年3月には史跡の範囲が大きく拡大されました。

本書は、これまで実施した5次にわたる釜塚古墳とその周辺の調査成果を一冊にまとめたものです。古墳の周囲からは縄文～弥生時代の遺構や遺物も確認され、古墳築造に先立ち人々の長きにわたる営みがあったことも明らかとなり、長野川流域の歴史に新たな1ページを加えることができました。

本書が、釜塚古墳の重要性についてご理解いただくとともに、長野川流域の歴史、ひいては糸島の豊かな歴史を知る一助となれば幸いです。

令和2年3月31日

糸島市教育委員会
教育長 家宇治 正幸

本文目次

例言

1. 本書は、福岡県糸島市神在字釜塚に所在する史跡釜塚古墳とその周辺において、昭和48年度、昭和55年度、平成13～15年度にかけて実施した発掘調査成果を総括的に報告するものである。
昭和55年度調査については、同年度末に前原町文化財調査報告書第4集『釜塚』（以下『釜塚1981』）、平成13年度調査については、平成14年度に前原市文化財報告書第81集『国史跡釜塚古墳』（以下『釜塚2003』）で概要を報告しているが、記述内容の相違点がある場合は、本報告成果を正とする。
2. 第1次調査のトレンチ実測図は、楠原和彦、諸岡利寛が作成した。
3. 第2次調査は、石山勲（福岡県教育委員会・当時）が担当し、石室実測図は石山が作成した。
4. 第3次調査は、岡部裕俊が担当し、遺構実測図は岡部が作成した。
5. 第4次調査は、岡部、江崎靖隆が担当し、遺構実測図は担当者2人が分担して作成した。
6. 第5次調査は、瓜生秀文が担当し、遺構実測図は瓜生が作成した。
7. 遺物実測図のうち、埴輪は、石山勲、岸本圭（福岡県教育委員会）が作成したものに、糸島高校附属郷土博物館収蔵品を岡部が付加作成し、木器の実測は、脇谷（旧姓牟田）華代子の協力を得て岡部が、弥生土器、縄文土器、石器の実測は、岡部、田中阿早緑、内山久世、稲富良子、蔵田和美が行った。また、刀子状鉄製品、鉄鏃の実測は岡部が行い、X線透過写真の撮影にあたっては福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。
8. 本書に使用した遺構、遺物実測図の製図は、藤野さゆり、岡部が行った。
9. 釜塚古墳出土石見形木製品の樹種同定については、鈴木三男、小川とみ（東北大学大学院理学研究科附属植物園・当時）から賜った玉稿（『釜塚2003』に掲載済）を再掲したものである。
10. 本書の執筆、編集は、藤野、蔵田の助勢を受けて主に岡部が行ったが、横穴式石室については、石山の報告文（『釜塚1981』）に岡部が新知見を、埴輪については、岸本の報告文（「釜塚古墳出土埴輪について」『神在横島遺跡』2000 前原市教育委員会）に新出資料の説明を加えたものである。
11. 本古墳の発掘調査、報告書作成にあたり、九州歴史資料館、福岡県立糸島高等学校、福岡市埋蔵文化財センター、岡寺良、上角智希、河内一浩、小池史哲、申敬激、神野晋作、鈴木裕明、豊岡卓之、永見秀徳、西谷正、坂靖、比佐陽一郎、柳澤一男、吉田野々（五十音順 敬称略）から、現地視察や遺物実査などをご指導、ご助言を賜った。記して感謝の意を表します。

I. はじめに

1. 本書の刊行にいたる経過 1
2. 釜塚古墳の調査研究の足跡 1
3. 調査の組織 7

II. 位置と環境

1. 地理的環境 9
2. 長野川流域の古代遺跡 9

III. 調査の記録

1. 各次調査のトレンチ・調査区概況 12
2. 釜塚古墳 26
 - (1)周濠..... 26
 - (2)渡り土堤..... 31
 - (3)外堤..... 31
 - (4)墳丘..... 33
 - (5)葺石..... 34
 - (6)横穴式石室..... 36
 - (7)出土遺物..... 39
 - (8)横穴式石室出土遺物..... 42
 - (9)古墳周辺の遺構、遺物..... 42
3. 縄文時代の遺構と遺物 47
 - (1)立杭群と加工木..... 47
 - (2)出土遺物..... 49
4. 自然科学的分析 釜塚古墳出土石見型木製品の樹種について 54
5. 過去の空中写真を用いた釜塚古墳周辺の地形復元 55
6. 釜塚古墳墳頂の石材 57
 - (1)松浦砂岩の板石..... 57
 - (2)墳丘で採集された赤色顔料付着礫..... 59

- IV. まとめ 60

図版目次

図版	1	a	釜塚古墳周辺の米軍撮影写真(上が北 1947年 国土地理院提供)
		b	釜塚古墳全景(北から 1950年 高橋猪之介氏撮影)
図版	2		釜塚古墳周辺の航空写真(上が北 1961年 国土地理院提供)
図版	3	a	宮地嶽から釜塚古墳をのぞむ(1978年10月)
		b	宮地嶽上空から釜塚古墳をのぞむ(2002年2月)
		c	長野川越しに西から釜塚古墳と宮地嶽をのぞむ(2002年2月 西谷正氏撮影)
図版	4	a	釜塚古墳全景(北から 2019年4月 岡寺良氏撮影)
		b	第1次調査 1トレンチ調査風景(南から 1973年10月)
		c	同上 2トレンチ丸木検出状況(東から 1973年10月)
図版	5		第3次調査 全景(上から 写真上が東)
図版	6	a	第3次調査 8~11トレンチ(東から)
		b	同上 8トレンチ(上から 写真上が北)
図版	7	a	第3次調査 8トレンチ東拡張区近景(北から)
		b	同上 9トレンチ(西から)
		c	同上 10トレンチ(西から)
図版	8	a	第3次調査 11トレンチ(西から)
		b	同上 12トレンチ(上から 写真上が南東)
図版	9	a	第3次調査 13トレンチ(北から)
		b	同上 13トレンチ墳丘裾土層(西から)
		c	同上 13トレンチ周濠外縁土層(南西から)
図版	10	a	第3次調査 8トレンチ周濠外縁土層(北西から)
		b	同上 8トレンチ周濠土層(東から)
		c	同上 11トレンチ周濠外縁土層(北西から)
図版	11	a	第3次調査 12トレンチ渡り土堤南北縦断壁土層(西から)
		b	同上 12トレンチ渡り土堤東西壁東土層(北から)
		c	同上 8トレンチ外堤下土器溜り遺物出土状況(西から)
図版	12	a	第3次調査 8トレンチ外堤断面(北から)
		b	同上 9トレンチ外堤断面(南西から)
図版	13	a	第3次調査 10トレンチ外堤断面(北西から)
		b	同上 11トレンチ外堤断面(北西から)
図版	14	a	第1次調査 1トレンチ葦石検出状況(南から)
		b	同上 1トレンチ葦石裾土層断面(南西から)
		c	同上 2トレンチ葦石検出状況(東から)
		d	同上 2トレンチ葦石裾土層断面(南西から)
図版	15	a	第3次調査 12トレンチ葦石検出状況(上から 上が墳丘)
		b	同上 12トレンチ東部葦石近景(北から)
		c	同上 12トレンチ渡り土堤東側葦石近景(北西から)
図版	16	a	第3次調査 12トレンチ渡り土堤西側葦石近景(北から)
		b	同上 13トレンチ葦石検出状況(北から)
図版	17	a	第3次調査 12トレンチ石見型木製品出土状況(東から)
		b	同上 (上から)
図版	18	a	第3次調査 12トレンチ組み合わせ式木製品出土状況(北西から)
		b	同上 近景(北から)
		c	同上 近景(西から)
図版	19	a	第2次調査 5トレンチ墳丘土層断面(墳頂~中断)
		b	同上 (墳裾からのぞむ)
図版	20	a	第2次調査 墳頂部横穴式石室調査前開口状況(東から)
		b	同上 墓道土層断面(東から)

図版	21	a	第2次調査 墓道および羨道左壁(北東から)
		b	同上 墓道および羨道右壁(南東から)
		c	同上 羨道部全景(玄室正面から)
図版	22	a	第2次調査 羨道左壁近景(北から)
		b	同上 羨道右壁近景(南から)
図版	23	a	第2次調査 横穴式石室前壁(奥壁側から)
		b	同上 横穴式石室奥壁(袖手前から)
図版	24	a	第2次調査 横穴式石室奥壁手前の板石
		b	同上 横穴式石室奥壁左隅角
		c	同上 横穴式石室奥壁右隅角
図版	25	a	第4次調査 調査区越しに釜塚古墳をのぞむ(南から)
		b	同上 調査区東壁土層(西から)
		c	同上 調査区中央サブトレンチ縄文時代遺物包含層土層(東から)
図版	26	a	第4次調査 5層加工木の出土状況(上から)
		b	同上 5層加工木下の浅鉢出土状況(北から)
図版	27	a	第4次調査 5層磨製石斧出土状況
		b	同左 5層丸太杭打ち込み状況①
		c	同上 5層丸太杭打ち込み状況②
		d	同上 5層丸太杭打ち込み状況③
		e	同上 5層丸太杭打ち込み状況④
		f	同上 5層丸太杭打ち込み状況⑤
		g	同上 5層丸太杭打ち込み状況⑥
		h	同上 5層丸太杭打ち込み状況⑦
図版	28	a	第5次調査 全景(上から 写真上が北)
		b	同上 全景俯瞰(西から)
		c	同上 16-a トレンチ土層断面(南西から)
図版	29		石見型木製品
図版	30		組み合わせ式木製品
図版	31	a	釜塚古墳採集埴輪①
		b	釜塚古墳採集埴輪②
		c	釜塚古墳採集赤色顔料付着板石
		d	釜塚古墳採集赤色顔料付着円礫
図版	32	a	8トレンチ土器溜り出土土器
		b	同上 出土古式土師器
図版	33	a	第4次調査 5層出土精製浅鉢
		b	同上 5層出土縄文土器
		c	同上 32層出土縄文土器①
		d	同上 32層出土縄文土器②
図版	34		釜塚古墳出土石器
図版	35	a	釜塚古墳墳頂部 板石群現状(南から)
		b	同上 倒壊した供養碑石(S 1,2 南から)
		c	同左 供養碑前の石畳転用石材(S 3~8, 東から)
		d	同上 S 3 近景(東から)

表目次

表	1	釜塚古墳出土土器観察表①	52
表	2	釜塚古墳出土土器観察表②	53
表	3	北部九州における5世紀の主要大型円墳一覧	63
表	4	糸島地方の5世紀の主要横穴式石室規模比較	64

挿図目次

	頁
第1図 鉄道沿線観光地図(1934年)に掲載された釜塚古墳	1
第2図 釜塚古墳全景(南から『糸島郡誌』より)	1
第3図 釜塚古墳横穴式石室前壁(1950年 高橋猪之介氏撮影)	2
第4図 第4次発掘調査風景	4
第5図 舗装と芝生で表示された周濠と渡り土堤(2005年3月)	6
第6図 東二塚甕棺墓出土ガラス釦(東京国立博物館蔵)	9
第7図 東真方C-1号墳測量図(1/200)	10
第8図 一貴山銚子塚古墳後円部から前方部をのぞむ	10
第9図 発掘調査中の荒毛2号墳を前方部側から後円部をのぞむ	10
第10図 長野川流域とその周辺における主要遺跡・古墳・古代寺院の分布(1/50,000)	11
第11図 釜塚古墳周辺の発掘調査地点(1/500 周辺の道路や区画表示は2001年当時)	13
第12図 1～4トレンチ平面図および土層断面図(1/100)	14
第13図 5トレンチ墳丘土層断面図(1/100)	16
第14図 6・7トレンチ土層図(1/60)	17
第15図 8～10トレンチ平面図および土層断面図(1/80)	19
第16図 11・13トレンチ平面図および土層断面図(1/80)	20
第17図 12トレンチ平面図および土層断面図(1/100)	21
第18図 14トレンチの土層剥ぎ取り風景	22
第19図 14トレンチ5層下平面図および土層断面図(1/100)	23
第20図 15～18トレンチ平面図(1/300)および13・15トレンチ土層断面図(1/120)	24
第21図 15～18トレンチ土層断面図(1/60)	25
第22図 1・12・13トレンチ周濠土層断面詳細図(1/60)	26
第23図 12トレンチ石見型木製品出土状況図(1/30)	27
第24図 石見型木製品実測図(1/8)	28
第25図 組み合わせ式木製品出土状況図(1/20)	29
第26図 組み合わせ式木製品実測図(1/5)	30
第27図 外堤断面図(1/40)	32
第28図 5トレンチ墳丘断面推定線(1/200)	33
第29図 1・2・12・13トレンチ葦石出土状況図(1/50)	35
第30図 1・3・4・12・13トレンチ葦石断面図(1/50)	36
第31図 横穴式石室実測図(1/40)	38
第32図 釜塚古墳採集埴輪実測図(1/4)	41
第33図 釜塚古墳出土鉄鎌・刀子状鉄器実測図(1/2)	42
第34図 土器溜り弥生土器出土状況図(1/20)	43
第35図 土器溜り出土弥生土器実測図(1/4)	43
第36図 周濠周辺出土土器実測図①(1/4)	45
第37図 周濠周辺出土土器実測図②(1/4)	46
第38図 14トレンチ縄文晩期杭列配置図(1/100)	47
第39図 加工木下の浅鉢出土状況図(1/20)	48
第40図 第4次調査出土縄文土器実測図①(1/3)	48
第41図 第4次調査出土縄文土器実測図②(1/3)	49
第42図 釜塚古墳出土石器実測図(1/2・1/3)	51
第43図 1947年撮影データから得られた三次元モデル	55
第44図 1961年撮影データから得られた三次元モデル(高さ補正後)	56
第45図 釜塚古墳墳丘上石材略測図(1/20)	58
第46図 釜塚古墳墳形復元案(1/1,000)	61
第47図 拝塚古墳墳丘図(1/1,500)	62
第48図 糸島地方の主要古墳の葦石比較(1/100)	63
第49図 糸島地方における初期横穴式石室の変遷(1/160)	65
第50図 九州地方の石見型製品(1/20)	66
第51図 組み合わせ式木製品の復元案と服部1号墳出土組み合わせ式木製品実測図(1/10)	68

I. はじめに

1. 本書の刊行にいたる経過

釜塚古墳は、福岡県糸島市神在に所在する墳丘径56mを有する大型円墳である。

これまで5次にわたる発掘調査が実施され、古墳の構造や外部施設の詳細が明らかにされてきた。過去の調査結果について、第1、2次調査については発掘調査報告書を第3次調査については調査概報をそれぞれ刊行したが、その後続けて第4、5次調査が実施されたが報告書の作成にはいたらなかった。

また、昭和57年5月に史跡に指定され、令和2年3月には史跡の指定範囲が拡大されたため、これらの総括的な報告書を作成し、将来の古墳の保存管理、整備に向けての情報の整理が必要と判断されたことから、本書を作成することとした。

2. 釜塚古墳の調査研究の足跡

(1) 加布里駅のランドマーク

史跡釜塚古墳は、福岡県糸島市神在字釜塚406番地他に所在する。古墳名の「釜塚」が小字として用いられていることから、古くから貴人の墳墓として地域の人々に強く意識された存在であったことがうかがえる。また、大正時代に制作された鉄道沿線観光地図(第1図)には、加布里駅の東に「古墳」の表記が認められ、加布里駅からのぞむ象徴的な景観として親しまれていたことがわかる。筆者も幼少期に加布里駅のホームからみた古墳の墳丘が、田植えを控えて水が張られた水田中にばかりと浮かぶ島のように見えたのが印象的であったことを記憶している。

しかし、古墳に関するいにしへの記録は以外と少なく、大正期を過ぎたころから少しずつ郷土誌に紹介されたにとどまる。これらを含めた古墳に関する過去の文献史料や、現在までの調査、保護施策等の足跡は以下にまとめた。

(2) 古墳史料の初出

1929(昭和4)年に刊行された『糸島郡誌』(註1以下『郡誌』)には、墳丘を南から撮影した写真(第2図)とともに、以下の解説文が掲載されている。

古墳釜塚 「赤坂の南二町にあり、高十間、周六十間、形釜を伏せたるか如し。三雲の茶臼塚古墳築山古墳と殆んど同形なり。明治18年



第1図 鉄道沿線観光地図(1934年)に掲載された釜塚古墳



第2図 釜塚古墳全景(南から『糸島郡誌』より)

頃発掘せしに、朱を詰めたる石櫃様の棺及び鏃二個を得たり。今鷲尾勝治之を所有し梅樹を植えたり。此塚の附近一帯往古は海なりしなるべし。埋没の貝殻甚だ多し。此塚は波汀の丘上に築つけるものと思はる。なお、加布里小学校北々東の字を大新開と云うに併せ考ふれば更に爾く思はる。」

三雲茶白山古墳とは、現在の三雲端山古墳のことである。この古墳は当時、低平な前方部が墳丘の一部と認識されていなかったことから円墳と誤認されており、規模、墳形が近似する古墳として紹介された。また、1885（明治18）年頃に石室が発掘され、内面に赤色顔料が塗られた石棺が発見されていたことや、鉄鏃2本が出土したことなども伝えられていたことがわかる。

出土した鉄鏃について、糸島高校附属郷土博物館には、現在釜塚古墳出土と伝える長頸鏃16本（第33図、図版扉）が収蔵されているが、この資料のなかに『郡誌』に記された鉄鏃と同一資料が含まれているかは明らかでない。

この糸島高校所蔵の鉄鏃については、郷土の考古学者として著名な原田大六の幼年期の記録が興味深い。原田は父親に連れられて釜塚古墳を訪れ、特別な関心を寄せたとされ、その後旧制糸島中学に進学した原田は、同校の創立10周年事業として開設された郷土資料室の準備段階で中心的役割を果たしているが、この時に原田ら糸島中学生によって鉄鏃が採集されていた可能性もある。

なお、『郡誌』では、古墳築造時の立地環境について古墳の周囲で貝殻が多く認められることに着目し、近世の干拓史と絡めて旧地形を検討し、旧海岸沿いの微高地上に位置していたと推定し、古墳が深江湾に面した海辺にあったことを早くに指摘している。

その後、1941（昭和16）年刊の『前原町誌』（註2）にも以下のような記載がある。

古墳釜塚 赤坂の南三町の地にある。高さ十間、周囲六十間、形釜を伏せた形をしている所から、土地の人々は之を釜塚と呼んでいる。明治18年頃発掘した所が、朱を詰めた石櫃様の棺及鏃があらわれたという。何人の墳墓なるや明かでない。

しかし、この記載は残念ながら、『郡誌』の記述内容を略載されたものと考えられ、新たな情報は付加されていない。

（3）一貴山銚子塚古墳の発掘調査と釜塚古墳

1950（昭和25）年に日本考古学協会と福岡県教育委員会が協同で一貴山銚子塚古墳の発掘調査を実施した（註3）。調査を統括した小林行雄は、古墳の竪穴式石槨の構造に注目し、発掘調査報告書のなかで同種の割石材を用いた近隣石室の類例として丸隈山古墳（福岡市西区）とともに釜塚古墳の横穴式石室を写真入りで紹介している。一貴山銚子塚古墳と釜塚古墳との距離は、直線距離にして1kmほどしか離れておらず（図版2）、長野川を挟んで両岸に対峙し、墳丘上から相互に目視できる位置関係にある。



第3図 釜塚古墳横穴式石室前壁(1950年 高橋猪之介氏撮影)

この報告書に掲載された写真の撮影は、調査に帯同した高橋猪之介氏による。高橋氏が撮影した釜塚古墳の当時の墳丘および横穴式石室内部の写真は後年に公開された（図版1-b、第3図）（註4）。墳丘は、1964（昭和39）年に蜜柑を植樹するために開墾されて大きく姿を変えており、改変前の墳丘の姿が確認できる貴重な資料であり、将来、復元整備を行う上でも貴重である。

（4）釜塚古墳の発掘調査経過

① 第1次発掘調査（昭和48年度）

釜塚古墳にはじめて考古学的な発掘調査が実施されたのは、1973（昭和48）年11月のことである。釜塚古墳の西側の水田一帯を埋め立てて、町営団地（現市営神在団地）の建設が計画され、釜塚古墳の保存が問題となった。当時、事業を所管していた建設課は、墳丘は現状のまま緑地として保存するものの、なるべく多くの戸数を確保したいとして墳丘の裾近くまでの住宅建設を希望した。しかし、教育委員会は県文化課とも協議し、本古墳の歴史的重要性を鑑み将来の史跡指定・保存も念頭に、古墳周囲に緩衝帯を確保する必要性を主張した。

このため、釜塚古墳の形状と規模を確認するために墳丘裾部の発掘調査を実施し、この成果をもとに住宅建設の範囲を改めて協議することとなった。

調査は、町の文化財保護委員会委員であった原田大六氏と大神邦博氏を調査指導委員として町の単独事業として実施された。現墳丘の南～西側にかけて3本のトレンチ（第11図1～3トレンチ）、東裾に1本（第11図4トレンチ）のトレンチを設け、墳丘裾の位置と周溝の有無の確認が行われた。調査当時、既に古墳の周囲は埋め立てが行われており、墳丘裾部が地下に埋没し見かけの径は45mほどとなっていたが、この調査によって、本来の墳丘が直径54～57mに上ること。墳丘裾には葺石が列石状にめぐるとともに、墳丘周囲に幅7.2～7.8mの周溝がめぐらされ、周溝外縁の径が、概ね72mに達する北部九州屈指の規模を誇る大型円墳であることが判明した。

この結果は直ちに町文化財保護委員会に報告された。同委員会ではこの結果を受けて少なくとも推定周濠域の保存を確保するように答申した。当初想定されていた古墳の規模を大きく上回る保護域となったため、墳丘裾のぎりぎりまで住宅建設を希望する建設課との協議は難航を極めたが、予定地においては周濠を含めた範囲の保存を達成することができた。

② 第2次発掘調査（昭和55年度）

1979（昭和54）年には、糸島郡で初となる文化財専門職員が前原町で採用された。当該地方における文化財保護行政が本格化することとなるが、その先陣を切り史跡指定に向けた本格的発掘調査が実施されたのが釜塚古墳であった。

調査は1980（昭和55）年度の国庫補助事業として実施され、墳丘の西斜面に5トレンチを設け墳丘構造および埋葬施設の確認が行われた。これによって墳丘の大半が盛土で成形されていることが確認されたが、一方、1964（昭和39）年に行われた墳丘上での果樹園の開墾によって表面に大きな改変が加えられた状況も明らかとなった。

なお、発掘調査中に起きた事故により職員が重傷を負ったことから、県教育委員会からの応援体制がとられ、これに伴う時間的制約も生じるなど、調査内容にも影響を与えることとなっ

た。

しかし、この調査ではじめて墳頂地下に構築された横穴式石室の調査が実施され（第11図6、7トレンチ）、墳頂東端から下り急勾配の墓道を設け、短い前庭部と羨道へと接続し石室にいたる古式の構造を有していることが明らかとなり、また割石を小口積みした内法長3.8m、幅2.8m、高さ2.1mの横穴式石室の実測図（第31図）が作成され、その構造が報告書で初めて公開された。

横穴式石室は盗掘によって右側壁の破損が進んでいたため、調査終了後に石室の保護と安全対策を主目的として土嚢と土砂で入口を封鎖して埋め戻され現在にいたる。この調査結果は、第1次調査の成果とともに当該年度末に報告書として刊行された（註5 以下『釜塚1981』）。

③ 第3次発掘調査（平成13年度）

第1、2次の調査は、主に墳丘南部の墳裾および周濠の確認と埋葬施設の記録を主眼として進められたが、北半部については調査の手がおよばなかった。このため、北裾部の遺構の状況が明確ではなく、北側に造り出しを設けられたり、あるいは帆立貝型前方後円墳である可能性も残されていたため、古墳の保護を進める上で情報が十分とはいえなかった。平成14年度からは近接する公営住宅の建て替える計画も持ち上がり、古墳の更なる保護に向けて追加の確認調査の必要に迫られたため平成13年度に第3次発掘調査を実施した。

この調査では、墳丘の北部から東部かけて放射状に6本のトレンチ（第11図8～13トレンチ）を設定し、この結果いずれのトレンチでも周濠が確認されたため、円墳であることが確実となった。

このうち、8トレンチでは周溝外縁から外側に向けて8mほどトレンチを延長したところ、断面が低い台形状を呈する盛土層を確認し、さらにこの遺構の伸長方向を追った3本のトレンチ（9～11トレンチ）でも同様の盛土遺構を確認した。堆積土壌の観察などから古墳と一体的に構築された外堤の一部と判断した。

また、12トレンチで墳丘裾に施された葺石を良好な状態で検出したことから、これを追って西側にトレンチを拡張したところ、周溝が幅8mにわたって途切れていることを確認し、そこから周濠を縦断する渡り土堤（陸橋）の存在が確認された。

出土遺物としては、周濠から出土した石見型木製品や組合せ式の木製品部材、弥生後期の外來系土器などが特筆される。これらの調査成果は概報を刊行して公開に努めた（註6 以下『釜塚2003』）

④ 第4次発掘調査（平成14年度）

第3次調査の結果を受け、外堤が墳丘周囲をどのように囲繞するかを確認するため、第1次調査地点で設定した1・2トレンチのさらに南側で、外堤の伸長が想定される箇所に新たに調査区（第11図14トレンチ）を設定した。造成土砂が厚く堆積しており、現地表からの深さが2mほどとなった（第4図）。



第4図 第4次発掘調査風景

1トレンチでわずかに残存していた外堤の痕跡を確認することはできなかった。

しかし、包含層から縄文土器や石器が出土したため、サブトレンチを設け下層まで掘り進めたところ、縄文時代晩期の杭列、さらに下層から縄文前期の遺物包含層を検出した。

⑤ 第5次発掘調査（平成15年度）

前年度に引き続き、墳丘の西裾における外堤などの関連遺構、遺物の残存状況を確認するために、4本のトレンチ（第11図15～18トレンチ）を設け、発掘調査を実施したが、関連する遺構や遺物の残存は報告されていない。

(5) 史跡指定

第1、2次発掘調査成果の報告書が刊行され釜塚古墳の歴史的重要性が明らかとなったことを受け、国の文化審議会の審査答申を経て、1982（昭和57）年5月に史跡の指定を受けた。当時の古墳に対する評価と指定内容は官報と指定通知書に簡潔に記されている。

さらに、平成13年度に実施した発掘調査によって、古墳を囲繞する外堤が新たに発見された。この成果を受け、古墳の更なる保護を図るために2019（令和元年）11月15日付けで指定範囲の追加指定の答申を受け、翌年の3月10日に官報告示された。

将来は、周濠や外堤の延長方向などの検証も進めながら、取り組みを進めていく必要がある。

昭和57年5月7日付け官報 第16578号

文化財保護法(昭和25年法律第214号)第69条第1項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定する。

昭和57年5月7日

文部大臣 小川 平二

名称	所在地	地域
釜塚古墳	福岡県糸島郡前原町大字 神在字釜塚	405番のうち実測3746.95平方メートル 右の地域に接する町道牧、宮地岳線の道路敷のうち実測356.13平方メートルを含む。

備考 地域に接する実測図を福岡県教育委員会及び前原町教育委員会に備え置いて縦覧に供する。

庁保記第2の12号

前原町長

文化財保護法(昭和25年法律第214号)第69条第1項の規定により、下記1の記念物を下記2によって史跡に指定します。

昭和57年5月7日

文部大臣 小川 平二

記

- 1 (1) 名称
(2) 所在地及び地域 別添のとおり
- 2 指定理由
 - ア 基準 特別史跡名称天然記念物および史跡名称天然記念物指定基準 史跡1(古墳)による。
 - イ 説明 釜塚古墳は、唐津湾の東端に面した低地に築造された円墳で、周濠を含めた径が72mにも及ぼうとする大規模なものであり、古式の横穴式石室を有している。
本古墳は、石室の形態などから5世紀中葉から後半頃に築造されたものと推定され、北部九州におけるこの時期の指標となるもので、同地方の墓制を考える上で不可欠の古墳である。
- 3 官報告示 昭和57年5月7日付け文部省告示69号

令和2年3月10日付け文部科学省告示 第23号 (抜粋)
 文化財保護法(昭和25年法律第214号)第109条第1項の規定に基づき、次の表の上欄に掲げる史跡に同表の下欄に掲げる地域を追加して指定したので、同条第三項の規定に基づき告示する。
 令和2年3月10日 文部科学大臣 萩生田 光一

名 称	所 在 地	地 域
釜塚古墳	福岡県糸島市神在字釜塚	403番2、415番4、417番1

(6) 第1次環境整備と日常管理

平成14～16年度にかけて実施された市営神在団地の建て替え事業に合わせて、釜塚古墳の将来的な整備の方向性について協議が行われた。そのなかで、現在の指定範囲だけでは墳丘の東裾とその周辺が未指定のため、一体的な保護・整備が不十分となる可能性が高く、墳丘東裾付近は市道として供用されていることもあり、現状での整備は難しいことが予測され、これらの課題を解決するため追加の発掘調査を行い、その後に改めて協議を行うこととなった。

しかし、古墳の西裾から周濠にかけての一带は、既に遺構の内容が把握され公有化も完了している。また、居住域にも隣接していて保護環境の改善を図る上でも部分的に先行的な整備は必要と判断された。そこで、都市公園整備の一環として周濠の位置と圍繞範囲について表面表示などの工事が実施され、平成16年度末に竣工した。整備にあたっては、立体的な構造物の設置は控えたものの、平成13年度の成果を生かした渡り土堤や外堤について、植栽等で表示することで対応した(図版4、第5図)。

以後は繁茂した樹木の伐採、定期的な除草管理を行い、歴史学習や市民の憩いの場としての活用に供し現在にいたる。

平成23年度には、近隣の加布里小学校6年生の卒業記念制作(藤本一郎教諭主担当)として2体の石見型木製品が制作され、現地渡り土堤の墳丘側に並べて立てられた。原資料と同じクヌギ節材を用い、厚さ以外は原資料と法量を合わせていただくなどご配慮いただいている。卒業記念として長く関係者の心に留めていただければ幸いである。



第5図 舗装と芝生で表示された周濠と渡り土堤
 手前左の灌木植栽は外堤推定位置(2005年3月)

註

- 1 糸島郡教育会 1929 『糸島郡誌』
- 2 前原町 1941 『前原町誌』
- 3 小林行雄 有光教一 森貞次郎 1952 『一貴山銚子塚古墳の研究』 福岡県教育委員会
- 4 埋蔵文化財写真技術研究会 1995 『高橋猪之介写真集英』埋文写真研究 別冊
- 5 石山勲 1981 『釜塚』 前原町教育委員会
- 6 岡部裕俊 2003 『国史跡釜塚古墳』 前原市教育委員会

3. 調査の組織

これまでに実施された調査等事業にかかる組織は以下のとおりである(肩書は調査当時)。

第1次調査(昭和48年度)

期間 1973年11月24日～12月15日

調査指導委員 原田大六 大神邦博

調査主体 前原町教育委員会

総括	教育長	清水利美
	教育課長	浜地哲輔
	社会教育係長	山崎信行
	社会教育主事	菊竹利嗣
福岡県教育委員会		
	文化課長	森 秀俊
	課長技術補佐	藤井 功
	同 文化係長	川崎隆夫
	同 技術主査	宮小路賀宏
	同 技師	石山 勲(調査主任)
	調査補助	楠原和彦 諸岡利寛

第2次調査(昭和55年度)

期間 1980年10月6日～10月31日

調査主体 前原町教育委員会

総括	教育長	豊島禮蔵
	社会教育課長	野坂猷英
	社会教育係長	西 孝明
	社会教育主事	川村 博
福岡県教育委員会		
	文化課長	藤井 功
	同 調査第1係長	宮小路賀宏
	同 技師	石山 勲(調査主任)
	調査補助員	高田一弘 日高正幸
	國學院大學院生	池田栄史(現琉球大学国際地域創造学部教授)

第3次調査(平成13年度)

期間 2001年11月6日～3月31日

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	三嶋利彦(～6月) 菊竹利嗣(7月～)
	教育部長	有田種之
	文化課長	松井 昇
	文化課参事	小池史哲

文化財係長	林 覚
主査	岡部裕俊（調査担当）
嘱託	牟田華代子（調査担当）

第4次調査（平成14年度）

期間 2002年8月3日～8月31日

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	三嶋利彦
	教育部長	上田勇介
	文化課長	小池史哲
	文化財係長	林 覚
	主査	岡部裕俊（調査担当）
	主事	江崎靖隆（調査担当）

第5次調査（平成15年度）

期間 2003年8月12日～10月1日

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	菊竹利嗣
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信
	文化課長補佐	中村鉄哉
	文化財係長	岡部裕俊
	主査	瓜生秀文（調査担当）
	主事	牟田華代子（保存処理担当）

報告書作成（令和元年度）

調査主体 糸島市教育委員会

総括	教育長	家宇治正幸
	教育部長	井上義浩
	文化課長	岡部裕俊（報告書作成）
	文化課長補佐	村上 敦
	文化課主幹	平尾和久
	同	江野道和
	主事	秋田雄也
庶務	文化・図書館係長	中村陽一郎
	主事	岸根麗香

なお、平成30年度から令和元年度にかけて行われた釜塚古墳の追加指定事務において、文化庁文化財第二課川畑純、井上麻子、福岡県教育委員会文化財保護課入佐友一郎、宮地聡一郎、城門義廣、岸本圭各氏には、懇切なご指導・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

II. 位置と環境

1. 地理的環境

古墳は標高108mの宮地嶽の西裾と長野川の流路に挟まれた標高5mほどの微高地上に立地する。宮地嶽から長野川に向けて派生した2つの尾根に挟まれた沖積地で、長く古墳の周囲は沢から湧き出た水を用意として谷水田が営まれており、1947（昭和22）年に撮影された古墳の航空写真には、墳丘の周囲にめぐらされた水田畦畔の姿が写しだされている（図版1-a）。

古墳の西200mには長野川が北流する。脊振山系の一峰、羽金山（900m）を源として玄界灘に注ぎ込む総延長11kmの短い河川であるが、流域には縄文時代以降の長きにわたる人々の生活痕跡が残されている。

さて、現在の長野川河口は古墳の北1kmほどに位置するが、この一帯は江戸時代の干拓により陸化が進められたことで河道も北に延伸することとなり、明治時代には東から合流する多久川、さらに雷山川とも合流して泉川と名を変え、深江湾に注ぎこむ現在の流路となった。しかし、こと弥生～古墳時代にかけては、深江湾が古墳の裾近くまで迫り、墳頂に立てば、眼下には玄界灘に続く波静かな入海が広がっていたものと推定される。

2. 長野川流域の古代遺跡

釜塚古墳の西を流れる長野川は、前述のように総延長11kmほどの河川であるが、この河川域での人々の生活は古く縄文時代早期まで遡る。宇美八幡宮境内や白糸熊野神社境内、本遺跡群などで楕円形や連続鋸歯文が施された押型文土器片が出土している。

縄文時代後期を迎える頃、標高400～500mに位置する野呂高原、白糸遺跡、長野宮ノ前遺跡、本遺跡群では集落が出現し、住居跡や墓などが調査されている。

弥生時代になると、中下流域の微高地に集落が営まれるが、なかでも長野宮ノ前遺跡は、弥生時代早～前期の支石墓を含む墳墓群が確認されたことが知られる。

弥生時代後期には飯原、本、東、神在、加布里遺跡群など長野川を臨む微高地上に一定の距離を保って集落が営まれたことが確認されている。この時期の集落は古墳時代前期まで継続して営まれていたものが多く、発掘調査が実施された遺跡も増加する。

飯原門口遺跡は、長野川中流域を広く見渡すことができる高台に営まれた集落遺跡で、弥生中期～古墳前期まで継続する。東高田遺跡は、長野川河畔の微高地上で検出した集落遺跡で、5mの間隔を空けて並行して50m続く弥生後期の溝を検出したが、同様の溝が北側約500m（東スス町遺跡）でも確認された。同一の道路遺構である可能性が高い。

東下田遺跡では弥生後期～古墳中期までの住居跡を30棟ほど検出し石錘など漁労具が出土しているが、古墳前期～中期の住居跡では、鍛冶滓、陶質土器、水鳥形土製品が出



第6図 東二塚壺棺墓出土ガラス釧（東京国立博物館蔵）

土しており、漁労だけでなく大陸との交易や生産活動などにも携わっていた可能性がある。

弥生時代の有力墓としては鉛ガラス製の釦（第6図）、管玉、小玉や朱などが副葬された弥生終末の東二塚甕棺墓が有名で、被葬者は伊都国域における有力首長の1人と推定される。

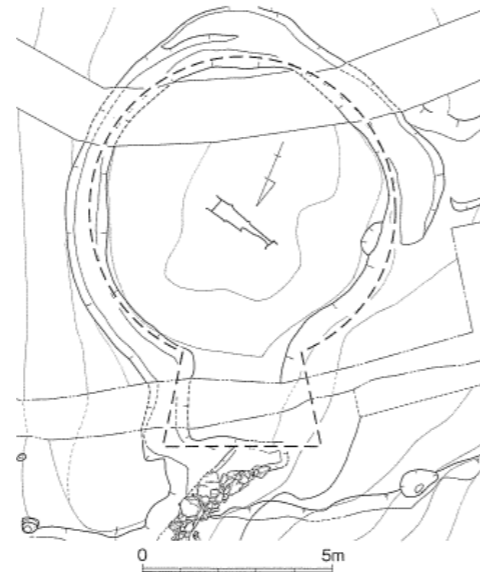
古墳にも注目されるものが多い。本林崎古墳（全長35m）は円圏座内行花文鏡の破鏡が墳裾の箱式石棺墓から出土し、当該地方でも最古段階の前方後円墳と考えられる。前方部は開墾に伴う造成土により埋没しているが、地下には墳丘が良好に残存していると考えられ、確認調査の実施が望まれる。

前期後半の東真方C-1号墳では、方格T字鏡（直径9.5cm）を副葬した箱式石棺が主体部とする小円墳と報告されていた。筆者は小型の前方後円墳であることを指摘したが、平成28年度の発掘調査で前方部が確認され、全長20mほどの小型の前方後円墳（第7図）であることが確認された。

前期後半と推定されている一貴山銚子塚古墳（全長103m・第8図）は、1950（昭和25）年に京都大学と福岡県教育委員会による合同調査が行われ、三角縁神獸鏡8面、内行花文鏡1面、方格規矩四神鏡1面、玉類、鉄器などが原位置をほぼ保った状態で出土した稀有な古墳として報告され、その後の古墳研究に大きな影響を与えたことは周知のことである。後続して築かれた釜塚古墳とともに、同種の古墳としては玄界灘沿岸で最大規模を誇り、この築造背景の解明は当該地方の古墳時代を考える上でも重要課題の一つといえる。

また、平成27年度に市教育委員会が発掘調査を実施した荒毛2号墳（第9図）は、後円部径45m、前方部長30m、全長72mに達する堂々とした規模を有し、斜面には大柄の葺石を丹念に積み上げていた。後円部から大型の箱式石棺が発見され、長野川流域では一貴山銚子塚古墳に先行する首長墓である。

荒毛2号墳の東には史跡雷山神籠石が立地する旗振山の山頂を見上げることができる。荒毛2号墳を含む一帯は、『倭名抄』に記された怡土郡七郷の一つ奈加乃（長野）郷の推定地で、周囲一帯には後期～終末期の古墳群（長野古墳群等）が分布する。旧怡土郡における有力集落であったことが、神籠石の築城背景・原動力のひとつであったと推察される。



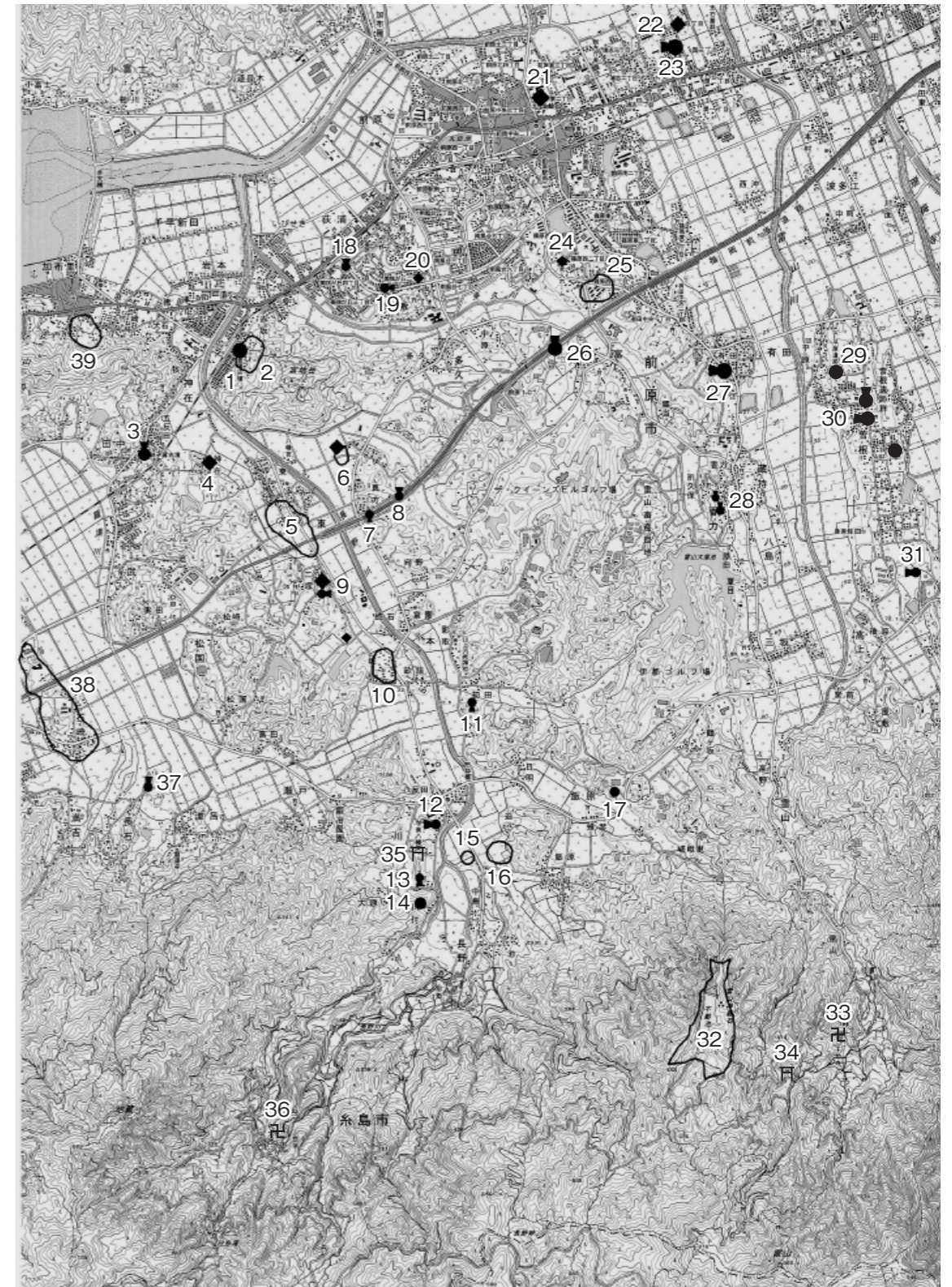
第7図 東真方C-1号墳測量図(1/200)



第8図 一貴山銚子塚古墳後円部から前方部をのぞむ



第9図 発掘調査中の荒毛2号墳を前方部側から後円部をのぞむ



第10図 長野川流域とその周辺における主要遺跡・古墳・古代寺院の分布(1/50,000)

- 1.釜塚古墳 2.神在横島遺跡 3.一貴山銚子塚古墳 4.神在弥生後期甕棺墓群 5.東遺跡群 6.東五反田遺跡 7.東真方A-1号墳
- 8.東真方C-1号墳 9.東二塚遺跡・東二塚古墳 10.本遺跡群 11.本林崎古墳 12.荒毛2号墳 13.長嶽山1号墳 14.長尾山古墳
- 15.長野宮の前遺跡 16.飯原門口遺跡 17.日明13号墳 18.砂魚塚1号墳 19.立石1号墳 20.大浦前田遺跡 21.上町向原遺跡
- 22.潤地頭給遺跡 23.潤神社古墳 24.伏龍遺跡 25.上罐子遺跡 26.多久口木3号墳 27.有田1号墳 28.香力天神前1,2号墳
- 29.平原遺跡 30.曾根古墳群 31.高上大塚古墳 32.雷山神籠石 33.雷山千如寺 34.雷神社 35.宇美八幡宮 36.熊野神社(小蔵寺跡)
- 37.長石二塚古墳 38.石崎遺跡群(曲り田遺跡を含む) 39.加布里遺跡群

Ⅲ. 調査の記録

1. 各次調査のトレンチ・調査区概況

釜塚古墳の調査は、墳丘とその周囲に計18本のトレンチを設定し、墳丘形態・構造の確認、墳頂部の横穴式石室の測量、清掃、羨道～墓道の構造確認の調査が主な目的であった。

各次調査とトレンチの概要は以下のとおりである。

(1) 第1次調査

第1次調査では、墳丘規模と周辺遺構の確認を主な目的とし、1～4トレンチまで計4ヶ所にトレンチを設定した(第11図)。いずれも、宮地嶽からの伏流水と、これに起因して発生した壁面の崩壊に悩まされたため調査は難航し(図版4-b)、第3トレンチの調査は途中で断念することとなった。

1 トレンチ(図版4-b, 第12図1 Tr)

墳丘南裾に針北から150度、西に向けて設定された長さ30m、幅3mのトレンチである。耕作土から床土層下までの深さは概ね40～50cmで、その下の淡青灰色粘質土から周濠が掘り込まれていた。

墳丘から周濠にかけては青灰色あるいは灰色を呈する厚い粘質土が古墳時代の遺構面をなしているが、西端に移ると粘質土層は薄くなり、その下に砂質土と粘質度の互層が堆積していた。第4次調査では、これらの層から縄文時代前期～弥生時代までの土器堆積層が確認された。灰色粘質土、褐色の粘質土、砂質土の互層で一部に腐食植物が多く含まれていた。更にその下層では灰褐色砂質土層が厚く堆積していた。

周濠は幅7.4m、その深さについて『釜塚1981』では、30～45cmと報告されている(第12図)。しかし、周濠の断面土層をよくみると、周濠底面の下層にレンズ状に堆積する植物遺体層が報告されている。植物遺体層は第3次調査でも周濠の下層で確認され、この層のさらに下に墳丘から流入した青灰色粘質土が確認されており、周濠の底面はこの下面にあった。

このことから、第1次調査では流入した青灰色粘質土と地山(青灰色粘質土)の分層が不十分であったために、上層の青灰色の流入土層を地山と誤認した可能性がある。この場合、周濠の深さは浅く見積もっても60cmほどと推定される。

墳丘裾の近くでは葺石を検出したが、耕作土の層直下であり辛うじて腰石が残存している程度であった。これから墳丘に向けて4.5mにわたり盛土が削平されていたことになる。葺石から内側の土層の観察では、青灰色シルトの地山上に灰褐色粘質土、灰黒色粘質土、混黄色褐色系粘質土が厚さ40cmほど互層をなして堆積しており、わずかではあるが墳丘盛土が残ることも確認された。

2 トレンチ(図版4-c, 第12図2 Tr)

墳丘の南に針南から概ね40度の方向に設定した長さ15.6m、幅3mのトレンチである。深さ50cmの耕作土、床土層があり、その下の青灰色粘質土層上から掘り込まれた周濠を確認した。検出した周濠は幅7.7m、深さは周濠肩から最も深いところまででも30cmほどしかなく、1ト

レンチに比べると残存状況はよくない。埋土は最下層に植物遺体を含む暗灰色粘質土、その上に黒色粘質土が堆積していた。

葺石は現墳丘裾から50cmほど上で検出したが、腰石のみが残存している状況であり、各石の間にも隙間があって積み上げたようには見えない。あたかも墳丘斜面から裾にすべり落ちたような印象も覚え、原位置を保っているか若干の疑問を感じる。

3 トレンチ(第12図3 Tr)

針北から90度西方向に設定した長さ18.5m、幅2.5mのトレンチである。湧水による壁面の崩落が相次いだため、土層断面の作成の途中ではあったが途中で調査を断念し埋め戻されたが、葺石の控え積みとみられる石材が確認されており、その位置は現在の裾から4.5mの地点あたりである。周濠の埋土は黒色粘質土であった。

4 トレンチ(第12図4 Tr)

墳丘裾の東側、針北から105度方向に設定した長さ6m、幅1mトレンチで、市道の路肩裾から外に向けて設定された。墳丘裾から周濠にかけての土層の確認ができた。周濠の中央部がちょうど水田の畦畔にあたったため、これを境に東西に分けて調査された。

墳丘裾側の水田下1.1mで葺石と考えられる河原石材の集積が確認された。『釜塚1981』では葺石と推定されたが、他のトレンチで検出した葺石最下段の腰石とみられる大ぶりの石材がみられず、明確に組み上げたようにも見えないことなどを考慮すると、原位置から多少ずれ落ちた状態であったかもしれない。

仮に法面の上方から崩落した葺石材が墳裾付近に堆積したものと考えれば、概ね墳丘と考えられる。周濠の幅は8m、深さは70cmほどであった。周濠の埋土下層には植物遺体を含む黒褐色粘質土が40cmほど厚く堆積していた。

(2) 第2次調査

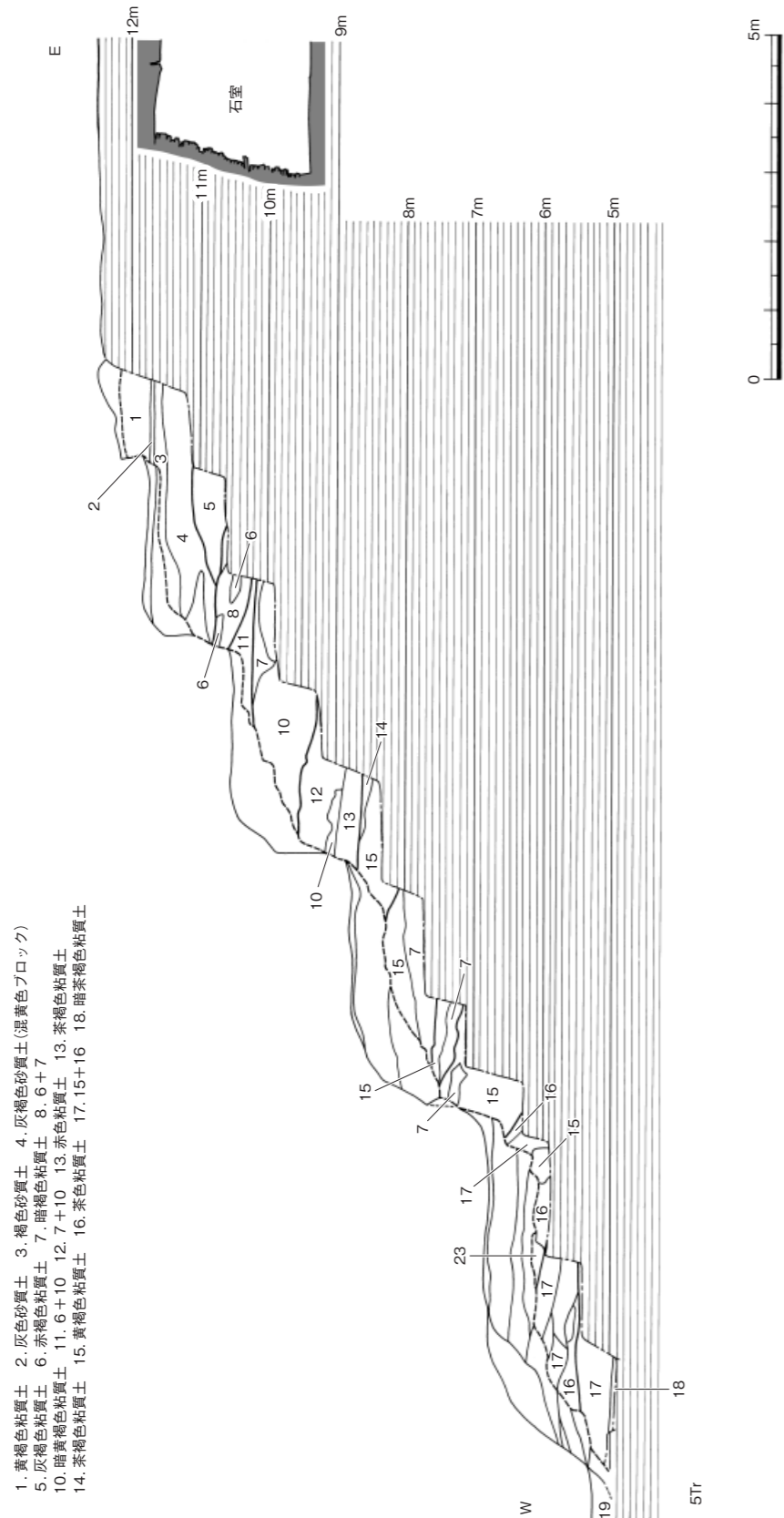
墳丘は、現状で5段のピラミッド状を呈しているが、『郡誌』の挿絵や1950(昭和25)年に高橋猪之介氏が撮影した墳丘写真では、側面観はなだらかな播鉢を伏せたような形状を呈している。現在の地形は1964(昭和39)年にミカン植樹のために階段状に造成したためで、造成直後の1964年12月に撮影された航空写真も残されている。このため、段築の有無、盛土工法など本来の墳丘形状の復元に資する資料を得ること、また、古式横穴式石室の構造を確認することを主目的として調査を実施した。

調査は短期間で成果を得る必要があり、墳丘の残存状況を確認するため墳丘斜面に5トレンチを設定するとともに、横穴式石室の入口部、墓道の構造を確認するために6・7トレンチ(『釜塚1981』では6トレンチ)を設定した(第11図)。

5 トレンチ(図版19, 第13図)

墳丘西側の針北から概ね80度方向に設定した長さ18m、幅80cm～1mのトレンチで、墳頂部から裾まで設定した。墳丘の旧形と盛土構造の確認が主たる目的であったため、現墳丘から概ね1mの深さまでの掘削に留めた。

古墳は、長野川によって運ばれた砂質、粘土質土層によって形成された微高地標高3～4mの微高地上に築かれているため、墳丘はその大半が盛土によって成形されたことは当初から予



第13図 5トレンチ墳丘土層断面図 (1/100)

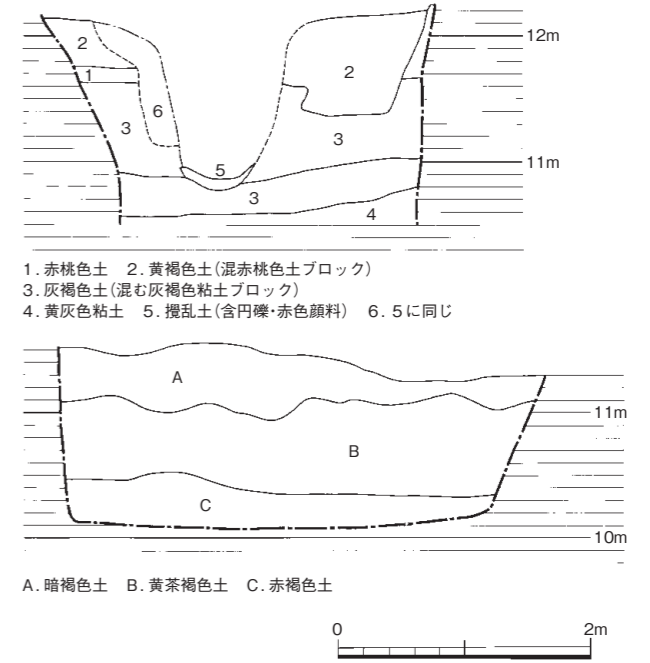
- 1. 黄褐色粘質土 2. 灰色砂質土 3. 褐色砂質土 4. 灰褐色砂質土(混黄色ブロック)
- 5. 灰褐色粘質土 6. 赤褐色粘質土 7. 暗褐色粘質土 8. 6+7
- 10. 暗黄褐色粘質土 11. 6+10 12. 7+10 13. 赤粘質土 13. 茶褐色粘質土
- 14. 茶褐色粘質土 15. 黄褐色粘質土 16. 茶色粘質土 17. 15+16 18. 暗茶褐色粘質土

想していたが、このことを土層断面で確認することができた。

6・7トレンチ (図版20-b, 第14図)

横穴式石室の羨道並び墓道を確認するために設定されたもので、『釜塚1981』では、一括して6トレンチとしていたが、本書では東西2本のトレンチとして表示している。

通常、横穴式石室に認められる玄門、羨道から水平に墳丘斜面に伸びる墓道は確認されず、墳頂から斜め43度方向に下りる竪坑状の墓道が確認された。



第14図 6・7トレンチ土層図 (1/60)

- 1. 赤褐色土 2. 黄褐色土(混赤褐色土ブロック)
- 3. 灰褐色土(混む灰褐色粘土ブロック)
- 4. 黄灰色粘土 5. 攪乱土(含円礫・赤色顔料) 6. 5と同じ

- A. 暗褐色土 B. 黄茶褐色土 C. 赤褐色土

(3) 第3次調査

第1次調査では、南部を中心に4本のトレンチで周濠の有無と残存状況、幅を確認したが、北から東部にかけて古墳関連施設の確認が不十分であったことから、この地区に造り出しが残存する可能性、また、わずかではあるが帆立貝式前方後円墳である可能性も残されていた。このためこれら課題の解決とともに周濠の形態、他関連遺構の存在を確認するために、新たに8～13トレンチを設定した (図版5・6-a, 第12図)。

8トレンチ (図版6-b・7-a, 第15図8Tr)

針北から東120°方向に設定した長さ10m、幅1mのトレンチである。墳裾は市道下に埋没していたため確認することはできなかったが、周濠の外縁を検出することができた。ここでは岸から周濠底までの深さが70cmに達し、4トレンチと同様に良好な残存状態を保っていることが確認された。

また、周濠の外縁から東に5m外側の地点で幅5mほどの断面台形を呈する盛土遺構を検出した。南にトレンチを拡張したところトレンチ主軸の直交方向に盛土遺構が延びて調査区の外まで続いていることを確認したため、さらに遺構の性格を明らかにするため9～11トレンチを新たに設定してその延長方向を探ることとした。

9トレンチ (図版7-b, 第15図9Tr)

8・11トレンチの盛土遺構の延長方向を確認するため、8トレンチの北側5mの地点に設定したところ、検出を予想した地点で類似する盛土遺構を検出した。盛土遺構の延長方向が墳丘を中心に弧を描くように築かれていることが確認できた。8トレンチと同様に盛土遺構前で地山を切り下げた後に盛り土を施していた。

10トレンチ (図版7-c, 第15図10Tr)

8・11トレンチの盛土遺構の延長方向を確認するため、9トレンチのさらに北5mに設定した。こちらでもほぼ予想した地点から同様の盛土遺構を検出した。

前二者と異なり、地山の切り下げ整地は行われず、周濠岸からなだらかな上り勾配をとる地

山上に直接盛土が施されていることを確認できた。

11トレンチ (図版8-a, 第16図11Tr)

8トレンチで確認した盛土遺構、ならびに周濠の延伸方向を確認するために設定したトレンチである。盛土遺構が30mに渡って墳丘を中心に弧を描きながら築造されていることを確認するとともにトレンチの墳丘寄りから7.3mで周濠の外縁を確認することができたが、墳丘の裾は確認できなかった。現市道下にあるものと推定される。

なお、周濠の中央部は遺構保全と発掘作業の安全を確保するために調査を断念した。

12トレンチ (図版8-b, 第17図)

針北から東40°に放射状に設定したトレンチで、長さ15mあまりとなった。墳丘寄りでは、耕作土の直下から大ぶりの塊石が姿を現したため、葺石が良好な状態で残存する可能性が高くなった。塊石群を避けながら周濠内を掘り進めると、下層から植物遺体を多く含む暗茶褐色粘質土層が現れ、これをさらに掘り進めると灰褐色のシルト質土層に到達し、この層に隠れるように埋没した石見型木製品の表装部が出土したことから、全形を確認するためにトレンチを東に向けて1m拡張し、全体を検出することができた。

また、最初に姿を現した塊石群を掘り下げると、これらは崩落した葺石材であることが判明し、その下層からさらに大きな石塊がくみ上げられた葺石を検出した。

葺石は、前述のとおり第1次調査では腰石がわずかに原位置をとどめる程度しか確認できていなかったため、旧状を把握するために、墳裾に沿って15mにわたって調査区を扇形に拡張した。

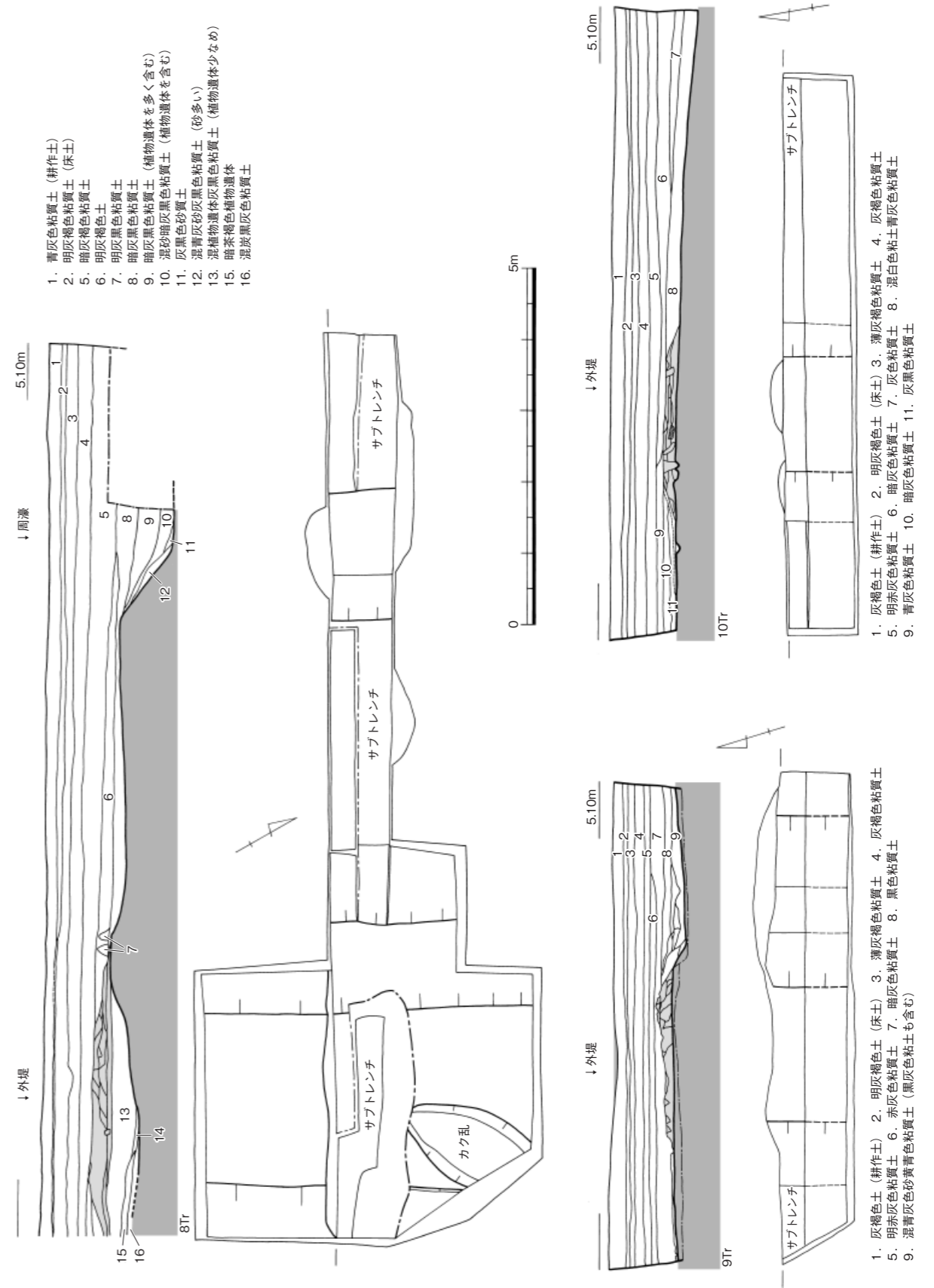
その結果、葺石列の延伸を確認するとともに、新たにトレンチ東端から8.5mの地点で周濠が幅4mにわたって途切れていることが確認され、渡り土堤の確認に繋がった。

なお、8～11トレンチで検出していた外堤の更なる北側への伸長を想定していたが、トレンチの設定範囲内では遺構を確認することができなかった。

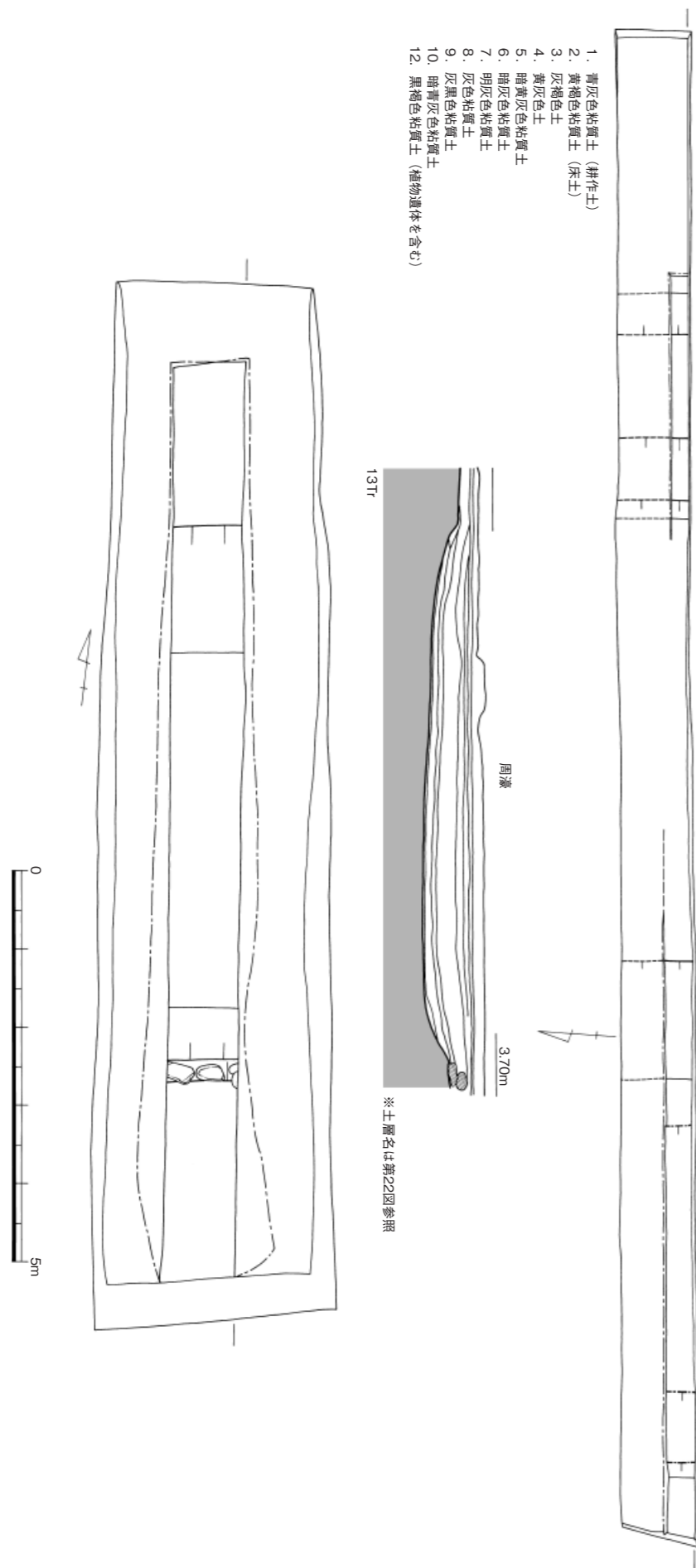
13トレンチ (図版9, 第16図13Tr)

第1次調査で完遂することができなかった墳丘西部の墳丘裾の位置と、周濠幅を確認するために設定したトレンチである。墳丘の外周は青灰色粘質土が遺構面となっており、軟弱で、含水量も多かった。また、旧地形は西側に向かって段々と下り勾配となった水田であったところを水平になるまで深く埋めあげられていたことから、西にいくほど盛土が徐々に深くなり湧水と相まってトレンチの壁面が崩壊を繰り返すなど、前次調査と同様に調査は難航を極めた。トレンチを2段掘りとし、排水を行いながら1m幅で掘り進めた。

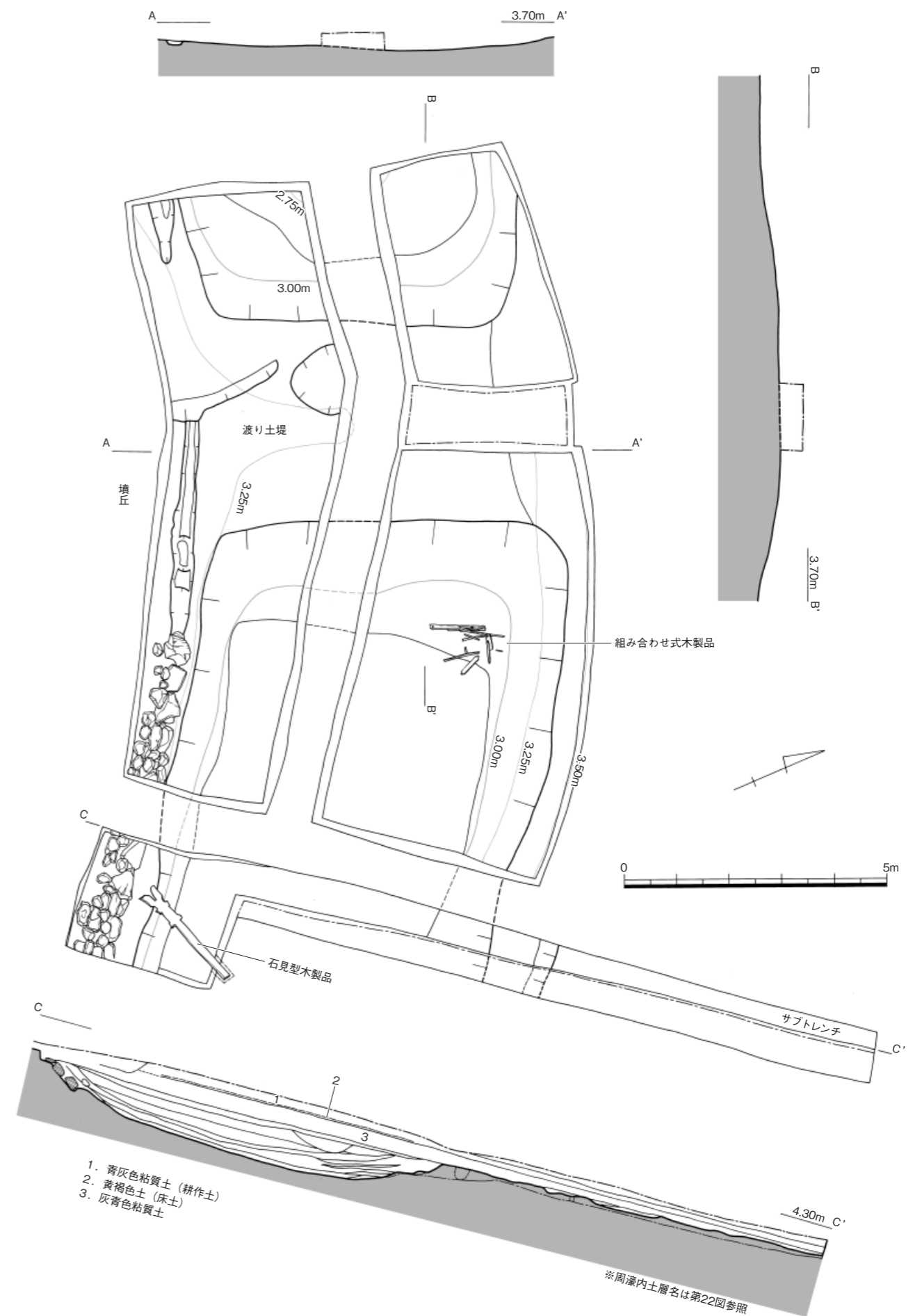
周濠の立ち上がりと墳丘の裾を墳丘裾から30cmほど上がったところで葺石の腰石とみられる大振りな塊石を確認することができた。



第15図 8～10トレンチ平面図および土層断面図(1/80)



第16図 11・13トレンチ平面図および土層断面図(1/80)



第17図 12トレンチ平面図および土層断面図(1/100)

(4) 第4次調査

墳丘の南や西裾においても現在の指定地内に周濠が廻ることは、第1・3次調査の成果によってほぼ明らかとなったが、新たに確認された外堤などの関連遺構が南～北西部にかけて伸びているか確認するために追加調査を実施した。

墳丘南側では、関連する遺構の有無を確認するため、東西16.5m、南北6.5mの長方形の調査区(14トレンチ)を設けて発掘調査を実施した(図版25-a, 第18図)。

調査区は、第1次調査の1トレンチの南端を一部取り込むように設定されたため、調査区の北壁では1トレンチの掘削痕跡を確認することができた(第19図22・23層)。

造成土(第19図1層)の下に旧水田耕作土(第19図2・3層)があり、古代～近世の遺物を包含する黒灰色粘質土層を挟んで古墳時代の遺構面を検出した。当該調査区における古墳時代の遺構面の標高は概ね標高2.9mであった。

遺構面では黄褐色粘質土と砂質土を少量検出した。外堤の痕跡である可能性も想定し付近を精査したが、確実な遺構の痕跡を確認するにはいたらなかった。

他方、弥生土器を包含する第19図5～6層には縄文前期、晩期の土器片、石器片が混入していた。この時期の遺構や遺物の残存についても確認する必要が生じたため、調査区全体を掘り下げたところ、第19図5層下から植物遺体、流木、杭などとともに、ほぼ完形に復元することができる縄文晩期の浅鉢が出土した。この層でもさらに前期土器が混じっていたため、さらに調査区中央にサブトレンチを設けて下層まで掘り進めると、第19図32層(砂質土層)から曾畑式土器や石器が出土した。近隣に当該期の遺跡が存在する可能性が高くなった。



第18図 14トレンチの土層剥ぎ取り風景

本市においては縄文時代前期の土器がまとまって出土したのは極めて珍しく、その層位を記録として保存するため土層の剥ぎ取りを行った(第18図)。

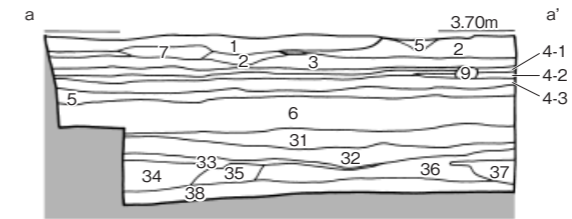
(5) 第5次調査

墳丘西裾においても現在の指定地内を周濠が廻ることは、第1・3次調査の成果から明らかとなっていたが、新たに確認された外堤などの古墳関連遺構が北西部まで広がるかを確認するため、平成15年度も引き続き発掘調査を実施した(図版28, 第19・20図)。

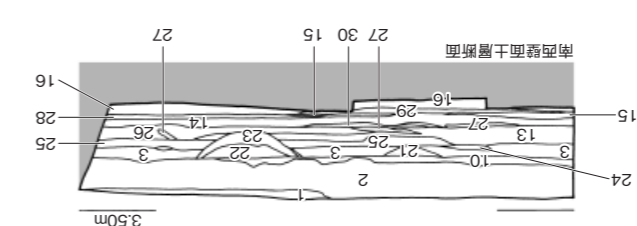
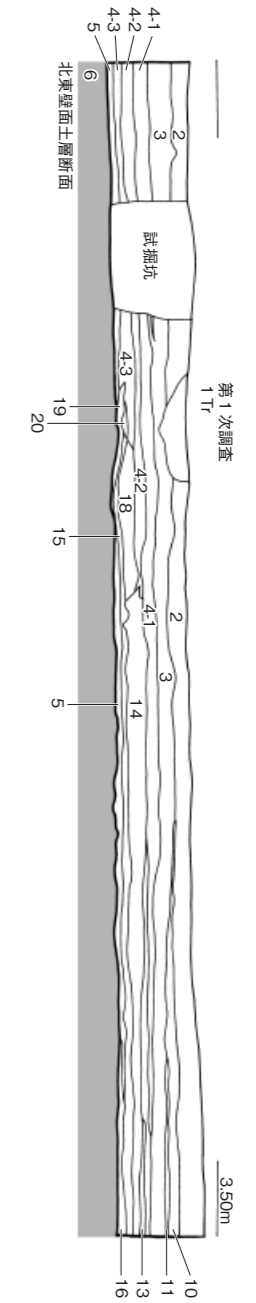
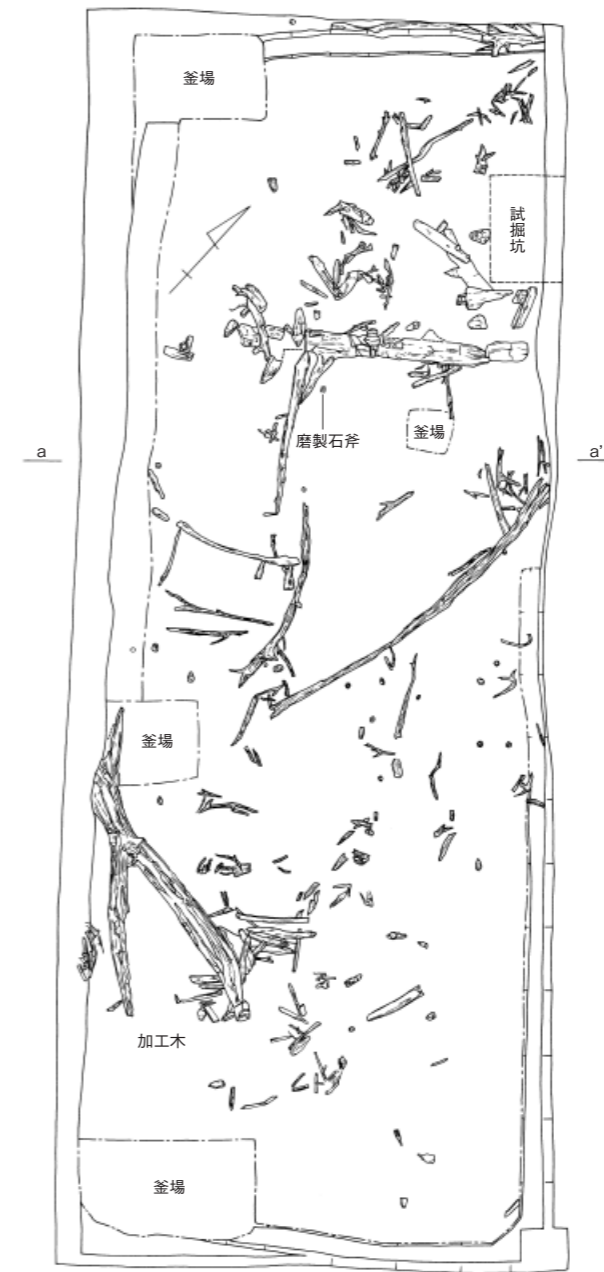
まず、周濠を確認した13トレンチの北側延長線上に15トレンチを設定した。真砂土の盛土を除去すると、青灰色粘質土(旧水田耕作土)層が現れ、以下に黄褐色粘質土(耕作土床土)、淡黒色粘質土、青灰色粘質土、砂礫互層と続いた。

古墳時代の遺構面となる青灰色粘質土層の黒色土層との境は不整合面をなし、不正形な黒色土層の嵌入が顕著で、確たる遺構は確認できなかった。これらの黒色土の嵌入は、斜め方向に直線的に延びるものが多く、担当者の力量不足もあって正確に図化できていないものも多い。

1. 暗黄緑色シルト
2. 暗灰色シルト
3. 黒灰褐色粘質土
- 4-1. 青灰色粘質土
- 4-2. 青灰色シルト
- 4-3. 暗青灰色シルト
5. 灰褐色砂質土
6. 明茶褐色砂質土
7. 明褐色砂(攪乱)
8. 黄緑色砂(攪乱)
9. 暗緑色砂(攪乱)
10. 明灰褐色粘質土
11. 明灰褐色砂質土
12. 灰色砂質土
13. 暗灰色砂質土
14. 暗茶褐色粘質土
15. 黒灰褐色粘質土
16. 明黒褐色粘質土
17. 灰褐色砂質土
18. 明青灰色粘質土
19. 明青灰色粘質土
20. 黄灰色粘質土
21. 黄灰色粘質土
22. 青灰褐色砂質土
23. 青灰褐色粘質土
24. 暗青灰色粘質土
25. 白褐色砂
26. 白褐色砂
27. 白褐色粘質土
28. 暗茶褐色粘質土
29. 暗茶褐色砂質土
30. 暗黒灰色砂質土
31. 明灰色砂(縄文晩期土器)
32. 黒灰色砂(曾畑式土器)
33. 白灰色砂
34. 明黒灰色砂(含植物遺体)
35. 白黄色砂(含植物遺体)
36. 白灰色砂(含植物遺体)
37. 茶褐色粘質土(含植物遺体)
38. 青灰色砂礫土



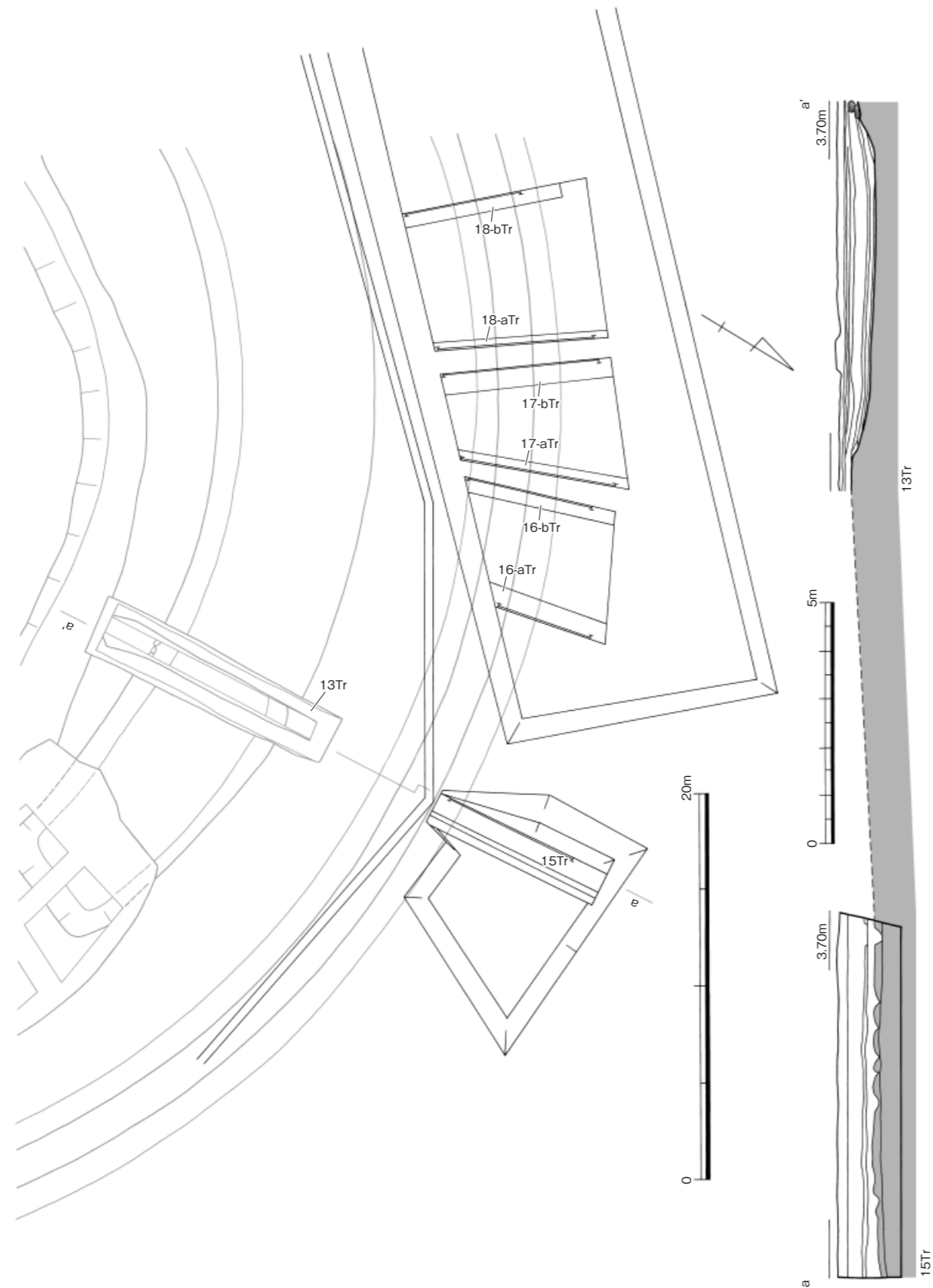
中央サブトレンチ壁土層断面



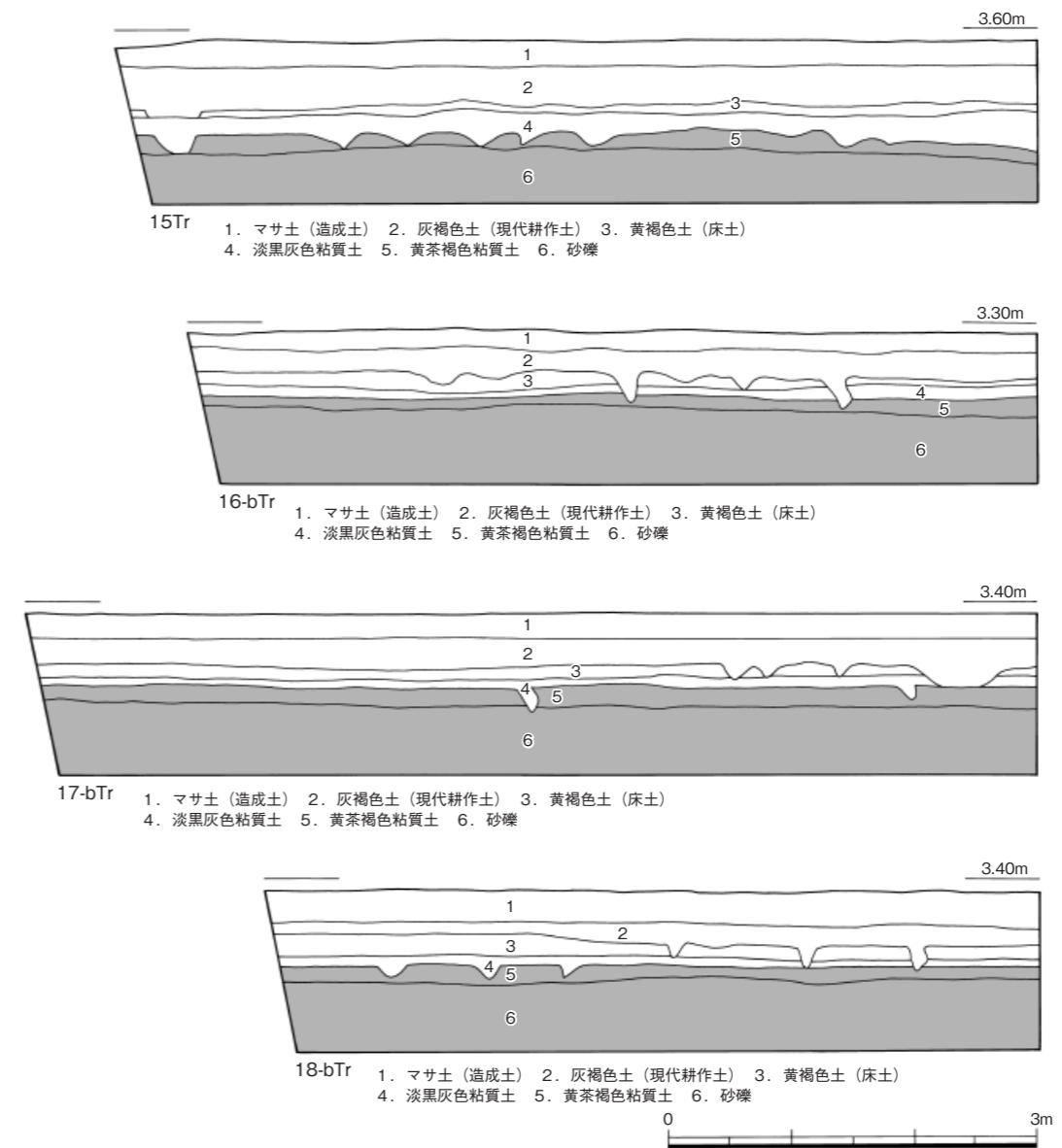
第19図 14トレンチ5層下平面図および土層断面図(1/100)

これらは人為的な遺構ではなく植物根の侵入によるものと考えられ、この地の高さや地質的な特性を考えると、湿地性植物が付近一帯に繁茂していたと推測される。

また、13トレンチと15のトレンチの土層を続けて土層を観察すると（第20図）、地山となる青灰色粘質土層は西端に向かって緩やかな下り勾配に転じており、このまま長野川の氾濫原あるいは旧河口に到達するものと予測された。



第20図 15～18トレンチ平面図(1/300)および13・15トレンチ土層断面図(1/120)



第21図 15～18トレンチ土層断面図(1/60)

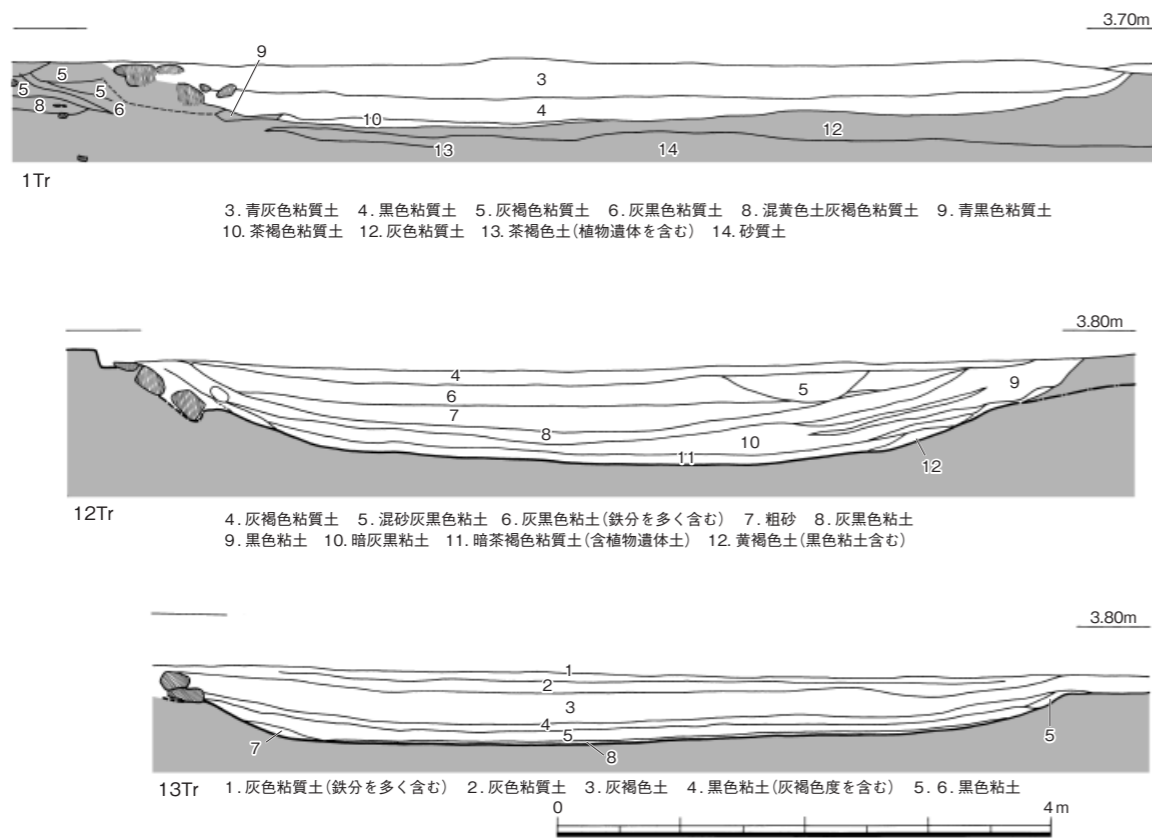
2. 釜塚古墳

(1) 周濠 (図版3・9-b~10, 第11・22図)

釜塚古墳では、墳丘周囲を周濠が廻っていることは第1次調査の時点で明らかとなっていた。しかし、どのトレンチも掘削と同時に大量の湧水がはじまり、壁が崩落を繰り返した。3トレンチでは調査を断念せざるをえなくなるほどで、調査の遂行を阻んだ。

古墳は、標高3~5mの低湿地に位置しており、古墳の基層は長野川の長年の堆積作用により形成された湿潤な粘質土壌である。また、背後の宮地嶽の谷間に浸透した雨水の伏流水は、山裾に位置する古墳周辺に集積されるため、周濠の掘削は大量の湧水を誘発する要因となったものと考えられる。古墳時代の遺構面は淡青灰色の厚いシルト層上にあるが、この下層にある混砂粘質土層から多量の湧水を確認している。

周濠の深さはさほどなく、最も深い12トレンチでも岸から1mほどに留まる。周濠底面の標高は、1トレンチで2.8m、2トレンチで2.8m、3トレンチで2.8m、4トレンチで3.1m以下、8トレンチで3.05m、11トレンチでは3.3m以下、12トレンチで2.75m、13トレンチで2.8mを測り、周濠の底面は概ね2.8~3.1mのフラットな状態を意識して掘削されているとみられるが、渡り土堤の東裾では2.5mの箇所もあり、この付近は少し深めに掘削されている。貯水を意識したものかは判然としないが、8・11・12トレンチでは周濠底に植物遺体の厚い堆積層が形成され、渡り土堤の東裾付近では、後述するように木器が良好な状態で残存していたことは、この地区における湛水量の豊富さをうかがわせる。



第22図 1・12・13トレンチ土層断面詳細図(1/60)

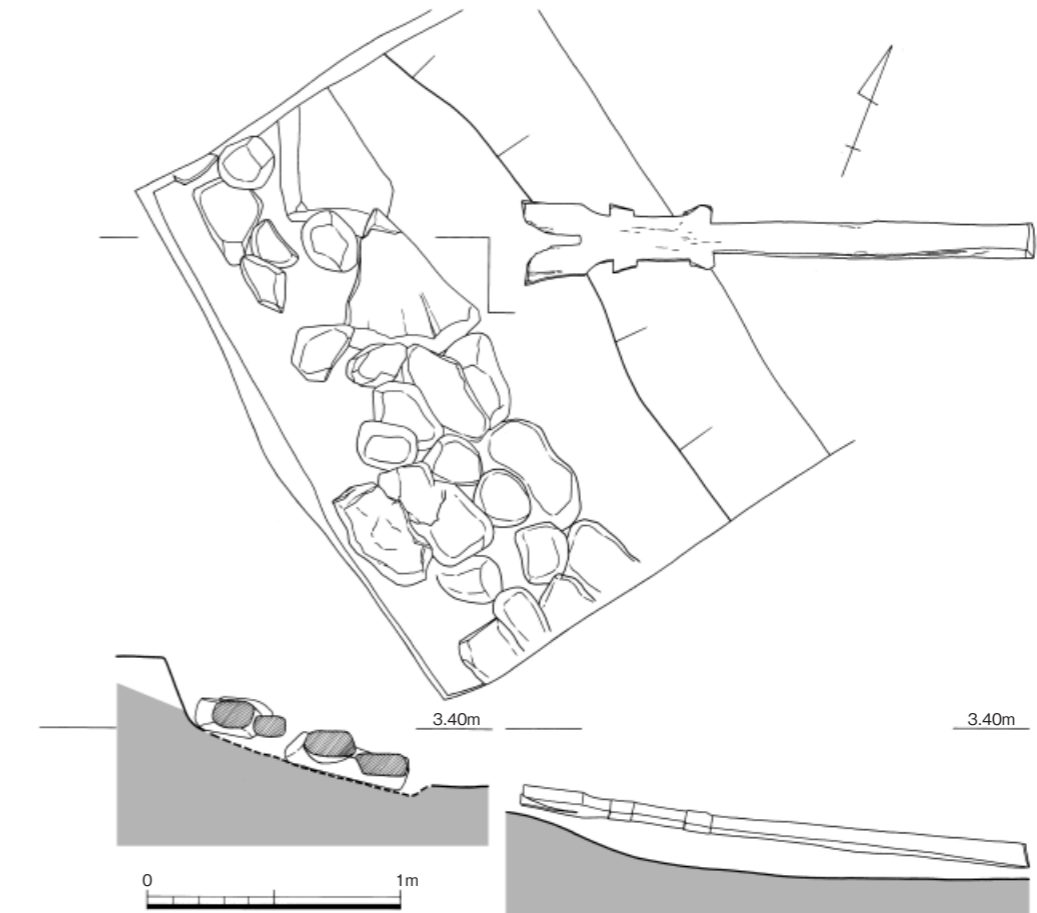
木器群はこれら植物遺体層の直下から出土していることから、周濠周辺における植物の生育が活発化する前のおそらく古墳築造後あまり時間を置かない時に沈んでいたことがうかがわれ、木器は比較的良好な状態を保っていたことから、常時地下水位の高い状況下にあったものと考えられる。

周濠内からの出土遺物としては、埴輪片、弥生土器、木器等があるが、埴輪の出土量は意外と少ない。墳丘は昭和39年に果樹園利用のために段々畑に開墾されたにも関わらず、墳丘上でもさほど多くの埴輪片は出土していないことから、当古墳での埴輪の使用総量が少なかったのではないかと考えられる。

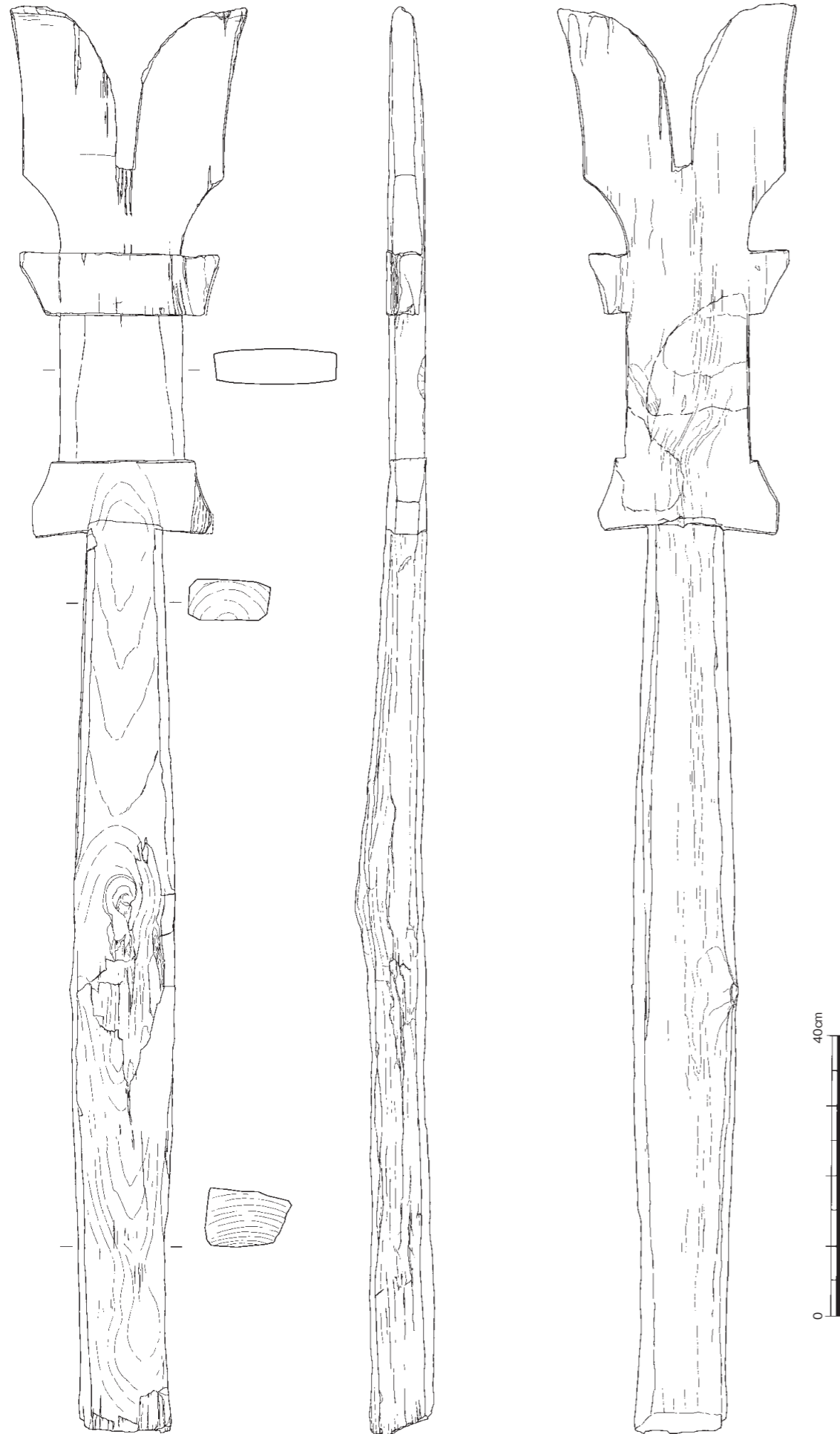
なお、弥生中期の土器の出土量が多く、後期~古墳前期の土器、さらに奈良時代の須恵器、土師器片なども出土している。近隣の神在横島遺跡の遺構、出土遺物の傾向とも符合しており、長野川河口に近い古墳周辺一帯におけるいにしえ人の営みの一端をうかがえる。

周濠からの出土品で特筆されるのは、12トレンチで出土した石見型木製品である。周濠埋土の下層から厚い植物遺体層を検出し、その下層から出土した。木製品は全長205cmで、二股に分かれた頭部を墳丘斜面の葎石下にもたれかけるように沈んでいた(第22図, 図版17)。

石見型木製品は近畿地方を中心に分布し墳丘上に埴輪と併用して樹立して使用されたことが知られる。近畿では長年墳丘に立てられたものが地際の腐食や表飾面の破損劣化によって周濠に転落したものが発見されることが多く、このため器表面が破損劣化、折損したものが大半で、本例のようにほぼ完形で傷みも少ない状態で出土する例は極めて稀と言える。その要因や使用方法、埋没にいたる過程については興味惹かれるところである。



第23図 12トレンチ石見型木製品出土状況図(1/30)



第24図 石見型木製品実測図(1/8)

また、渡り土堤を跨いで東側の外縁寄り隅角の底から、小口に柄を削り出した板が3枚、対照的に3個のホゾ穴を板面に開けた板が1枚、数ミリの厚さに削った幅3cmほどの板材が多数、一塊となって出土した(第24図)。あたかも束ねていたものが水面に漂って四散したような出土状況であったことから、一括して遺棄された木器群と推定した。柄と柄穴の計測値も近似することから、少なくとも厚手の板4枚は杵状に組み合わせて使用した製品であった可能性が高い。葬送の儀礼に用いられた用具であろうか。

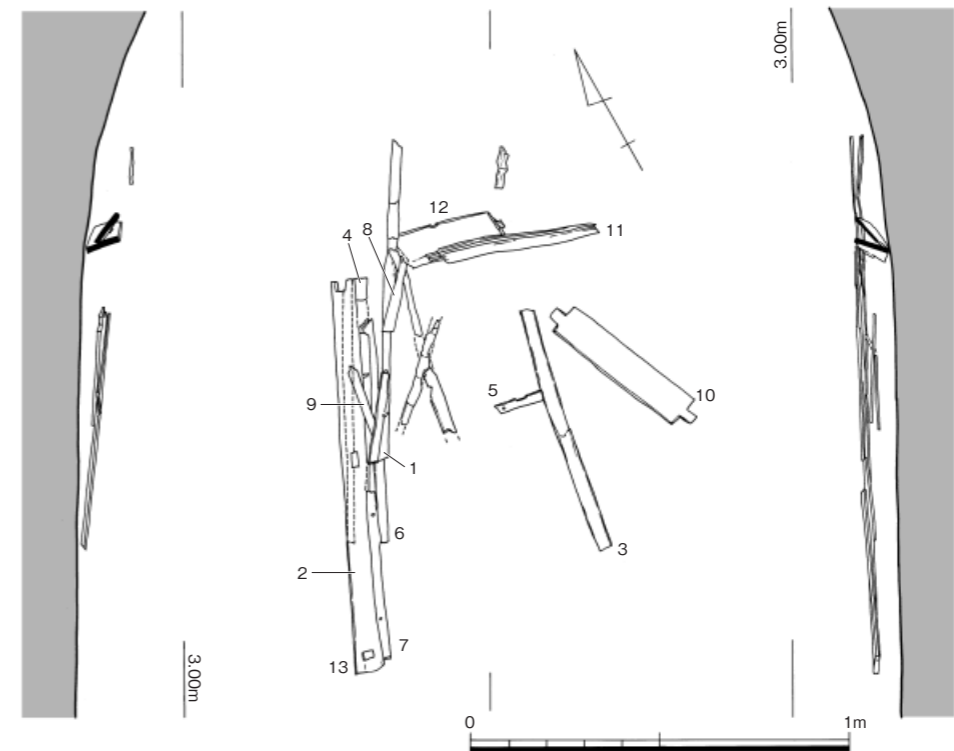
石見型木製品(図版29, 第23図)

一部に剥離、欠損が認められるものの、ほぼ完形で出土している。

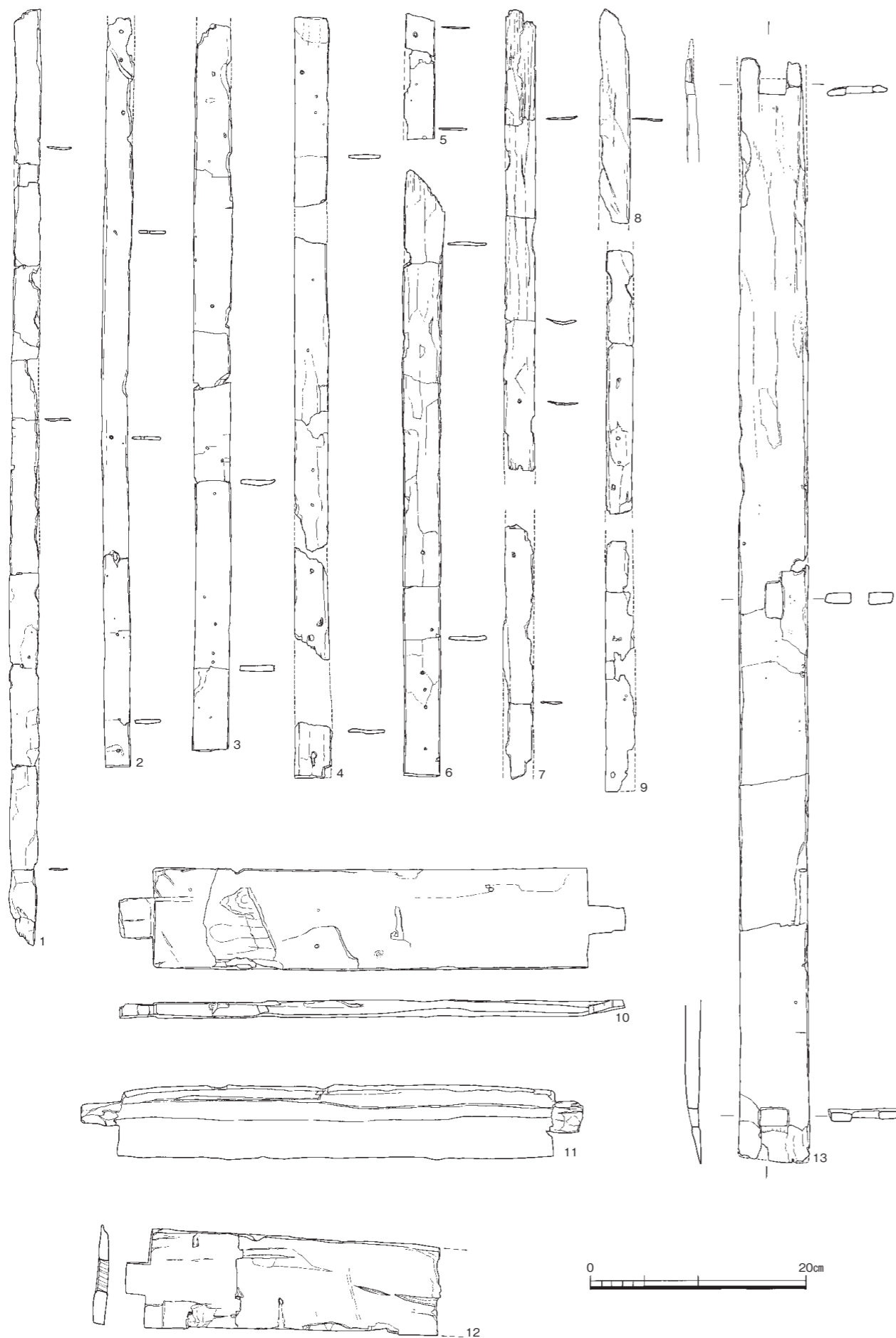
クヌギ節材を用いており、全長204.8cmを測る。各部名称については鈴木裕明氏の呼称に従う。表飾部は長さ76.4cm、最大幅34.5cm、厚さ4.5~5.0cmを測る。第1、第2段帯は表面だけ厚く削り出しており、角状突起と中央部との境には明瞭な段を削り出す。角状突起部の側縁部は弧を描きながら2段にすぼまり、第1段帯の上縁はほぼ水平に張り出すのに対し、第2段帯の下縁はわずかに下方に垂れる。

表面には線刻、彩色等の加飾は認められない。出土状況写真(図版17-b)で裏面中央部が黒化しているが、出土時に表層面が発掘具によって薄く削られて酸化したことによる。

基部は、長さ128.8cm、最大幅15.2cm、厚さは6~9.6cmを測り、節が残る中央部が最も厚い。この節を境に上半部では表面加工が丁寧で隅角の面取り加工は行われていない。また、下方に向かって徐々に厚みを増しており、表面に軽く炙った焼痕跡も認められる。近畿地方の古墳出土例では、基部を地中に埋め込んで使用していることから、その際の耐久性を確保するとともに防腐効果を狙ったものとみられる。



第25図 組み合わせ式木製品出土状況図(1/20)



第26図 組み合わせ式木製品実測図(1/8)

組み合わせ式木製品 (図版30, 第25図)

総数10数枚の板材で実測可能な13点を示す。形状により三種に大別され、最も多いのが厚さ2~3mm、幅3cmほどの薄板である。少なくとも9枚が確認でき、折損しているものが多い。最も長い1は、長さ87.2cm、5は71cmを測る。板面には不規則に小円孔が認められるが、虫類等による食害などによるものあり判別が難しいものもある。

柄付板は3枚である。10は、ほぼ旧形を残し長さ46.7cm、幅9.4cm、厚さ1.6cmを測る。11は、長さ46.4cm、幅7.1cmを測り、側縁の片側が乾燥により収縮している。12は、一方が折損し残存長29.2cmで、幅9.3cm、厚さ1.0cmを測る。

方形の柄穴3個を有する板13は、全長102.4cm、幅6.2cm、厚さ1.2cmを測る。

両小口とも先端は徐々に薄くなるように加工され木口の隅角は直角ではなく斜めに削り出す。柄穴は両端で板の主軸に直行方向に、中央では平行して穿たれており、それぞれの計測値が微妙に異なる。柄付板と「日」の字形に組み合わせて使用した可能性が高い。

(2) 渡り土堤 (図版12・13, 第17図)

12トレンチでは、墳丘裾から良好な状態で葦石を検出したため、西に調査区を拡張したところ、途中で葦石と周濠が途切れさらに5mほど掘り進めたところ、再び周濠の掘り方と葦石の落とし込み溝を検出した。地山削り出しの渡り土堤である可能性が高まったため、土層観察畔を残して外縁部に向けて調査区を拡大して遺構の規模、形状等を確認した。

渡り土堤は、針北から東21°方向に設けられ、長さ6m、幅7mほどを測る。高さは、現状の周濠底面と渡り土堤との比高差は40cmほどと低く、横断面の観察でも周濠底面からの立ち上がりはゆるやかで、側面に葦石等の護岸は施されていない。また周濠への土砂の流れ込み量も少ないことなどから、現状よりも顕著に高いものではなかったものと推定される。

一方、墳丘の1段目をめぐる葦石列が、渡り土堤との接続部だけ幅5mにわたり途切れている(図版13-b・14-a)のを重視すれば、現状よりも幾分か高かったか、あるいはここに墳丘への昇降用のスロープが設けられていた可能性がある。将来の墳丘側での調査が期待される。

(3) 外堤 (図版10~11, 第11・15・27図)

外堤は8~11トレンチで検出した。

8トレンチでは、周濠の掘り方の肩から外に向かって3.8mにわたって地山の青灰色シルト層を削ってわずかな下り勾配をとる平坦面が整地されるが、そこから外側に上り勾配へと転じ、高さ20cmの位置から厚さ5cmほどの灰黒色粘質土を水平に敷き、さらにその上に青灰色、灰色、白色粘土をブロック状に並べて築き固め、低い断面台形状の土手状遺構が築かれていた。粘土は周濠寄りでは粘土塊の細かな単位が観察できたが、外寄りでは小さなブロック単位は確認できず、混灰褐色粘土交じりの青灰色シルトを用いて一気に盛土されたとみられる。

現存する盛土の高さは20cm、基底部からの高さは47cmほどとなる。盛土はトレンチを南北に横断してさらに調査区外に伸びていた。土手の幅は確認できた範囲で5mを測るが、東裾はトレンチの外側まで続いており、その幅は6m近くになるものと推測された。周濠掘り方と同一層(第15図8 Tr 8層下)で確認したことから、古墳と一体的に築造された構造体であること

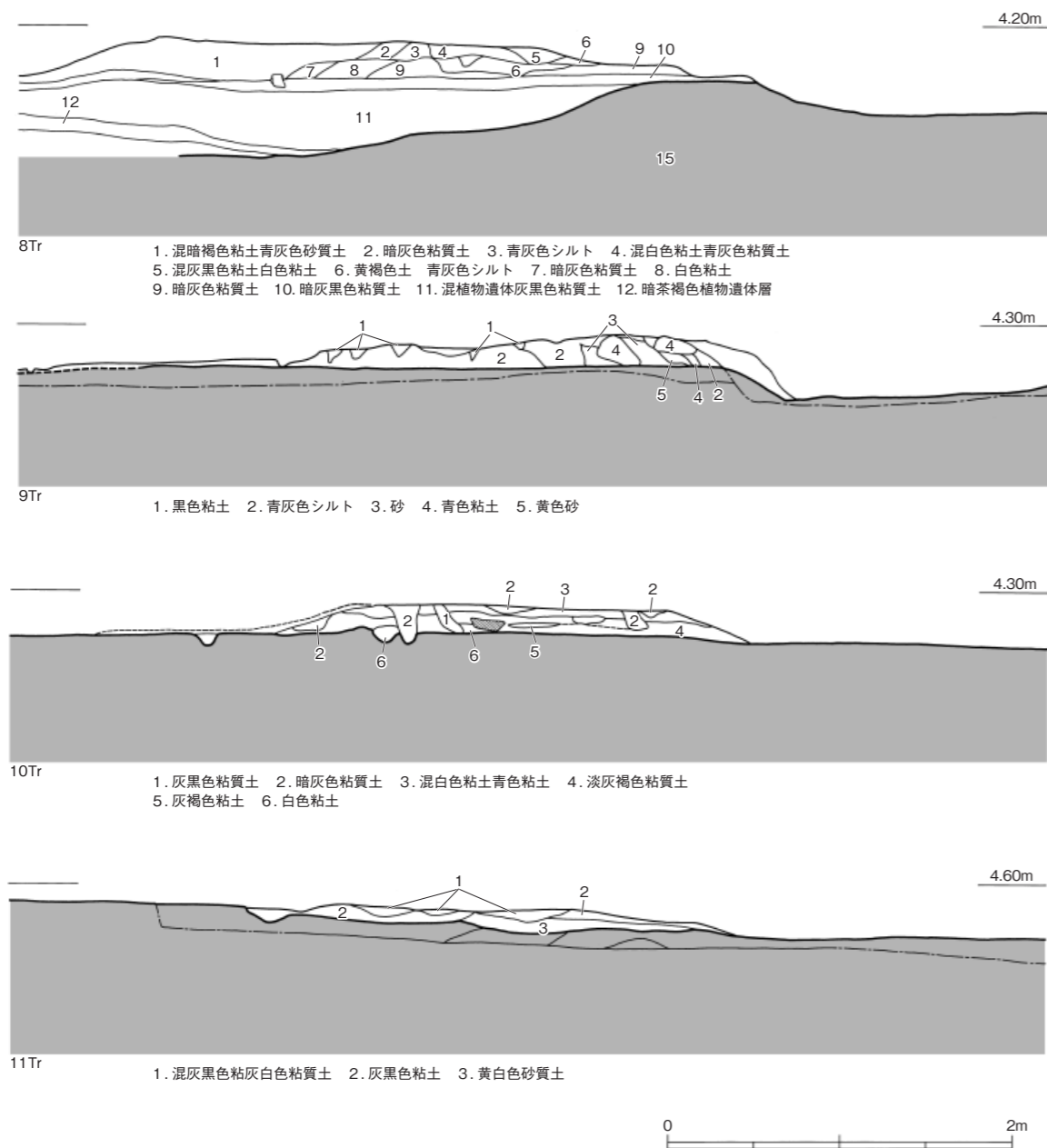
は明らかで、古墳を囲む外堤である可能性が生じたため、その性格を明らかにするためにトレンチを南北にそれぞれ1mずつ拡張し、遺構がさらに帯状に延びていることが確認された。

11トレンチでも、周濠の岸から外側に3.5mの地点でフラットな地山整形面を検出した。肩から2.5m外側で基層に黄白色粘土を敷き、その上に灰黒色粘質土と灰黒粘土のブロック土を築き固めた盛土層が残存していた。しかし盛土の残存状況は悪く、高さは10cm程度にとどまった。土手の内側裾の標高は4.26m、外側は4.48mと土手の内外のレベルは顕著に異なる。

以上2本のトレンチによって、下部構造が異なるものの地山整形と盛土によって周濠と一定の距離を保って巡る土手が存在することが確認され、さらに延長方向の詳細を把握しその性格を明らかにするため二つのトレンチの間に新たに9・10トレンチを設定した。

2つのトレンチは、想定される延長方向に合わせてピンポイントに設定した。

9トレンチは、8トレンチと同様に周濠岸から若干の下り勾配のテラス面が整地され、中途



第27図 外堤断面図(1/40)

から上り勾配に転じて土手の基底部を削り出し、その上面に青灰色、黒色粘土塊を固めて盛土して土手を構築していた。土手の内側の立ち上がりの角度は30°、土手の高さは48cmに達した。土手の内外で基底部のレベルが異なっており、外側では標高4.16m、内側の標高は3.9mで外側のほうが地山の削り出しを確認することができず一段高くなっていた。

10トレンチでは、11トレンチと同様に周濠から土手にかけての地山の掘削は行われず、基底部の明確な削り出しも行われていなかった。周濠肩からなだらかな上り勾配斜面の地山に黄白色粘土をベースとし、その上に青灰色粘土ブロックを築き上げて構築していた。土手裾の標高は、内側で3.98m、外側では4.04mを測り内外面での顕著な段差はなくフラットであった。

これら土手遺構は、釜塚古墳の墳丘を中心に周濠とともに同心円状に配されており(第12図)、少なくとも長さ30m以上、中心から40°の範囲まで廻ることが確認され、さらに南側の住宅地に向かって延長している可能性が高いことが判明した。1トレンチの周濠岸から南に5.4mの地点で砂質土の堆積とわずかな段差を検出しており(第12図1Tr中央14層)、これも外堤の痕跡ととらえれば、総長は90mを越え中心から120°の範囲まで広がる。

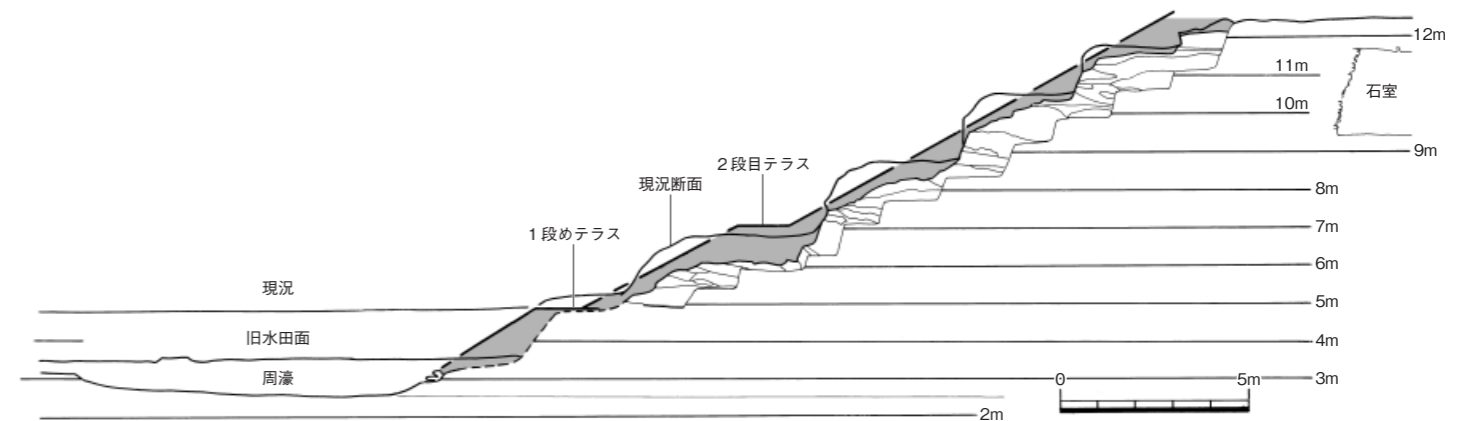
周濠と築造の前後関係については、8トレンチで周濠と同時期に埋没していたことが確認され、古墳と同時期の遺構であることも確認できた。これらの状況から当該遺構を墳丘並びに周濠を弧状に囲む土塁状施設=外堤と推定した。

(4) 墳丘 (図版1-b・3-a・7-a・17, 第13・28図)

本古墳は、第1次調査によって低湿地部に築かれていることが明らかとなり、墳丘は周濠岸のレベルから上に向かってほぼ全てが盛土によって構築されたものと考えられる。

現在の墳丘は、5段の階段を呈するように造成されているが、旧地権者の鷲尾ミスエ氏への聞き取り調査によれば、この造成は、基本的に墳丘斜面の切り盛りによってのみ行われ、家族による人力のみで10日ほどかけて実施されたとのことである。このことから、本来の墳丘斜面が半分近くは残っている可能性があった。

しかしその一方、この階段状の大規模な造成以前にも墳丘が茶畑として利用されており、確かに昭和25年の写真に写し出された墳丘を8重に廻る灌木列がこれに該当すると推定された。これらの栽培においても小さな地形改変が繰り返し行われたことは想像に難くない。このことを裏付けるように、昭和25年写真の墳丘の輪郭を詳細に観察すると、斜面に細かい凹凸が認め



第28図 5トレンチ墳丘断面推定線(1/200)

られる。本来の墳丘斜面がどの程度残存するかは大きな関心であった。

土層壁面（第28図）では造成前の旧墳丘面の可能性が残る法面層の残存が4カ所で確認された。具体的には、階段状造成土下の標高5.4～6.4m（斜面勾配角度27°）、7.4m～8.1m（同前29°）、9.5m～10.4m（同前25°）、11.1～11.5m（同前40°）で、斜めに傾斜した版築土層が観察され、これらが本来の墳丘斜面に近い法面勾配が残存しているものと考えられる。

各所の残存状況と傾斜勾配を活かしながら、墳丘斜面を復原してみると、第28図のように墳丘頂部から7mまでは概ね直線的な墳丘斜面を推定することができた。しかし、その下では5.4～6.4mの斜面の延長線とは幅1mほどのズレが生じてくるため、この間に2段目の段築のテラスが存在した可能性が高い。この段築テラスと果樹園の段の位置が重なったことが、この段の幅が他よりも広がった要因と考えられる。

また、本来の墳丘基底底部は、現状よりも6mほど外側にあると推定しており、そこから近接する13トレンチの周濠の立ち上がりと12トレンチの葺石の傾斜を利用して墳裾を復原すると、標高5.4m～6.4mの斜面の延長線との間に幅1.8mほどのズレが生じる。この間に1段目のテラスが設けられたと推定された。

これらの状況から釜塚古墳の墳丘は3段築成であったと推測する。

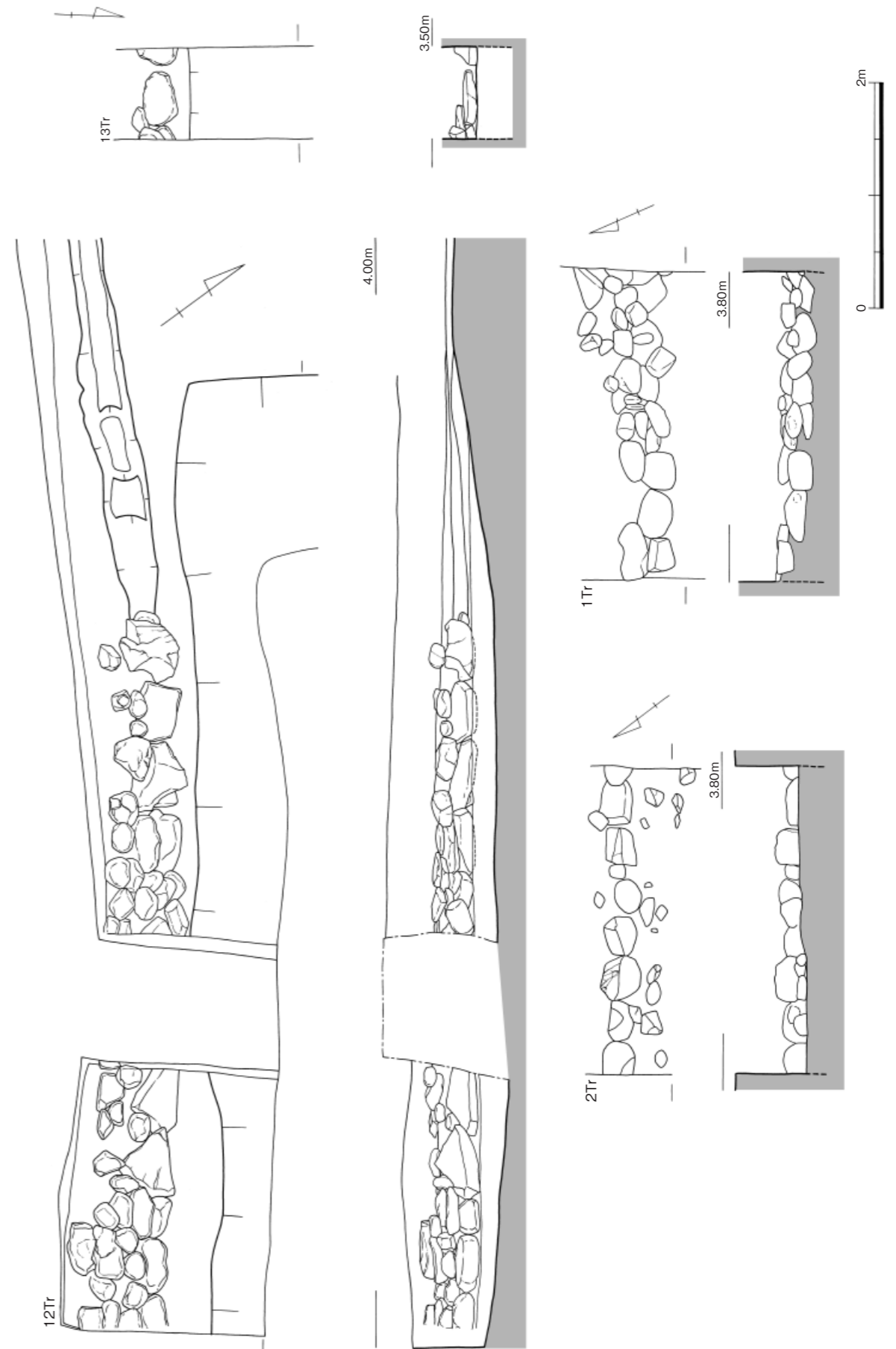
ちなみに、昭和25年の墳丘の側面写真では、墳丘に鉢巻状に植樹された灌木の最下段列の株元の外側に作業路状の緩斜面がみられ、これが1段目のテラスの名残である可能性がある。また、3列目と4列目の間隔が少し広く空いており、そこから墳頂に向かって斜面の勾配がきつくなっているように見受けられる。これが2段目のテラスの痕跡かもしれない。

墳丘に設定された5トレンチは、段築の状態などの確認を主としたものであったため、深さは必要最低限に留められたが、盛土の基本パターンは確認できた。盛土の単位は粗いが、標高9.5m以下では、墳丘の中心から外縁に向けて土を高く盛り上げる工法を採用して構築されていることが看取できた。盛土に使用された土壌は、主に粘性の強い黄灰色、青灰色、黒色系の粘土や粘質土が用いられていた。これらは、古墳とその周囲地下に堆積する基本土壌に極めてよく似ており、墳丘の築造にあたっては周囲で造成採取された土壌を用いて構築されたことを示している。

(5) 葺石（図版12～14、第26図）

第1次調査では1・2トレンチで大きな塊石が墳丘の裾付近を囲むように列をなして検出された。1トレンチでは、人の肩幅ほどある薄手の塊石や板石を腰石として据えている状態が辛うじて確認できたが、その上に積み上げられたと思われる人頭～拳代の河原石は腰石の周囲に散乱状態で出土した。また、2トレンチでは、基底部に据えられた腰石のみが辛うじて原状を保ち墳丘裾に沿うようにわずかに弧を描きながら一列に並んで検出された。本来は上に積み上げられたと思われる石は周囲に散乱し、その様子はあたかも墳丘裾に貼石を並べたような状態であった。

12トレンチでは比較的良好な状態で葺石の残存が確認された。墳丘裾から30cmほど斜面を上った位置に断面「L」字ないしは浅い「U」字状の溝を巡らし、これに大きな石を据えて腰石とし、そこから上に小さめの石を積み上げた様子が確認された。葺石の高さは残りのよい部分で50cm



第29図 1・2・12・13トレンチ葺石出土状況平面および立面図（1/50）

に達する。本来の葺石はさらに上方まで積まれていたと考えられるが、水田開削等により削平消失したのであろう。

同様な石積みは13トレンチでも確認された。墳丘裾から30cmほど上がった法面途中の位置で、腰石が墳丘に埋め込まれたような状態で残存していた。

また、3トレンチでは、比較的小さめの礫が盛土上に堆積した状態で検出されている（第29図3Tr）。葺石の腰石抜き取り跡に斜面上方から崩落した葺石が堆積した状態を示したものと考えられる。

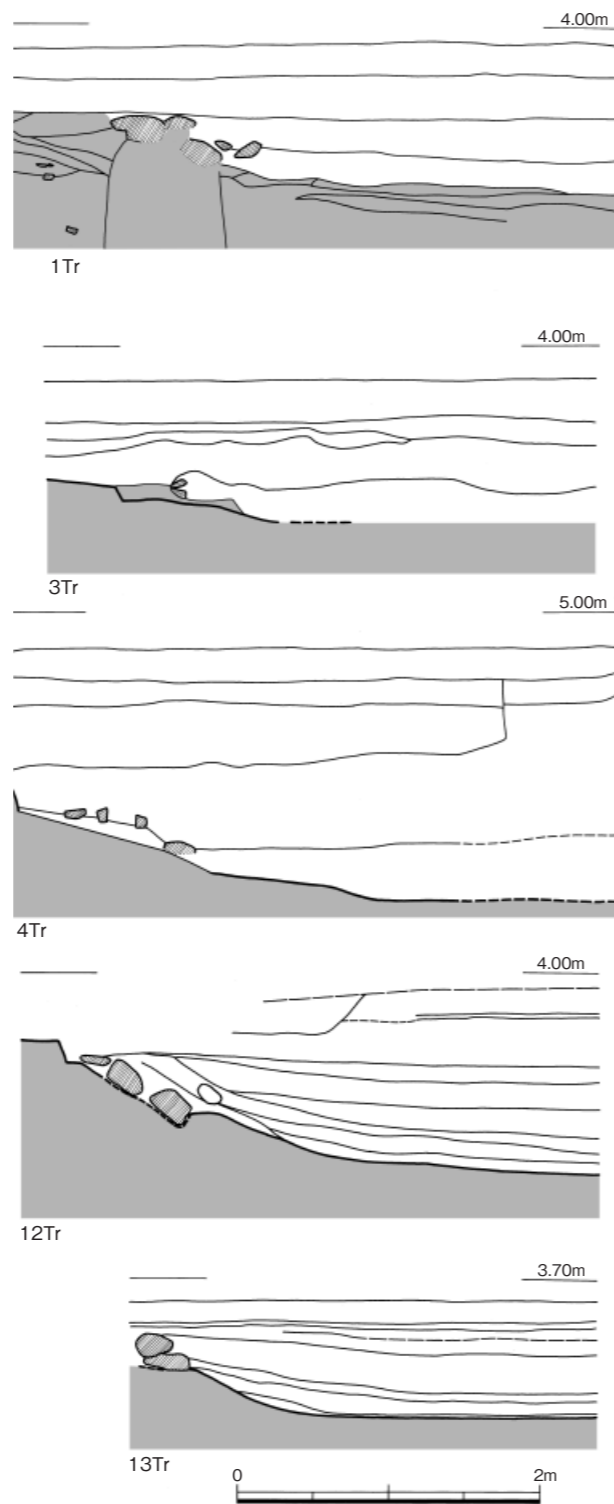
しかし、残されている土層断面の実測図は湧水による現場放棄のため、完成しておらず、周濠との関係は不明である。

これらの様相から、残存状況が良好であった12トレンチを参考に墳丘1段目の葺石の構造を推定すると、墳丘裾から30～40cm上がった斜面中途に、溝ないしは断面L字の段を掘り、大柄な板石や塊石などそこに落とし込んで腰石として固定し、その上にやや小さな石を並べて葺石を構築したと考えられる。溝や段の掘り込みは、軟弱な地盤の墳丘基底部に葺石を安定的に積み上げる工法として採用されたのであろう。

なお、墳丘の裾は後世の水田開削によって一様に削られたため、見た目の墳丘径は一回り小さくなっているが、辛うじて残った腰石が残存したことによって墳丘径が復元できた。

(6) 横穴式石室（図版20～24, 第14・31図）

石室は、南東に開口する単室の横穴式石室である。主軸方位はN-117.5°-Eにあり墳丘のほぼ中央に位置するが、推定中心は奥壁中央から少し外れている。周壁は9.5m前後に基礎を置いている。天井面は、現在の墳頂からは0.9m下位に位置し、立面的にみれば墳丘上位、墳頂直下にあるといってよい。以前は、袖石と天井石との間隙から出入りしており、室内にはかなりの土砂が流入していた。石室各部の計測値は下段石室計測値一覧のとおりである。



第30図 1・3・4・12・13トレンチ葺石断面図(1/50)

奥壁ならびに両側壁は、扁平割石を小口積とし、一部に花崗岩（・印を付す）を併用する。石材の大きさは不揃いで、下部よりもむしろ上部に大き目の石を配する傾向がある。基部から徐々に持ち送られ、側壁最上段では五割減（幅約1.5m）に狭まっている。しかし、各部の内傾度は一定せず、均斉を欠く。随所に小片を挟み込むなど意を尽くしているが、盛土層に基礎を置いているために、ある程度の墳丘の沈下は避けられず、各壁とも築造直後に亀裂を生んで歪んでいる。しかし、墳丘盛土に搗き固めた粘質土が用いられたことが功を奏し、以後の墳丘の変形は収まったようで、今後も歪みが大きく進行する恐れは少ないものと考えられる。

なお、左側壁右半奥壁寄りの石積みが右上がりとなるのはともかく、奥壁の右半にもその傾向が認められるのは珍しい。

隅角部はほぼ直角となり二壁にかけ渡すことはない。ただし、左隅角では◀印を境として積み方が異なる。上半は側壁材が奥壁材を挟み込み下半は側壁材の右端を奥壁材が抑えている。

奥壁のほぼ中央、後述する推定床面から約73cm上位に石室に突出した板石が1個ある。幅60cmの板石が石室に向かって2～3cmほど若干右上がり突出し、先端は返しのように上を向いて小さく突出する。上面は平らかでない。突起は、本石室ではここ1カ所のみである。

黄灰色粘土を貼った床には卵大と指頭大の大小2種の円礫が敷かれていたが、攪乱によって現在では全くと言って良い程残っていない。後述する墳丘上で採集した弁柄が付着する小円礫は、石室や埋葬棺に敷かれていたものだろう。

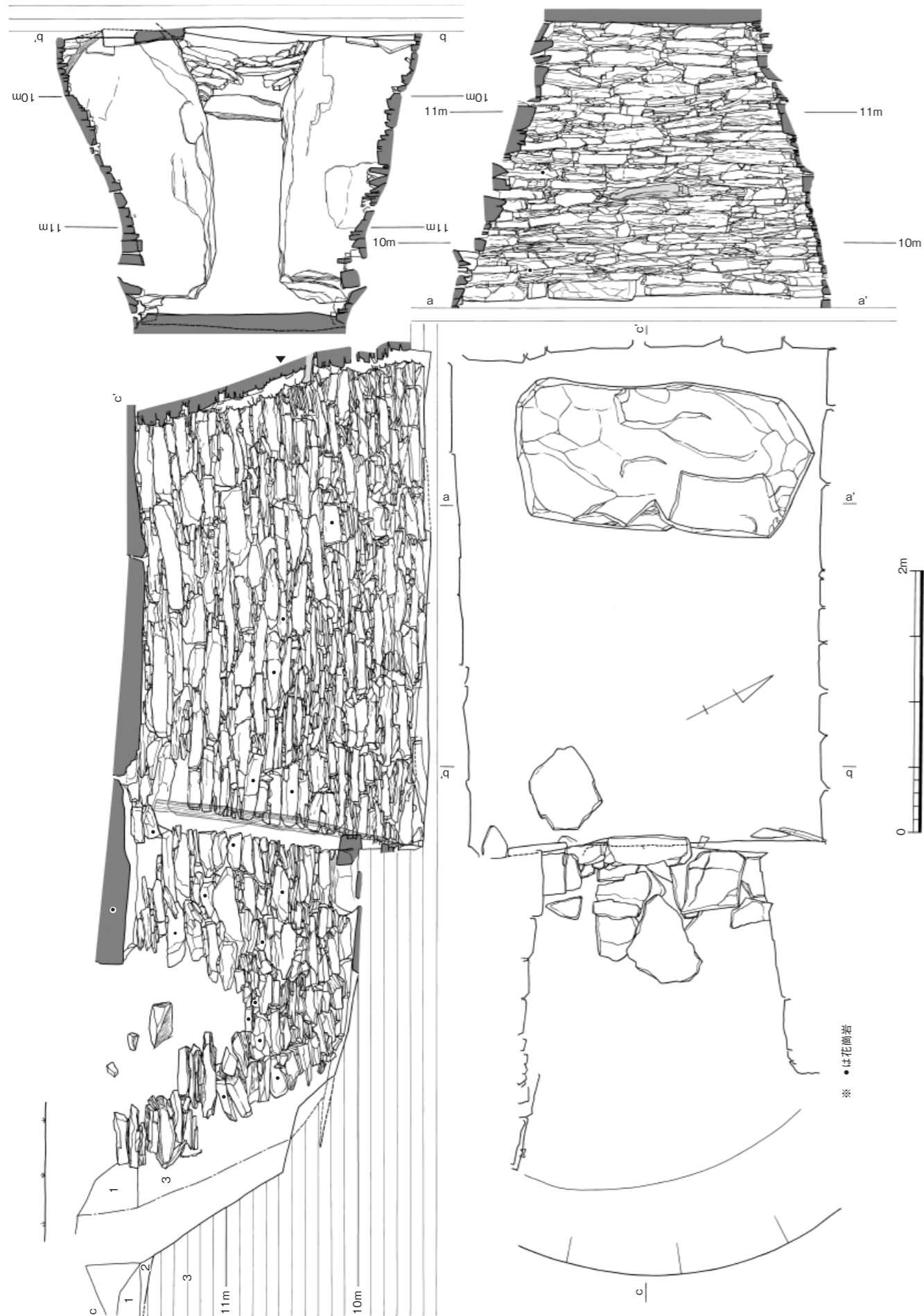
黄灰色粘土は、前の土地所有者の鷲尾ミスエ氏によれば、釜塚周辺の水田耕作土下の粘土と同質という。極めて粘性・保水性が強く、石室内はいったん水浸しになると汲み出した後でも1週間たってもいまだジトジトしていたという。

当初の礫床の高さは、現状よりも10～15cm上位の9.6m強と推定される。両側壁最下段が奥・前壁のそれよりも一段低く、左側壁基部の石の間に小円礫が食い込んでいる箇所があるからだ。ただし、周壁最下段の高さがそろっていない理由は不明である。

埋葬棺材 奥壁前面の床には、原位置を離れた1枚の大きな板石が横たえられている。長さ2.27m、幅1.33m、厚さ15cm前後で現在裏となっている面と横口部を向いた側縁には、赤色顔料が塗られている。当初はこの石材を移動させて床面を精査する予定であったが諸般の事情により将来に期すこととなった。この石が『郡誌』に記された石櫃の部材である可能性は高い。

石室の前壁は、左右から各1枚の板石を突出させただけで楣石およびそれ以上の石積みがなく。また、横口部の仕切石上面と玄室推定床面との間に50cmの段差がつくという、極めて特徴的な構造をとる。見かけの高さが2mを超える袖石は、強く内傾させられており、基部には割石を叩き込んで根締め袖石上端と3枚目の天井石底面との間は約20cm離れており、従って横口部は「T」字形の空間となる。袖石間の幅は、48～56cm、天井石から仕切り石までの高さは

石室全長	(6.27) m	羨道部	
玄室 中央長	3.8m	中央長	2.47m
奥壁部幅	2.89m	横口部幅	1.67m
横口部幅	2.71m	先端部幅	(2.3m)
奥壁部高さ	2.1m	右側壁高さ	1.7m



第31図 横穴式石室実測図(1/40)

1.6m強である。

仕切石下の石積みは隙間が多く、やや粗雑な感を受け石材も小振りである。次に述べる羨道部床面の構造からみて、後世の積み直しではなく、部分的にも石材が抜き取られたものと判断される。

なお、玄室周壁・同天井および羨道側壁の一部に赤色顔料が認められた。剥落が著しいが、当初はほぼ全面にわたって塗布されたものと推定される。

羨道 横口部には、やや外開き気味の羨道部が接続している。側壁は、割石を小口積とする点は玄室と変わらないが、内傾度は弱く、石材も相対的に厚手と多少の差異がある。左側壁は上半の一部を欠くのみで残りは良いが、左側壁（北壁）は前述の板石搬出の際に掘削され、下半の1.7m余りが現存するのみである。

羨道部床面は玄室のそれよりも一段高く、仕切石の外側には板石が二～三重に敷かれている。袖石近くでは、これらの板石の上に側壁最下段の石が置かれている。板石群の上には黄灰色粘土が貼られ、しかも側壁下に達する。つまり、板石は床材として敷かれたのではなく、地固めの地業と思われる。この粘土上面（完成時の床面）高は海拔10.1m弱と推定される。

側壁最先端は、横口部よりも若干高く、3枚目の天井石底面とほぼ同じ高さとなっている。下端線は、先端に近づくにつれて上昇しており、これは、次に述べる切通し状の墓道を付設しないことと無関係ではない。なお、天井石は、当初から現存する3枚のみで、羨道部前半にはかけ渡されていなかったとみてよい。

墓道 さて、本石室最大の特徴は墓道部の形状・構造にある。第14図に破線で示す落ち込みは、前土地所有者からの聞き取り内容と、室内から掻き出した礫と赤色顔料で赤く染まった土砂とが混じった第5層の存在からみて、攪乱時の掘り込みが後に埋め戻されたものであることは明らかである。

他方、同図の第1・2・3層は羨道部側壁構築時に盛り土されている（図版20-b参照）。つまり、羨道部に切通し状の墓道が付設されたとは考えられない。墓道部床面は、仕切り石外側から1.6mの地点から47°近い急勾配で地上とつながる堅坑状となっている。

石室の閉塞 横穴式石室の閉塞にあたっては、同時期の当該地域における他古墳例を参照すると袖石の外側に接して板石を立てかけたとみられるが、原位置では確認されていない。従来この部分にみられた閉塞石、あるいは壁を思わせる石積み（第3図）は、発掘後に再構築されたものと考えられる。

(7) 出土遺物

埴輪 (図版扉・31-a・b, 第32図)

第3次以後の調査では報告に値するほどの埴輪は出土していないが、第2次調査時には墳丘からパンケース1箱分の埴輪が採集されており、これらは既に報告されている（『釜塚1981』）が、隣接する神在横島遺跡から埴輪が出土したことから、比較検討のために再整理を行い報告したので、本報告でも再掲しておく。

なお、図の括弧中の番号は『釜塚1981』挿図中の番号と符合する。

資料は器壁が磨滅したものが多く、図化できるものは少なかったが、円筒埴輪12点、形象埴

輪15点を図化した。胎土には1～2mm大の石英、長石粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。胎土・色調の特徴は円筒埴輪・形象埴輪に共通する。黒斑を有しており、窖窯焼成によらないと考えられる。1は口縁部で、大きく外反する特徴から朝顔形埴輪の可能性が高い。2は、朝顔形埴輪の頸部でクビレ部に断面三角形の突帯をめぐらせる。3～10は円筒埴輪の胴部。胴部の最大径（復原）は3・7ともに22.3cmである。器壁の厚さは約1cmと薄手で、底部付近でも厚くならない。外面調整は、縦ハケにより、二次調整の横ハケは認められない。内面調整は縦あるいは斜め方向のナデである。突帯部は横ナデが施されるが、下面は調整が粗雑となり接合痕を顕著に残すものがある（3・5）。

突帯は断面台形を呈するものが多く、シャープなつくりのものと、やや丸みを帯びるものの2者がある。7は断面M字形である。突帯の上面幅は、8～10mm、基底幅は、20mm、高さは、7mmを測る。11・12は底部で、11の底径は24.2cmで、底面には径3～5mmの棒状圧痕を多数残す。12の端部外面は横ナデが施されるように観察される。

13～26は形象埴輪であるが、小片のために器種の判断が困難なものが多い。何れも厚さは13～15mmを測り、23・24が約10mmとやや薄手である。磨滅のために観察し難いが器面調整はいずれもナデによるものとみられる。13～16は、高い突帯状を呈し、15以外は先端部を屈曲させる。家形埴輪の一部であろうか。17は網代表現が施され、家形埴輪と考えられる。18～21は三角文・綾杉文が施され、楕形埴輪かと考えられる。22・23にも疎らな沈線表現があり、楕形埴輪かと考えられる。24～26は平面状、あるいは平面が複数組み合わせるもので、器種は不明である。

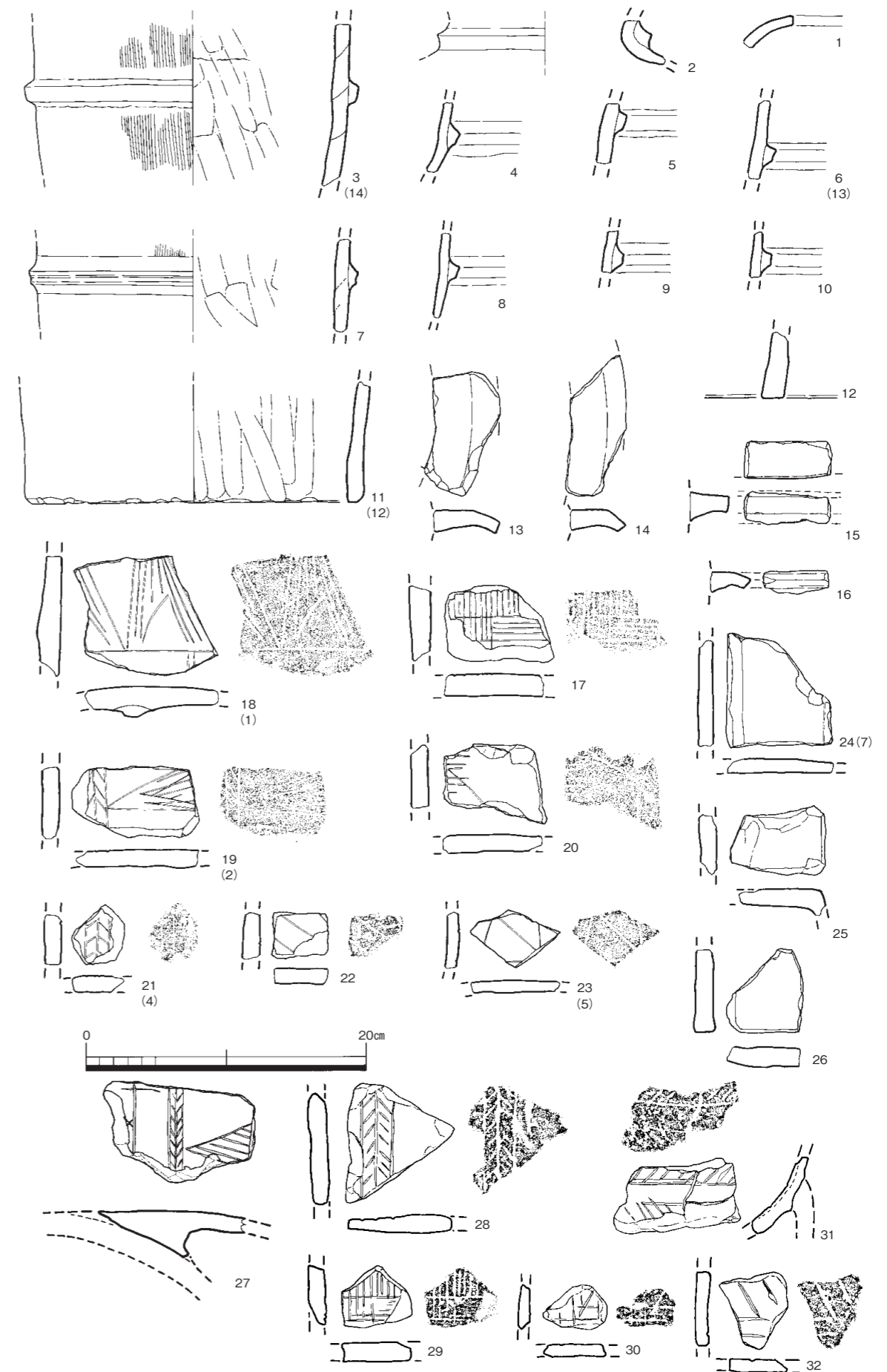
27～32は糸島高校附属郷土博物館で新たに発見された埴輪片である。27・28は楕形埴輪で表面に綾杉文が施される。29・30には網代表現が認められるので家形の一部だろうか。31、32は、河内一浩氏より草摺の可能性ある旨をご教示いただいた。31には斜方向広がる形象部の内側で円筒部を接合しており、表に平行沈線の上下に斜線が施される。32は縦方向の断面に反りがある。

釜塚古墳出土埴輪を近接する神在横島古墳の出土埴輪と比較すると、有黒斑であることや、透孔・突帯の形状、胴部、底部の径計等など類似する点が高いといえる。

比較の対照を糸島平野とその周辺の前～中期の古墳に拡大すれば、まず鋤崎古墳や丸隈山古墳（福岡市西区）、井田原開古墳では、透孔の形状が三角、半円といった円形以外のものが含まれることが相違点として上げられる。また銭瓶塚古墳、兜塚古墳の円筒埴輪には黒斑がない点大きい。従来の研究成果に依れば、透孔は「円形以外→円形」、黒斑の有無では「有黒斑→無黒斑」という変遷が考えられている。したがって透孔の形状から鋤崎・丸隈山・井田原開→神在横島・釜塚、また、黒斑の有無から神在横島→釜塚→銭瓶塚→兜塚という変遷が考えられる。また、鋤崎・丸隈山・井田原開古墳には、基底部に半円形の透孔を有するが、神在横島には認められず、編年の基準としては有用と考えられる。また、従来の編年では器表面の二次調整ハケの有無やその手法が編年の基準として大きな比重を占めるが、当該地方では縦ハケ調整しか施されていない点大きな特色といえる。

北部九州においては、有黒斑段階の埴輪資料が出土する古墳は依然として少なく、詳細な編年の組み立ては難しいが、その変遷を追うことが可能な地域として当該地方は貴重である。

（岸本 圭）



第32図 釜塚古墳採集埴輪実測図(1/4)

(8) 横穴式石室出土遺物

釜塚古墳の横穴式石室は同期の横穴式石室の中では最大級を誇る。先行する鋤崎、丸隈山古墳では室内に複数の埋葬棺を納めていることから、後述するように当古墳でも複数の埋葬棺を納めていた可能性は高く、相当の質、量を伴う副葬品が納められていたことが推測される。

しかし、横穴式石室は古くから開口していたとみられ、記録上では明治18年頃に行われた発掘が初見であるが、鉄鏃の出土が記されているのみで、この時点で既に主要な副葬品は失われていたであろう。第2次調査の石室床面の清掃時に新たに刀子状鉄器片1点が出土している。

鉄鏃 (図版扉, 第33図)

糸島高校附属郷土博物館には、釜塚古墳から出土した鉄鏃片16点が収蔵されている。完形品はなく、出土状況などの関連情報は残されていないため、副葬の時期等については幅をもって考える必要がある。

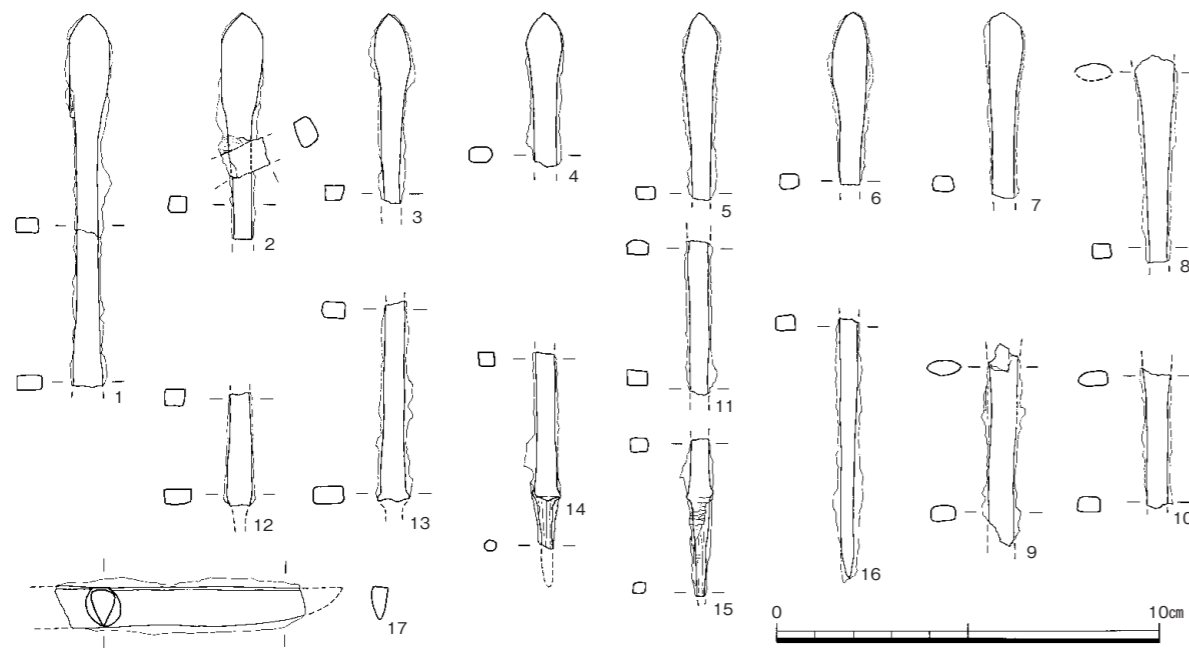
1～16は長頸鏃で、鏃身は柳葉形を呈するものであるが、鏃身が小型で頸部との境が比較的に明瞭な3・4・5と、やや大型で頸部との境が不明瞭な1・2・6～10に大別され、1のみ片側に関を設ける。13～15には頸部と茎部との境に棘状の突起が認められ、14～16には、矢柄の木質や樹皮等が残存する。

刀子状鉄器 (図版扉, 第33図17)

両端を欠き、現存長は6.5cm弱。一端は鈍いながらも刃部となっているが、他端の断面は楕円形に近く、約25gと重量感がある。蕨手^{わらび}刀子の可能性もあり、注意を要する。

(9) 古墳周辺の遺構、遺物

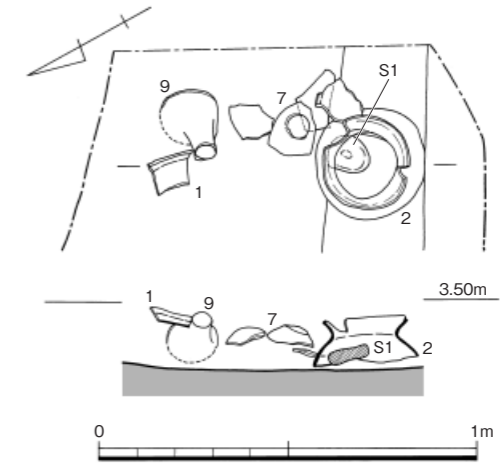
8トレンチ東端で外堤の断ち割りを行ったところ、その直下で断面が浅いレンズ状の落ち込



第33図 釜塚古墳出土鉄鏃・刀子状鉄器実測図(1/2)

みを検出し、埋土から弥生後期～古墳前期の土器や石器などが出土した(図版11-c, 第27-11層・34図)。出土土器は後期中葉が中心である。

また、同様に8トレンチ外堤の裾から周濠にかけて弥生中期～古墳中期の土器、奈良時代の須恵器片等が出土した。近隣の神在横畑遺跡では当該期の遺構や遺物が出土しており、古墳にとどまらず周辺の集落遺跡に関連する土器も含まれると考えられる。



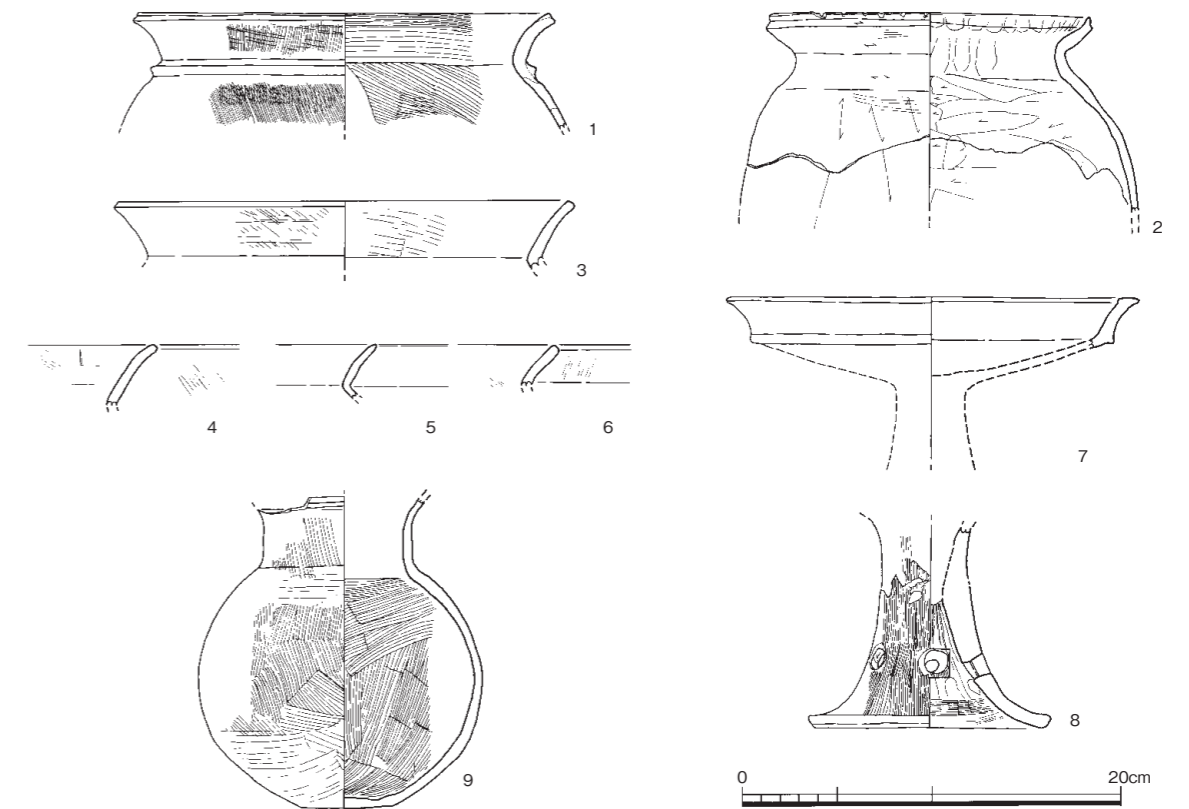
第34図 土器溜り弥生土器出土状況図(1/20)

① 土器溜り出土土器 (図版32, 第35図・36図1)

1～6は甕の口縁片である。1の口頸部は外反しながら外に開き端部は「コ」の字形に整えられ、クビレ部の下に三角突帯が廻る。内外面ともハケで仕上げ、外面に煤が付着する。

2は、胴部の中ほどで打ち欠かれた甕で、口縁径16.8cm、口唇部は上方に軽く摘み上げ、焼成後に施された小さな刻みが等間隔に認められるが、局部的で口縁部を一周するものではない。胴内面は横方向のケズリがみられる。

7・8は高坏である。7は坏部片で口縁が直立気味に短く立ち上がった後に外反し、端部は



第35図 土器溜り出土弥生土器実測図(1/4)

上面が膨らみ気味ながら面をなし、内外に軽く摘み出されて張り出す。8は脚部で器壁がぶ厚く脚柱部に大きな5個の円孔が等間隔に配される。

2・9は西部瀬戸内系、他は在地系の土器であろう。『釜塚2003』では、7は瀬戸内系土器としていたが訂正しておく。

9は、複合口縁壺の胴部～頸部である。底部は平底となるが、胴部は球形を呈し頸部は直立する。口縁部は打ち欠かれたとみられる。内外面ともハケで仕上げており、焼成も良好である。

なお、8トレンチの土器溜めから1点だけ縄文晩期の深鉢が出土した。第36図1は、粗製深鉢の胴上部から口縁部にかけての破片である。復原径は28cmを測り、口唇部は平端面をなし、口縁下で最大径となった後に底部に向かってすぼまる。内外面とも横～斜めの板ハケで仕上げている。内面にのみ赤色顔料が付着しており、肉眼観察ではベンガラと推定される。

② その他の土器・石器

8トレンチの外堤裾～周濠にかけて古式土師器の小片が出土した。甕、山陰系の二重口縁壺、鼓形器台、高坏などである。土器溜りを含め、周囲に同期の遺構が存在したものと考えられる。古式土師器片も出土しているが、古墳の築造時期より古く遡る時期のものであり、古墳築造前の集落に伴うものと考えられる。

なお、土器の出土は墳丘の東側に設定したトレンチから集中して出土し、西側からの出土は極めて少なく、古代における集落経営は、古墳と宮地嶽に挟まれた微高地を中心に展開したものと推定される。

弥生土器（第36図2～37図5）

周濠埋土には、弥生中期の土器片が多く出土した（第36図2～20）。口縁径20cm～26cmの中～小型甕片が大半を占め、口縁部は断面逆L字形で、水平方向に開くものからやや上向きタイプ、底部は若干の上げ底から薄い平底タイプまでがあり、城ノ越～須玖I式期のものまで幅広い。丹塗磨研土器はほとんど認められず、日常用雑器が主体とみられる。

第37図1～5は弥生後期の土器で、1は高坏。口縁部はやや開きぎみに立ち上がり、坏部はやや深い。内外面ともハケ調整痕が残る。

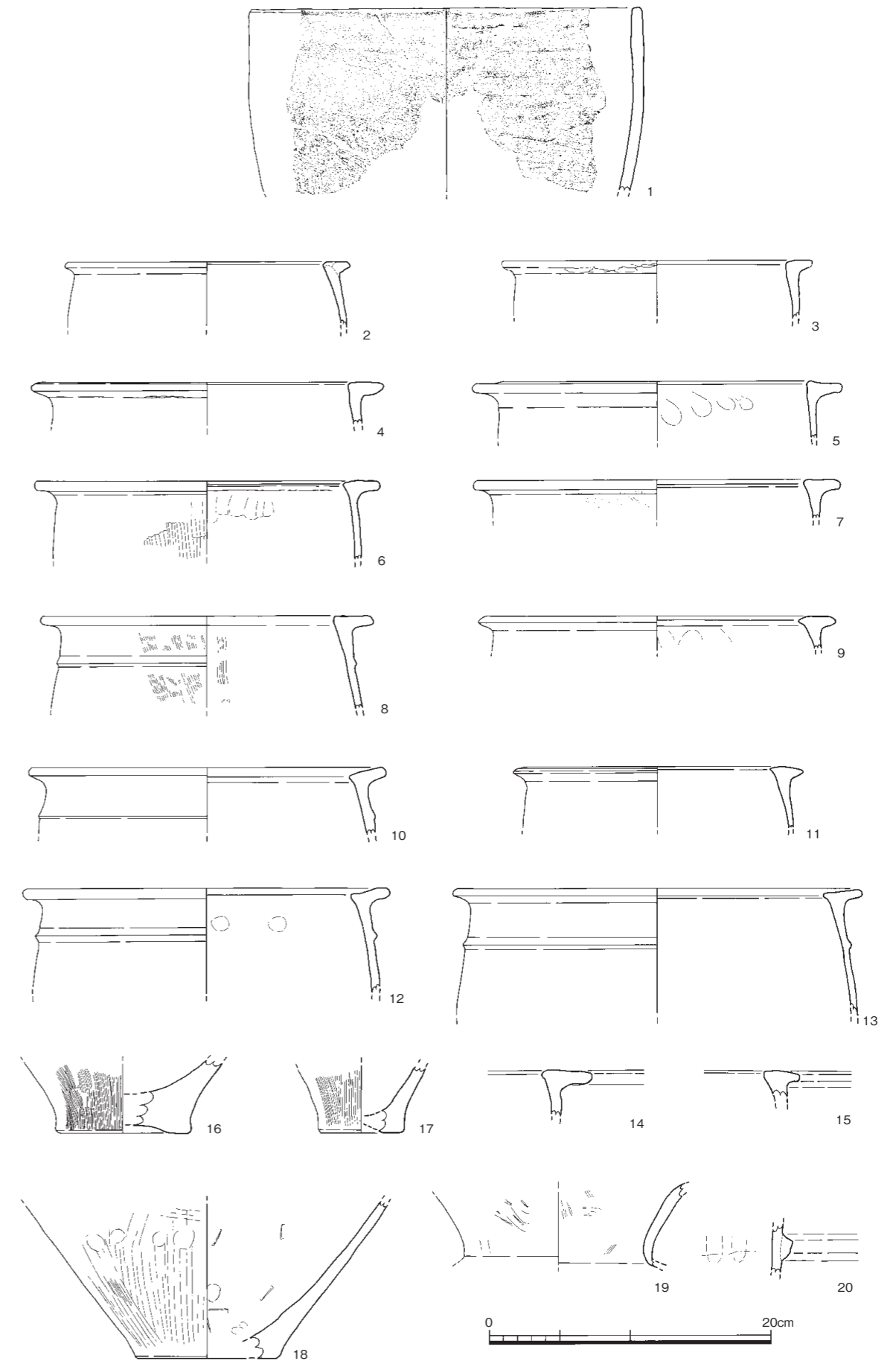
古式土師器（図版32-b, 第37図6～18）

9～12・44は、甕で、9・10は口縁片である。端部が「コ」の字形の面をなし、やや内湾気味に開く。12は、胴部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。11は、胴肩部片で櫛描波状文が施される。3は、直口壺の胴部で、内面下部はヘラケズリ、上部はハケで仕上げている。6～8・15は、高坏で、6・7は坏部片である。口縁部はラッパ状に大きく開く。15は脚柱部片である。13・45は、鼓形器台脚部片で、13は器壁が薄く立ち上がりが高い。内面はヨコケズリを残すのに対し、14は厚手で稜が鈍く脚裾の開きが大きい。

16～18は二重口縁壺の口縁片である。いずれも口縁屈曲部の稜の突出が甘く、口唇部に向かって緩やかに外反する。17は、口縁端部の一部が欠けているが、打ち欠きによる可能性がある。

石器（図版34, 第42図）

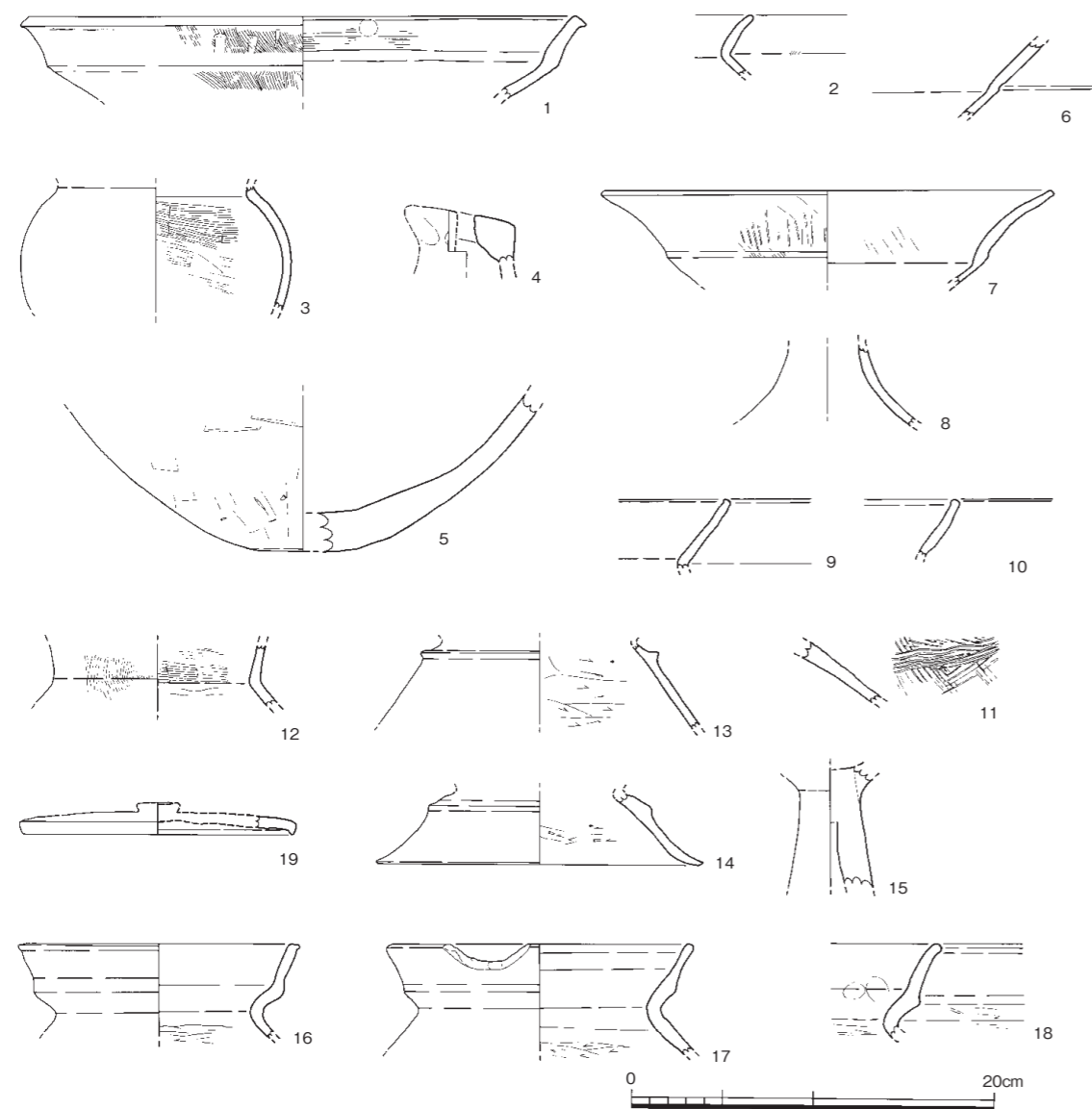
1・2は、タタキ石である。1は長球形の砂岩、2は偏球状の花崗岩を用い、いずれも扁平な面の表裏の中央を敲打し浅い窪みを設けて指掛け部としている。側縁部には使用による敲



第36図 周濠周辺出土土器実測図①(1/4)

打、磨滅痕が認められる。

7は、扁平な砂岩を用いた石錘である。四周に打ち欠きによって浅い抉りを施して紐掛けを設けて使用したが、後に新たに扁平面の表裏の中央に窪みを施し、さらに凸面度の強い面の中央から放射状に三方に向けて擦過による幅5～7mmの浅い溝を穿ち紐掛け溝を設けて利用したと考えられる。



第37図 周濠周辺出土土器実測図②(1/4)

3. 縄文時代の遺構・遺物

(1) 立杭群と加工木 (図版26・27, 第38図・39図)

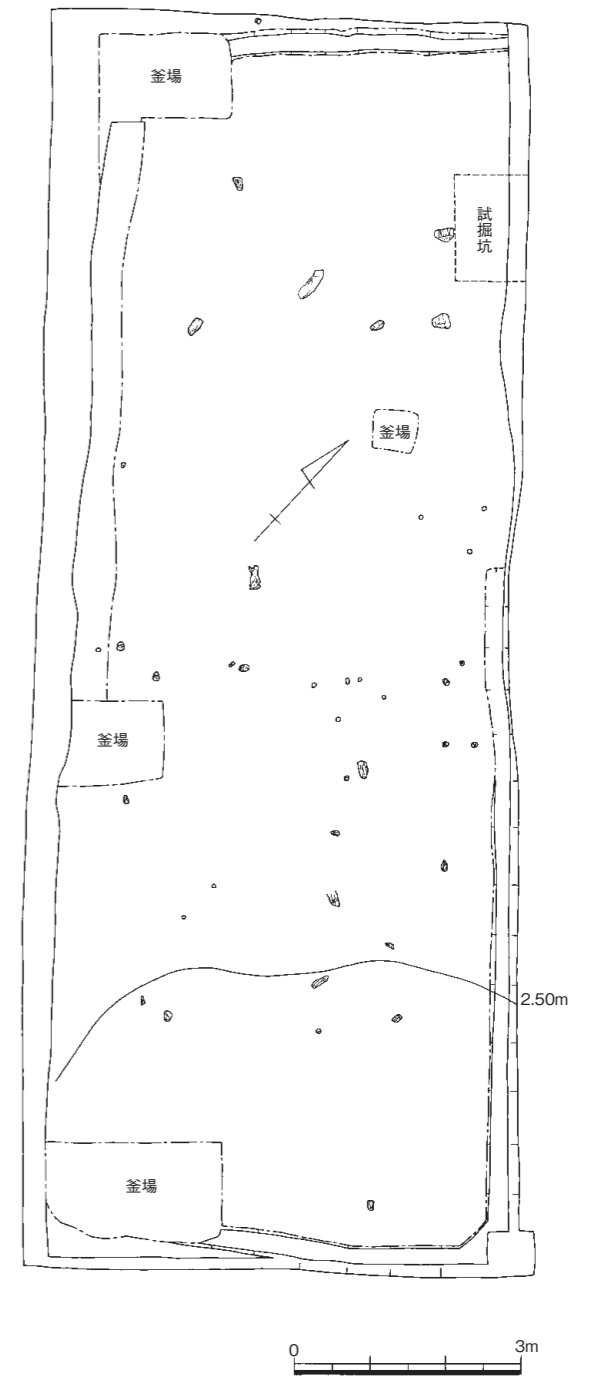
古墳時代の遺構面(第4層)下には弥生土器を包含する灰褐色砂質土層(第5,6層)が堆積し、その下に縄文晩期の土器を包含する薄い砂質土層(第11層)が現れた。砂質土層には、枝木や丸木など植物遺体が多数横たわり、これらを除去すると40本の打ち込み杭を検出した(第38図)。

杭は、枝材を用いた径3cm程度の小杭から径10cm近い太い丸太を用いた杭が、調査区中央から東区を中心に打ち込まれていた。丸太の大杭(杭1～6)は調査区の北西部に集中し、垂直方向に打ち込まれたもの(図版27-b・c・d・f・g)だけではなく、意図的に斜めに打ち込まれたもの(図版27-e・h)もある。調査区では面的精査や土層観察でも畦畔等は確認されておらず、現状では水田を想定することはできなかったことから、杭の用途について詳しく知ることはできなかった。

なお、杭の深さは40cmを超えるもので、しっかりと打ち込まれたものもある一方、10cm程度しか残っていないものもあり、浅いものは、弥生時代以後に打設されたものも含まれている可能性がある。

5・6・11層では縄文土器や黒曜石片が出土した。また、縄文晩期の遺構面を精査するために湧水対策として調査区内の4か所に釜場を設けたところ、廃土から曾畑式土器や石器が出土したことから、当該期の遺構、や遺物が下層に残存する可能性が高まった。

このため、当該調査区については遺跡の地理的、歴史的環境を明らかにするために、調査区の中央を2m幅で南北に横断するサブトレンチを

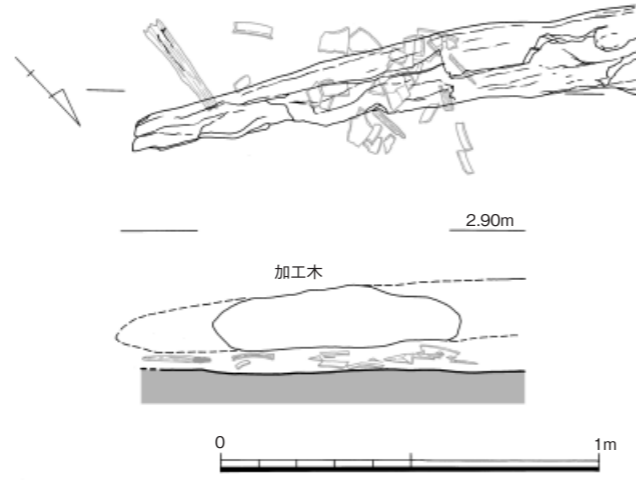


第38図 14トレンチ縄文晩期杭列配置図(1/100)

設定し、下層の調査を実施した。

第1次調査の2トレンチでは、サブトレンチの下層から立位状態の大小丸太材が3点出土している（図版4-c, 第19図）。木材の詳細について報告はないが、灰褐色粘質土層下から出土しており、今次調査の立杭群と同じ層からの出土と考えられる。特に大きな丸太材の上面は乾燥収縮したものではなく水平方向にささくられたように切れており、石斧による伐採の痕跡も想起させ興味深い。

調査区の南東部では、幹回り90cmほど、途中からY字形に枝分かれした広葉樹が出土した（図版26-a, 第19図）。又部や株元は焼けた痕跡がみられ、石斧などの利器によるとみられる加工痕跡も認められた。付近では蛤刃磨製石斧の刃部片が出土しており（図版27-a, 第19図）、この付近で加工作業が行われていた可能性もある。



第39図 加工木下の浅鉢出土状況図(1/20)

この加工木の南西端の枝下から浅鉢が出土した（図版26-b, 第39図）。破片は一箇所に固まって出土しており、接合するとほぼ完形に復元することができたことから、出土地点で破碎したものと考えられる。加工木に関連して行なった祭祀等によるものである可能性がある。

(2) 出土遺物

① 5・6層出土遺物

縄文土器（図版33-a・b, 第40図） 縄文晚期土器と曾畑式土器片が混じって出土した。



第40図 第4次調査出土縄文土器実測図①(1/3)



第41図 第4次調査出土縄文土器実測図②(1/3)

1は、精製浅鉢である。口縁部と底部付近の一部が欠けているが、形状はほぼ復元することができた。高さ9.5cm、口縁径25.4cm、緩い丸底の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部下で「く」の字状に内傾するが端部下で外反に転じる。内外面ともナデの後にヨコ研磨で仕上げるが、研磨密度は粗い。色は内外面とも黒褐色で、胎土には角閃石、長石、石英の小粒を含むが、おおむね精良で焼成も良好である。

2は、粗製深鉢の口縁部で、直線的に延びる胴部から口縁部下ではわずかに外反する。内外面ともに横方向の条痕調整の後にナデ仕上げ。3は、緩やかな波状口縁の深鉢で端部には間隔の粗い刻み目が施される。内外面ともヨコの条痕をナデ消す。6は、器表面の残りが悪いが外面には縄文がわずかに残る。7は、外面に斜め方向の線状の沈線が施される。8は、横方向の羽根状文、9は、タテの短沈線文、10には粗い斜格子状に線文が施される。

②31～32層出土遺物（図版33-c・d, 第41図）

砂質土層（31～32層）からは曾畑系土器片が出土した。大きな破片はないが土器の表面や破断面に顕著な磨滅痕跡は認められないことから、近隣地で使用後に廃棄されたものと推定される。

この遺物包含層の下層には粘質土層と砂質土層の互層が深さ1m以上にわたって続いており、この地が縄文前期以前に長野川の氾濫原であったものが、縄文時代前期以後に陸化し、集落に近い生活空間に取り込まれたことがうかがえる。

縄文土器（図版33-c・d, 第41図）

いずれも曾畑式土器の鉢、深鉢片であるが、小片ばかりである。曾畑式土器には特徴的な胎土中の滑石がみられる土器は確認できない。

11～13は、口縁部である。11は、端部に刻みを施し口縁部は条痕調整の後ナデ、12は端部に円形刺突文を施し口縁部はヨコ条痕の後ナデ、13は、端部に円形刺突文を施し、口縁部は外面はタテ条痕の後にヨコ沈線、内面はヨコ条痕で終える。

14～26・28は、胴部片である。14は、胴部片で隆帯文下にタテ沈線を施す。15は、外面に斜めの短沈線、内面にはヨコ条痕が残る。17は、外面に3段のタテ短沈線がみられ、内面はナデ仕上げ。18は、2列のタテ方向の沈線の羽状文が観察できる。21～26・28は、内外面とも条痕調整痕が残る。

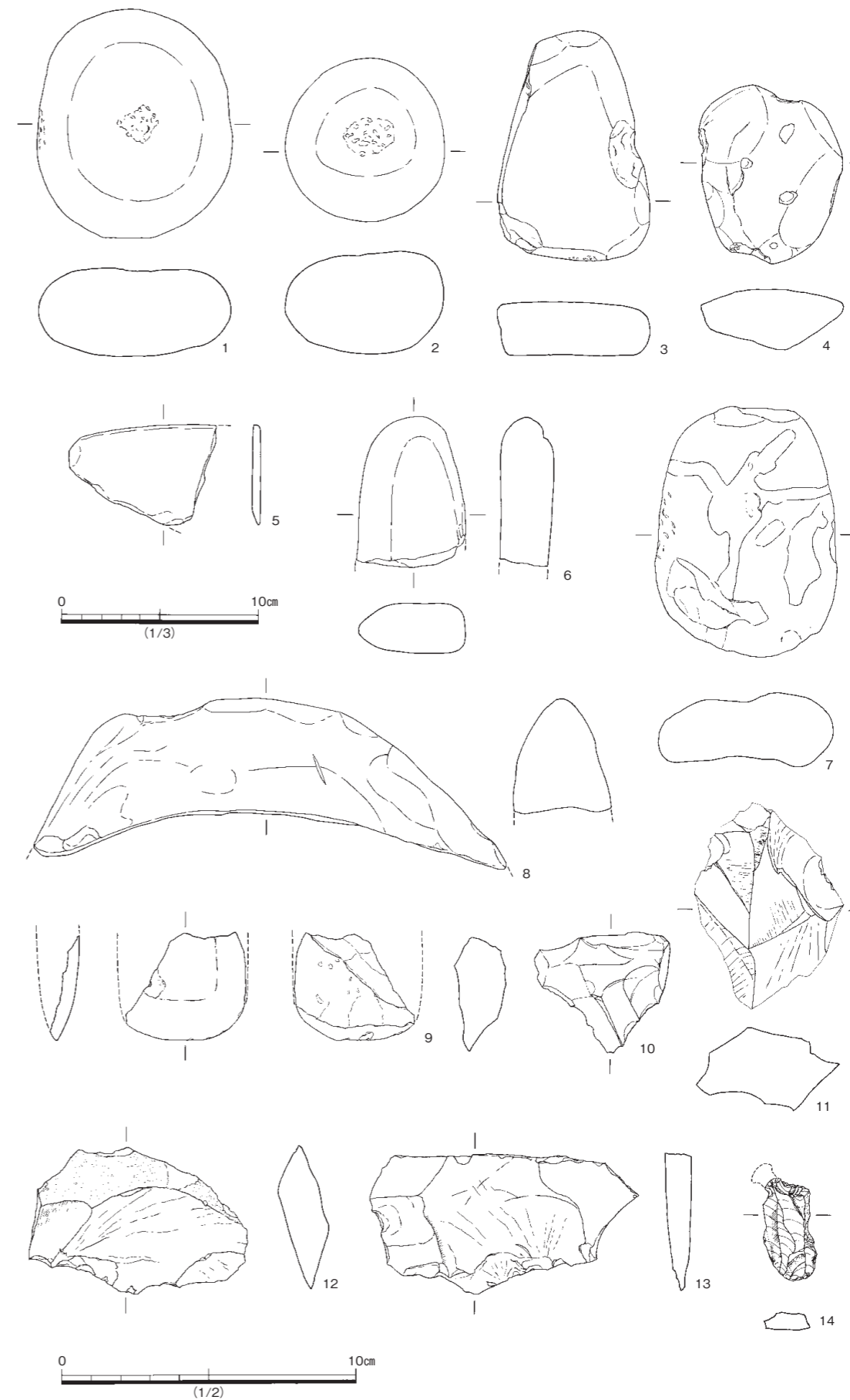
27・29・30は、底部付近で、いずれも丸底を呈するものとみられ、底を中心をめぐる線条痕、ナデの痕跡を残す。

31は、浅鉢の口縁付近で、口縁下に一条の沈線がめぐる。

石器（図版34, 第42図9～14）

埋土中からはあまり多くの石器は出土しておらず、石出土割合が高い打製石鏃の出土は見られなかったが、加工木の近くから磨製石斧片が出土したことは木材加工の観点からみれば興味深い。9は、片岩、10～13は安山岩製で、14は黒曜石製である。

9は、5層から出土した磨製石斧の刃部片である。10は石錐と考えられる。11は彫器と考えられる。12・13は削器である。14は、黒曜石製の石匙で、つまみ部が欠失する。



第42図 釜塚古墳出土石器実測図（1/2・1/3）

Ⅲ. 調査の記録

挿図番号	番号	器種	トレンチ	遺構・層位	時期	胎土	調整		色調	焼成	備考
							外	内			
35	1	甕	8	土器溜り	弥生後期	長英雲	タテハケ	ヨコ・ナナメハケ	暗茶褐色	良	
	2	甕		土器溜り	弥生後期	長英雲カ	タテ・ヨコハケ	ヨコケズリ	茶褐色	良	
	3	甕		土器溜り	弥生後期	長英雲	タテハケ	ヨコハケ	暗灰褐色	良	
	4	甕		土器溜り	弥生後期	長英雲	タテハケ	タテハケ	暗灰褐色	やや軟	
	5	甕		土器溜り	弥生後期	長英雲	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色	良	
	6	甕		土器溜り	弥生後期	長英雲	ハケ	ハケ	淡灰褐色	良	
	7	高坏		土器溜り	弥生後期	長英	タテハケ	ハケ	桃褐色	やや軟	東部瀬戸内系
	8	高坏		土器溜り	弥生後期	長英雲カ	タ・ヨ・ナハケ	ナナメハケ	茶褐色	良好	
	9	壺		土器溜り	弥生後期	長英雲カ	タテハケ	ヨコハケ	茶褐色	良好	複合口縁壺か？
36	1	深鉢		土器溜り	縄文晩期	長英雲カ	条	条	茶褐色	良	内面に赤色顔料付着
	2	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	明褐色	良	
	3	甕	8	土器溜り	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	やや軟	表面の摩耗が進む
	4	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	5	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	6	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	タテハケ	ナデ	灰褐色	良	
	7	甕	8	土器溜り	弥生中期	長英雲カ	タテハケ	ナデ	暗橙褐色	良	
	8	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	タテハケ	ナデ	橙褐色	良	
	9	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	10	甕	8	周濠	弥生中期	長英雲カ	タテハケ	ナデ	暗赤褐色	良	
	11	甕	8	土器溜り	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	12	甕	8	土器溜り	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	13	甕	8	土器溜り	弥生中期	長雲カ	ナデ	ナデ	灰褐色	良	外面にスス付着
	14	甕	8	土器溜り	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	赤褐色	良	
	15	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ→ヨコ沈	ナデ	明赤褐色	良	
	16	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長雲カ	タテハケ	ナデ	黄褐色	良	
	17	甕	8	土器溜り	弥生中期	長雲カ	タテハケ	ナデ	黒褐色	良	
	18	甕	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲カ	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	19	広口壺	8	周濠埋土	弥生中期	長英雲	ナデ	ナデ	黄褐色	良	
	20	壺胴部	8	土器溜り	弥生中期	長英礫	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
37	1	高坏	8	周濠埋土	弥生後期	長英雲	ハケ	ヨコハケ	淡橙褐色	良	
	2	甕	8	周濠埋土	弥生後期	長英雲	ナデ	ナデ	茶褐色	良	
	3	直口壺	8	土器溜り	古墳前期	長英雲	ミ?	ヨコハケ	黄褐色	良	
	4	支脚	8	周濠埋土	弥生後期	長英雲カ	ナデ	ナデ	桃褐色	良	
	5	壺底部	8	周濠埋土	弥生後期	長英雲	ナデ	ナデ	黄褐色	良	
	6	高坏	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ→ミ?	ナデ→ミ?	明褐色	良	
	7	高坏	8	土器溜り	古墳前期	長英雲カ	タテハケ	ヨコナデ	黄褐色	良	
	8	高坏	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ	ナデ→ミ?	橙褐色	やや軟	
	9	甕	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ	ナデ	黄褐色	良	
	10	甕	8	周濠	古墳前期	長英雲	ナデ	ナデ	淡き褐色	良	
	11	甕	8	土器溜り	古墳前期	長英雲カ	ヨコハケ	ケズリ	灰褐色	良	

表1 釜塚古墳出土土器観察表①

挿図番号	番号	器種	トレンチ	遺構・層位	時期	胎土	調整		色調	焼成	備考
							外	内			
37	12	壺	8	周濠埋土	古墳前期	長英	ハケ	ヨコハケ	黄褐色	良	
	13	器台	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ	ヨコケズリ	桃褐色	良	
	14	器台	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ	ヨコケズリ	橙～灰褐色	良	
	15	高坏	8	周濠埋土	古墳前期	長英雲カ	ナデ	ナデ	灰黄色	良	
	16	二重口縁壺	8	外堤裾	古墳前期	長英雲	ナデ	ナデ	黄褐色	良	口縁打ち欠き
	17	二重口縁壺	8	外堤裾	古墳前期	長英雲	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	黄褐色	良	
	18	二重口縁壺	8	土器溜り	古墳前期	長英雲	ナデ	ナデ	橙褐色	良	
	19	蓋	8	周濠埋土	奈良		ナデ	ナデ	青灰色	堅緻	須恵器
	40	1	浅鉢		5層	縄文晩期	雲	ヨコ研磨	ヨコ研磨	黒褐色	良
2		深鉢		6層?	縄文晩期	長英	ヨコ条→斜沈	ヨコ条痕	灰褐色	良	
3		深鉢		5層	縄文前期	長英雲	ヨコ線・縦線	ヨコ条痕	灰褐色	良	波状口唇 端面刻み
4		深鉢		5層	縄文前期	雲	ヨコ条	ヨコ条痕	暗茶褐色	良	
5		深鉢		5層	縄文前期	長英雲	ヨコ条	ヨコ条痕	灰褐色	やや軟	
6		深鉢		5層	縄文前期	雲	縄文?		黒褐色	軟質	
7		深鉢		5層	縄文前期	雲	斜線	ナデ	灰褐色	良	外面に斜め斜線文
8		深鉢		5層	縄文前期	長英雲	ヨコ矢	ヨコ条	黒褐色	良	
9		深鉢		5層	縄文前期	長英雲	二条	ナデ	黒褐色	良	
10		深鉢		5層	縄文前期	長英雲	斜格子	条・ミ	灰褐色	良	外面に斜格子線文
41		11	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ沈→ヨコ沈	ヨコ条→ヨコ沈	灰褐色	軟
	12	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	ヨコ沈→斜沈	ナデ→ヨコ沈	灰褐色	良	口縁端面に刺突文
	13	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条→ヨコ沈	ヨコ条	黒褐色	良	口縁端面に刺突文
	14	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ沈→ヨコ沈	ナデ	黒褐色	良	上端に貼り付け突帯
	15	深鉢		31層	縄文前期	長英雲	タテ沈→ヨコ沈	ヨコ条	灰褐色	良	
	16	深鉢	14	32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	黒褐色	良	
	17	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ沈	ナデ	灰褐色	良	内面に黒色顔料
	18	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ矢	ヨコ条	黒褐色	良	
	19	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ二条	ヨコ条	灰褐色	良	
	20	深鉢		31層	縄文前期	長英雲	ヨコ条	ナデ	暗茶褐色	良	
	21	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	ヨコ条	ヨコ条	灰褐色	やや軟	
41	22	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	ヨコ条	ヨコ条	茶褐色	良	
	23	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	灰褐色	やや軟	
	24	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	灰褐色	良	
	25	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	灰褐色	良	
	26	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	灰褐色	良	
	27	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条痕	ヨコ条痕	灰褐色	良	底部付近
	28	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	ヨコ条→タテ線	ヨコ条			
	29	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	タテ条	ヨコ条	灰褐色	やや軟	底部付近
	30	深鉢		32層	縄文前期	長英雲	ヨコ条	ヨコ条	灰褐色	やや軟	底部付近
	31	浅鉢		32層	縄文晩期	長英雲	ヨコミ→ヨコ沈	ヨコミ	茶褐色	やや軟	口唇部

※胎土:長-長石 英-石英 雲-雲母 カ-角閃石 調整:沈-沈線 条-条痕 ミ-研磨 矢-矢羽根文

表2 釜塚古墳出土土器観察表②

4. 自然科学的分析

釜塚古墳出土石見型木製品の樹種について

東北学院大学大学院理学研究科附属植物園

鈴木 三男

小川 とみ

福岡県糸島市の釜塚古墳から出土した材の樹種を、横断、接線、放射の3断面の徒手切片を作成し、光学顕微鏡で観察した結果、クリ材であることが判明したので、ここに報告する。

出土材の構造

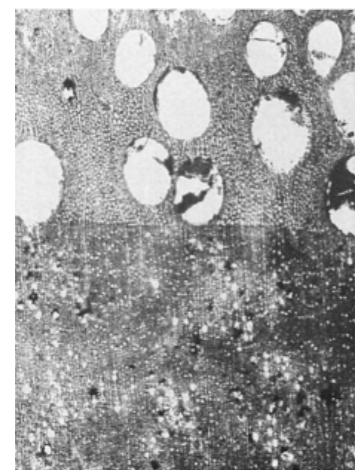
出土材は大変堅く、内部構造の保存は大変良い。

年輪が明瞭な環孔材で、年輪始めに楕円形の大きな道管が2-3層に配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が緩くまとまって火炎状に配列している。道管の壁孔は単一、側壁の壁孔は、丸みのある多角形で、交互状に配列し、らせん肥厚はない。道管放射組織間の孔壁は円～楕円で小さい。晩材部では細胞内容物が抜けた木部柔組織が接戦状に緩く配列している。放射組織は単列同性で背は高くない。

以上の形質からブナ科クリ属のクリ *Castanea crenata* Sie. et Zucc. と同定される。

クリは北海道南地域から九州南部、それに朝鮮半島南部近くに広く分布する落葉高木で、樹高30m、幹直径1mに達する。成長が早く、二次林、いわゆる雑木林によく生える。材はやや堅硬で割伐割容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので、大型建築物の柱材や土台、各種器具をはじめ、ありとあらゆる用途がある。また、特に耐湿性と耐朽性に優れているので、土木用材、木造りの橋、鉄道枕木などに用いられた。

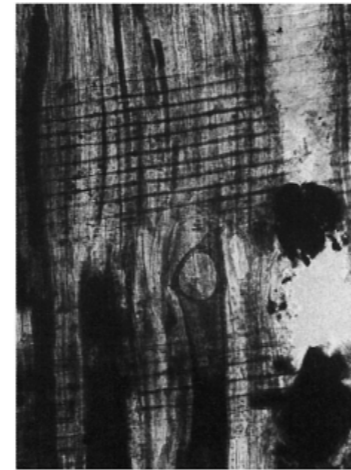
縄文時代に最も多く利用された木材で、弥生時代以降になるとその量は減るものの水湿に強い性質を利用して建築の土台まわり、土木用材として現在まで使われている。石川県真脇遺跡や富山県桜町遺跡ではクリの彫刻柱が出土している。(『国史跡釜塚古墳』2003より再掲)



横断面



接線断面



放射断面

写真 石見型木製品組織断面写真

5. 過去の空中写真を用いた釜塚古墳周辺の地形復元

九州文化財計測支援集団

永見 秀徳

(1) はじめに

現在我々が見ることができる釜塚古墳の姿は、当然整備後の姿である。もちろん整備前にも、調査時の写真や測量図が残されているが、近年の三次元計測技術の進展により、比較的簡便に過去の写真から往時の姿を仮想空間に復元することができるようになった。今回、米軍が1948(昭和23)年に撮影した航空写真等のデータから釜塚古墳の三次元モデルを作成した。ここではその手法と意義について簡単に述べることで、報告としたい。

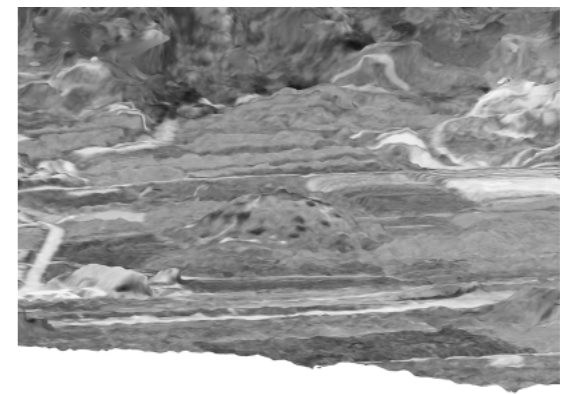
(2) 国土地理院による航空写真の公開

過去の航空写真測量用の写真は国土地理院のホームページに公開されている。低解像度の写真は、用途の制限はあるものの無料で提供される。また、航空写真を密着焼きした印画紙を高解像度(1,200dpi)でスキャンしたデータも、有料ではあるが入手することができる。主なものとしては、1960年代前半に測量用に国土地理院が撮影したものがあるが、1940年代後半に当時日本に進駐していた米軍によって撮影された写真も公開されている。精度の点から言えば国土地理院が1960年代以降に撮影した写真が望ましいが、米軍撮影の写真も、高度経済成長期以前の景観を復元できる点では非常に重要な資料となる。

(3) SfM/MVSによる解析と編集

今回、なるべく古い時期の釜塚の景観を復元するという方針のもと、まずは無料で公開されている低解像度の米軍写真データから、SfM/MVSによる三次元解析を試みた。解析に使用したソフトウェアはAgisoft社のMetashape Standard版である。なお、Standard版では縮尺を与えることができないため、それらの編集作業はオープンソースのCloudCompareとMeshLabを使って行った。

まず、低解像度の写真から解析して、一定の三次元モデルが復元できることを確認した(図1)で、釜塚を含む2枚だけ高解像度の写真データを入手した。もちろん数枚程度の高解像度写真データがあるに越したことはないのだが、1枚あたりの価格を考えると最低限の枚数に抑えたいための策である。実際の解析作業では、2枚の高解像写真データに加えて低解像度の無料写真データを6枚使用した。写真のライメントの精度を保ちつつ、最小限の費用で必要な部分の高解像度モデルを得ようというものである。



第43図 1947年撮影データから得られた三次元モデル

解析を終えると、実は問題が生じていた。測

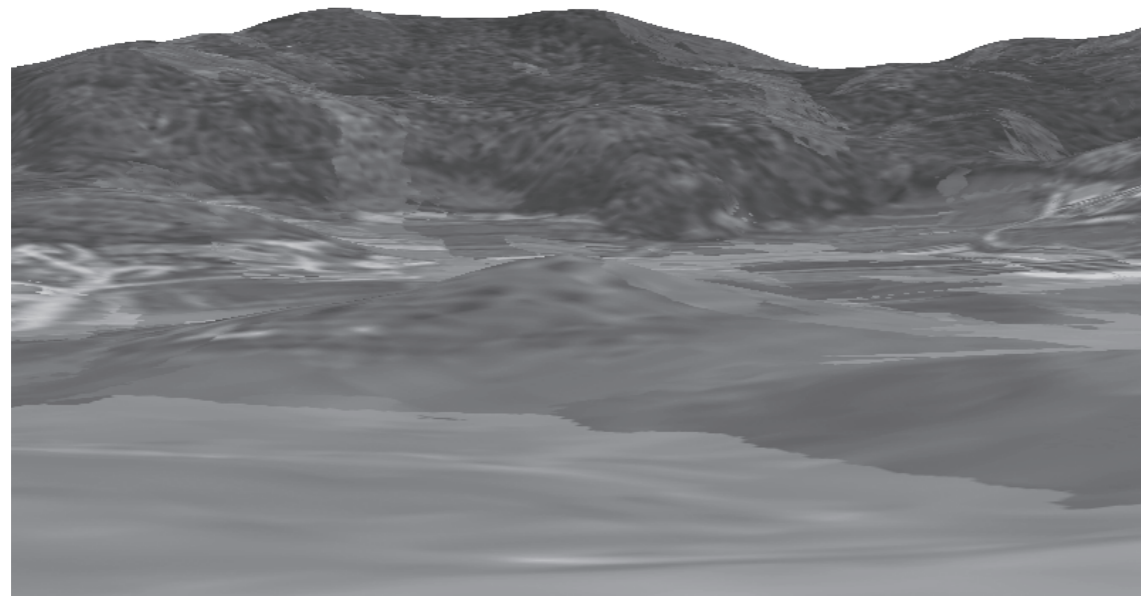
量用の航空写真は、いわゆる平行法のみで撮影されるため、解析して得られる三次元モデルに高さ方向に誤差が生じたり、いわゆるドーム状変形を起こすことが知られている。今回解析した結果を見ると、地平面は概ね平坦であって幸いにもドーム状変形は起こしていなかった。しかしながら、平面方向と高さ方向との比率が正しくない三次元モデルが生成され、その誤差をどのように補正するかが問題となった。

今回の事例では、あらかじめ標高のわかっている地点の比高差をとり、そこから高さ方向に一定の係数をかけて補正する方法を採用した。MetashapeもProfessional版であれば、三次元座標を与えることで自動的に補正されるため、Professional版を導入されているところでは、そちらの方法が良いだろう。

(4) 三次元モデルの活用と今後の展望

同様の手法を用いて、1961年に国土地理院撮影の写真データから得られた三次元モデルが、第43図である。概ね高さ方向も誤差を吸収できており、当時の景観を復元したものと考えて良い。さすがに、1961年に米軍が撮影した写真よりも高い高度から撮影された写真であるので、細部は表現できないものの果樹と思しき灌木も認められ、釜塚古墳および周辺の土地利用の実態も垣間見える。

今後は、こうした三次元モデルを利用することによって、往時の断面図等も一定程度復元することが可能となる。地道な作業ではあるが、釜塚古墳および周辺地形の考察において一助となることを期待したい。



第44図 1961年撮影データから得られた三次元モデル(高さ補正後)

6. 釜塚古墳墳頂の石材

(1) 松浦砂岩の板石

かつて、釜塚古墳の頂上部には古墳の被葬者の顕彰碑が建てられていた。旧地権者の鷲尾氏によるもので、銘文から昭和12年に建立されたものであることがわかる。しかし、平成17年3月の福岡西方沖地震によって石碑が倒れたため、現在は墳頂の傍らに置かれている。表面に海蝕痕が点々とみられるのが特徴で、周辺に同様の特徴をもつ石材が7個ある。

去る2月に当該古墳を訪れた柳澤一男氏から、これらの石材が松浦砂岩と呼ばれる唐津湾岸の露頭で産出する石材の可能性があることをご教示いただいた。

小松譲氏は、松浦砂岩が唐津平野の4～6世紀に築かれた首長墓の石室や石棺材として多用されていることを指摘している(註1)が、釜塚古墳は糸島半島の西側にあり、唐津湾に面した海岸線近くにあることから、海路を用いて唐津湾岸の石材の搬入は比較的容易と考えられ、実際に長須隈古墳(4世紀・糸島市二丈鹿家・註2)では舟形石棺が、丸隈山古墳(5世紀・福岡市西区周船寺・註3)では箱式石棺が、いずれも松浦砂岩製であることが知られている。

さらに、明治18年頃に石室内で朱が詰まった石櫃が発見されており(註4)、地権者からの聞き取りで、石室の石材を使用して碑が建てられた旨の情報が得られている(註5)ことも考慮すると、当該古墳の埋葬施設の石材の一部であった可能性が高い。

海蝕痕とみられる大小の半球形の窪みが観察されるものもある。石碑(石材①)の他に、その台座に用いられた板石(石材②)、さらにその下に礎石として半ば地中に埋め込まれた状態の板石(石材③)、この他、かつて石碑の前面に石畳状に地面に敷き並べられていた板石(石材④～⑦)などがある。この中には小口に切断のための楔痕を残す板石(①・②・⑤・⑦)もあり、用途を推定するには石材の接合復元も必要であるが、現状では地中に埋没している部位もあり、石材を詳細に記録することはできない。

一応、今後の検討の目安とするべく現況の略図を作成したので掲載した。

石材①は、石碑として使用されていたもので裏面に昭和12年建立と刻まれており、地震で倒れた際に折れた。全長183cm、幅75cm、厚さ18～19cmで加工された小口角付近に赤色顔料が付着している。石棺材と推定される。

石材②は、碑の台座に使用されていたもので、長さ104cm、幅75cm、厚さ19cmを測る。一端に楔を入れて割った痕がある、小口面に「大正14年建」と刻まれている。この石の下に板状の結晶片岩がセメントで接着されている。破損が著しいので原形はわからないが、幅は110cm以上あり、一部に赤色顔料が厚く付着していることから、石棺材の一部であることがわかる。

石材③は、長さ116cm、幅64cmの長方形の板石で、厚さは13～14cmを測る。露出面は敲打加工され、平滑であるがわずかに凸面に仕上げられている。また、長辺の片側中央に長さ30cm、幅は基部で24cm、先端付近では18cmの台形状を呈する突起が作り出されている。突起は先端に向けて薄くなるようである。側面には筋状の加工痕が明瞭に残る。

石材④は、長さ113cm、幅55cm程度で一端は土中に埋もれている。厚さは6cmほど地上に出ている。側縁の一方は直線的に加工されているが、もう一方は両端が突出しており、石材⑤の形状と類似することから、これが意図的に造作されたかものか検討が必要である。

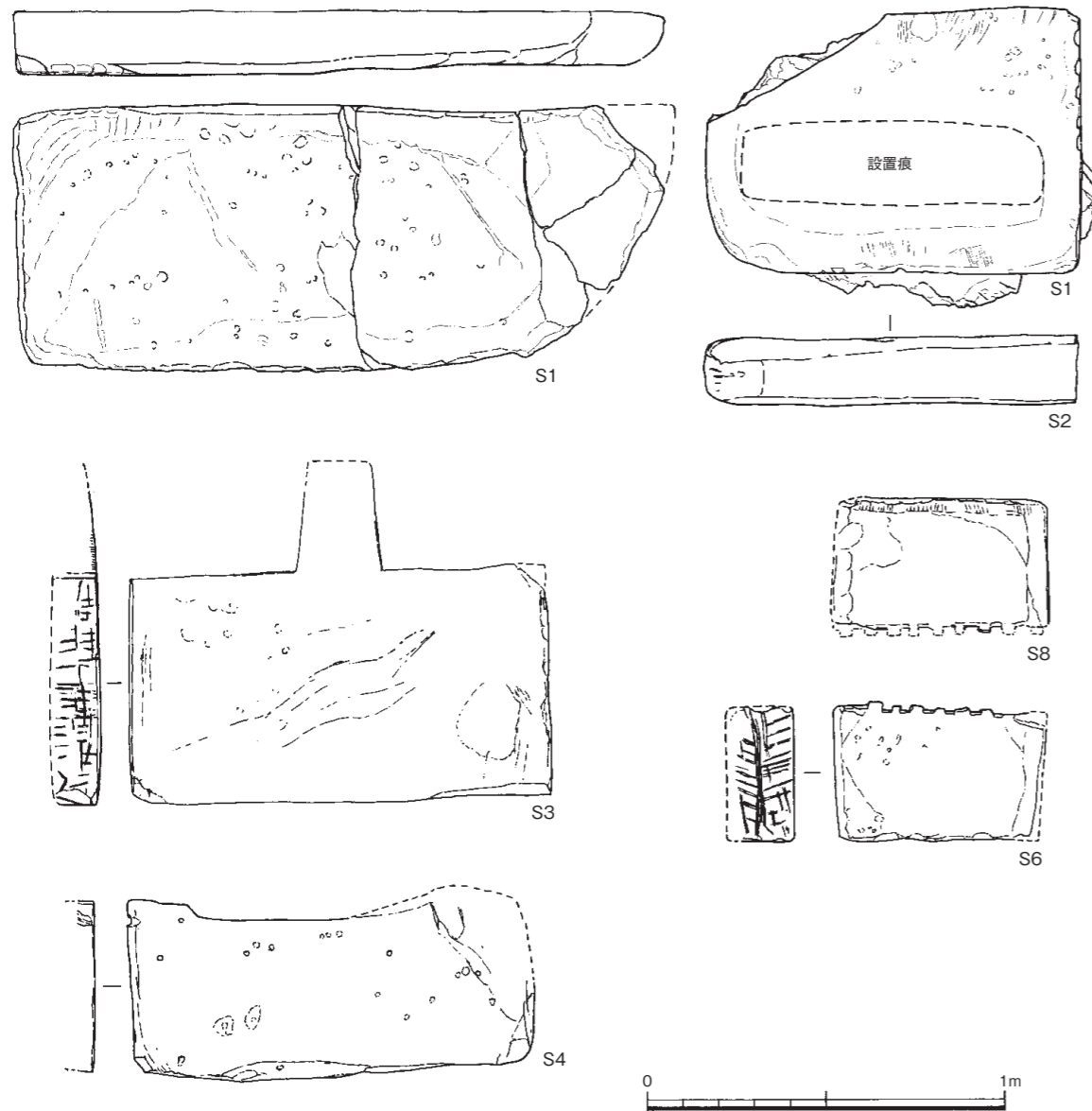
石材⑤は、現状で長さ110cm、幅50cmほどを測り、土中に埋もれている部位が多く詳細は不明である。

石材⑥は、長さ64cm、幅40cmの長方形の板石で、厚さは18～19cmとみられる。長辺の一端は縁辺の調整加工痕を残すが、他端には新しい楔痕を残す。短辺小口には手斧によるとみられる線状の加工痕跡が認められる。

石材⑦は、現状で長さ100cm、幅50cmほどを測り、土中に埋もれており詳細は不明である。

石材⑧は、長さ64cm、幅38cmで、墳丘に埋没し、わずかに表面が姿を見せるのみのため、正確な形状は把握していない。石材⑥と同じく楔による切断痕が認められ、縁辺の手斧によるとみられる線状の加工痕跡が認められる。⑥と接合する可能性が高い。

石材⑨は、30cm四方の程度の松浦砂岩製の石材片で墳頂に露出する。破損が著しく本来の形状は明らかでないが、一端に石材④と同様の突出部がみられることが注意され、双方が対で使用されていれば、石棺材である可能性がある。



第45図 釜塚古墳墳丘上石材略測図(1/20)

(2) 墳丘で採集された赤色顔料付着礫

第2次調査の際に墳丘上で採集した遺物の中に、赤色顔料が付着した玄武岩の板石（図版31-c）と円礫（図版31-d）が採集された。6・7トレンチで検出した盗掘坑からも赤色顔料が土砂に交じって検出されており、横穴式石室の壁面にも赤色顔料が塗られていたことと合わせ、石室内では相当量の赤色顔料が使用されていたと推測される。

玄武岩の板材が石室の壁材ならば、赤色顔料はその小口面に付着している可能性が高いと考えられるが、採集された石材では板面側に付着していること、また、同一面で顔料が付着する部位と全く付着していない部位を持つ石材もあることなどから、箱式石棺材の一部である可能性が高いと考える。墳丘上の石材②に接着されている玄武岩の板石にも赤色顔料の厚い塗布が確認されており、これの一部である可能性が高い。

参考資料として、横穴式石室内の大きな板石にも触れておく。奥壁の手前に横たえられた板石は、長さ2.27m、幅1.13m、厚さ15cm前後を測り、石材の裏面と横口部を向いた側縁にも赤色顔料が塗布されていたことが報告されている（註6）。現物の観察は行っていないが、写真で見ると板状剥離痕が観察され、玄武岩のような質感である。赤色顔料の塗布状況からみると、箱式石棺の側壁材の可能性が高く、石室外で採集された赤色顔料と同一の石棺材である可能性が高い。糸島地方では5世紀代の古墳においても石室壁面や箱式石棺に赤色顔料を塗布した例は多い（註7）。

なお、墳頂の松浦砂岩の板石も組合せ式の石棺材であれば、石室内に材質の異なる複数の埋葬棺が設けられた可能性、あるいは墳丘上に横穴式石室以外にも埋葬棺が存在した可能性も残されており、検討が必要である。

円礫は埋葬棺内に敷き詰めた礫床材などであろう。

註

1. 小松譲 2017 「佐賀県末盧国と松浦砂岩石室・石棺を訪ねて」『考古学ジャーナルNo701』ニューサイエンス社
2. 柳田康雄 1982 「長須隈古墳」『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会 六興出版
3. 柳沢一男 1986 「丸隈山古墳」福岡市教育委員会
4. 糸島郡教育会編 1931 『糸島郡誌』
5. 石山勲 1981 『釜塚古墳』前原町教育委員会 8頁
6. 註5に同じ
7. 河野摩耶他 2019 「糸島地方における弥生時代～古墳時代の赤色顔料」『伊都国歴史博物館紀要15』

IV. まとめ

1. 古墳時代以前

釜塚古墳は、長野川によって運ばれた土砂と粘質土の互層により形成された標高3mほどの低質微高地上にある。古墳の北西部に広く展開する平野は、江戸時代以後の干拓地であり、それ以前は、唐津湾側から湾入する潟状地形が古墳近くまで迫っていたと考えられ、まさに波静かな海浜に面した古墳であった。

航空写真によって復元された昭和20～30年代の俯瞰景観でうかがえるように、釜塚古墳の後背地は、宮地嶽から派生する尾根の谷間になだらかな傾斜を有する複数の微高地が形成されており、一帯が縄文～弥生時代の集落として利用されたと推定される。

古墳の周辺からは弥生中期～古墳前期の土器が多く出土している。甕が中心で壺や高坏は少なく、丹塗磨研土器も極めて少ない。土器とともに石錘が出土し、近隣の神在横島遺跡から韓式土器も出土していることから、唐津湾や玄界灘を舞台に漁労、交易活動などにも関わっていたことがうかがえる。

第4次調査では、標高2.5mの5層（砂層）下で縄文晩期の浅鉢や磨製石斧片とともに木杭列を検出したが、用途については不明である。さらに31～32層では曽畑式土器の包含層を検出した。当該地方では希少な縄文前期の資料である（註1）。土器の胎土中には滑石が含まれておらず、施文に主文様の区画帯が配されていないなどの特徴から、水ノ江編年の曽畑Ⅲ式（註2）に相当するものと考えられる。

2. 釜塚古墳

墳丘の基本構造 発掘調査によって墳丘径56m、高さ10m以上、周囲に幅5.2～5.8mの湛水した周濠がめぐる古墳であることが判明した。北向きに地山整形により成形された渡り土堤が配され、さらにその周囲を盛土と地山整形を併用した低い外堤が配される。現状では外堤が全周するのか確認できなかったが、これを基準に想定しうる墓域は径89mに及ぶ（第46図）。

墳頂地下には東向きに開口する横穴式石室を構築するが、墓道は頂上から斜め47度に傾斜して下り短い羨道に接続する古式の構造を呈する。

周濠 1次調査で墳丘周囲をめぐる周溝を検出し、第2次、3次調査では溝が墳丘を全周することを確認するとともに、溝の底面付近から植物遺体や木器が出土したことから、掘削当初から溝内に水を湛えていたことが確実となり、「周濠」の呼称を使用した。

しかし、深さについては最深部でも岸から1m程度（12トレンチ）で、墳丘の規模に比して浅く感じられるが、砂質土壌が基盤であるために古墳基底部の崩壊を防ぐことも考慮されたのであろう。

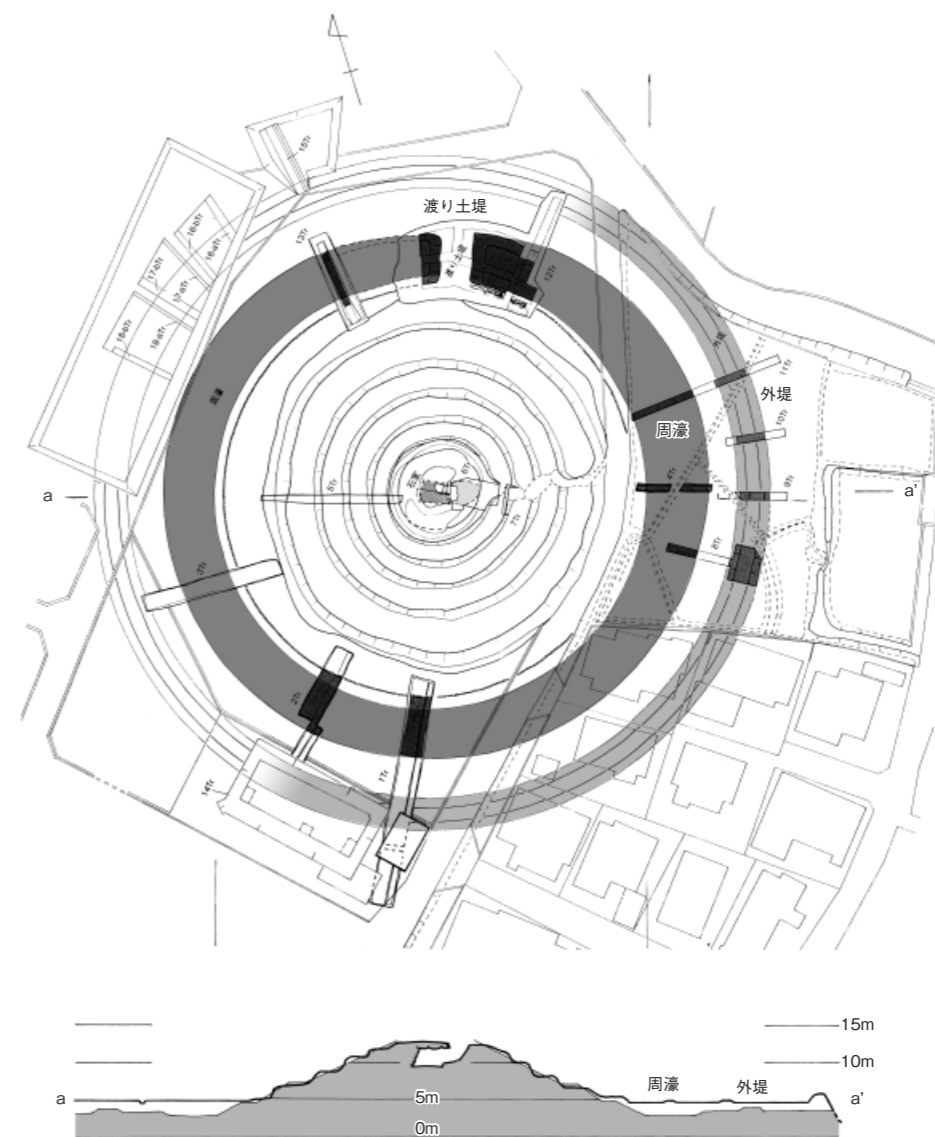
なお、九州地方において周濠を意図的に掘削されたとみられる古墳は少なく、わずかに御所山古墳（5世紀後半・行橋市）、御塚古墳（5世紀後半・久留米市）、権現塚古墳（6世紀初頭・久留米市）、などが思い浮かぶ程度である。周濠については、築造当初の明確な意図によるも

のかは判断が難しいとされる（註3）が、釜塚古墳の場合は隣接する北側台地上でも古墳の築造は可能であり、周濠への湛水は当初の計画段階から予定されていたものと考えたい。

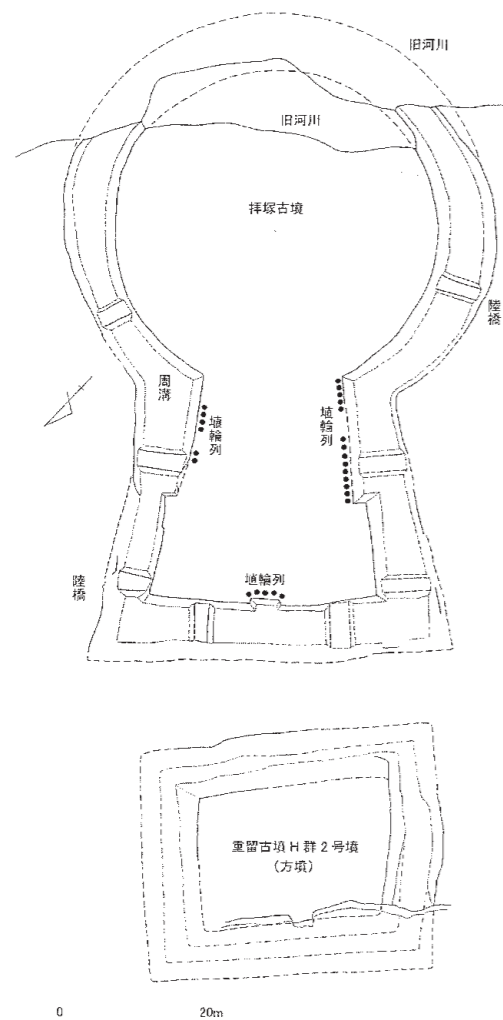
渡り土堤 墳丘北側の12トレンチで、幅5mにわたって葦石が途切れた箇所を検出し、その位置では周濠が幅5mにわたって途切れ、岸と接続する渡り土堤が設けられていた。

渡り土堤は、地山成形のみで、側面の護岸、葦石等は認められず簡易な構造を呈する。渡り土堤上場の高さも中央部で60cmほどしかなく、断面も緩斜面状を呈し外観はメリハリに欠ける。周濠の岸と墳丘1段目テラスを結ぶ程度の高さはほしいところであるが、横断面の土層観察では渡り土堤の土砂の崩落や堆積を示す土層は確認できなかった。

渡り土堤の機能について、墓道、作業道、堰などが想定されている（註4）が、本古墳の場合は地盤が脆弱で人々の度重なる往来には不向きであり作業道とは考えにくい。構築の位置や数からみて水位の管理目的に築かれたとも考えられず、葬送の儀礼にかかる通路として機能した可能性が高いと考える。渡り土堤に近い周濠底面から儀礼品としての性格が強いと考えられる石見型木製品や組み合わせ式木製品が出土しており、祭祀における通路が意識されていたと考えられること、横穴式石室の開口方向は渡り土堤の進入方向から東に直角に振れており、意



第46図 釜塚古墳墳形復元案(1/1,000)



第47図 拝塚古墳墳丘図(1/1,000)

また、最も残りの良い9トレンチでも48cmしかなく、土手法面の傾斜角度が20~30°しかないことも考慮すると、当初から低平な構造であったと推定され、合わせて周濠が浅いことや岸から5mほど離れて設置されていることも考慮すれば、周濠の貯水機能の補完などを目的としていたとは考えにくい。

一方、築堤材として透水性の低い粘土が使用していることから、防水性を重視した意図がうかがえる。後背地の宮地嶽から流れ落ちる雨水への対策も不可欠であったと考えられ、宮地嶽側からのみ遺構が検出された理由もうなづける。

外堤が周濠とともに同心円状に配された理由について、古墳の墓域を示す周庭帯(註6)の外郭線としての意味合いが強く、この遺構の最大の目的ではないかと考える。

墳丘 墳丘は、径57mを測る。管見で知りうる北部九州の主な大型円墳を表3に示したが、当該地域において最大級の規模を有することがわかる。また、5トレンチで確認された墳丘の旧斜面の勾配線の観察から、3段築成と考えられる。

墳丘は大半が盛土による築造で、使用された土は周濠掘削時の排土を含め近郊の土壌を採取して使用されたと考えられるが、墳丘下に粘性土壌が堆積していたことは結果的に墳丘の維持

図的な遺構の配置も推測できるからである。

九州地方では渡り土堤が敷設される古墳は、拝塚古墳(福岡市)、小坂大塚古墳(熊本県御船町)、女狭穂塚古墳(宮崎県西都市)など極めて稀で分布の中心は近畿地方にあり、その影響下で成立したものと考えられる。

なお、拝塚古墳は、推定墳丘長75mを測る室見川流域では最大の前方後円墳で、築造時期も5世紀前半で釜塚古墳に近い(註5)。後円部に2本、前方部に6本の両側縁を葺石で護岸した渡り土堤が検出されており、注目される古墳である。

外堤 釜塚古墳の特筆すべき遺構として注目されるのが外堤である。低平な土堤であるが地山整形と盛土を併用し、上面の盛土は、黄色、白色、灰色、青色など現地調達した粘土ブロックを撞き固めて断面台形に整形している。

外堤の延長方向は、墳丘を中心に周濠と同心円関係を伴って配されており、古墳の付属施設として構築されていることは明らかであるが、墳丘の南や西部では、現在のところ確認できておらず、全周するか否かについて確認できていない。

には功を奏したものと考えられる。固結した粘土は頑強で流失・崩落しにくい。

また、墳丘の盛土が周縁を高めに盛りながら積み上げる「カルデラ手法」(石山勲氏指摘『釜塚1981』)が観察された。古墳の盛り土工法として

は聞き慣れないが、砂質地盤の上に10mにわたり盛土を施しても、現代にまで墳形を維持する高い耐久性を有した要因の一つと考えられる。

葺石 1・2・13トレンチで検出した列石群は、いずれも墳丘とともに葺石の上面が削り取られ腰石だけが辛うじて残存した状態と考えられる。1・2トレンチでは調査の際に葺石背後の墳丘盛土まで取り払われ、あたかも平面に置かれたような状況を呈していたことから、『釜塚1981』では「貼石状」と表現され、墳裾区画の置き石との見解も示された。しかし、12トレンチでは墳丘斜面での積み上げが看取された。墳丘裾から30cmほど斜面上方に溝状の段をめぐらせて幅40~60cmの腰石を横倒しに据え、上方に向かって石を積み上げていた。平滑な面が表側にみえるように並べられており、一見すると貼石のように見せている。使用石材は総じて大振りで、当該地方の他の古墳と比較しても石材の大きさは際立つ(第48図)。

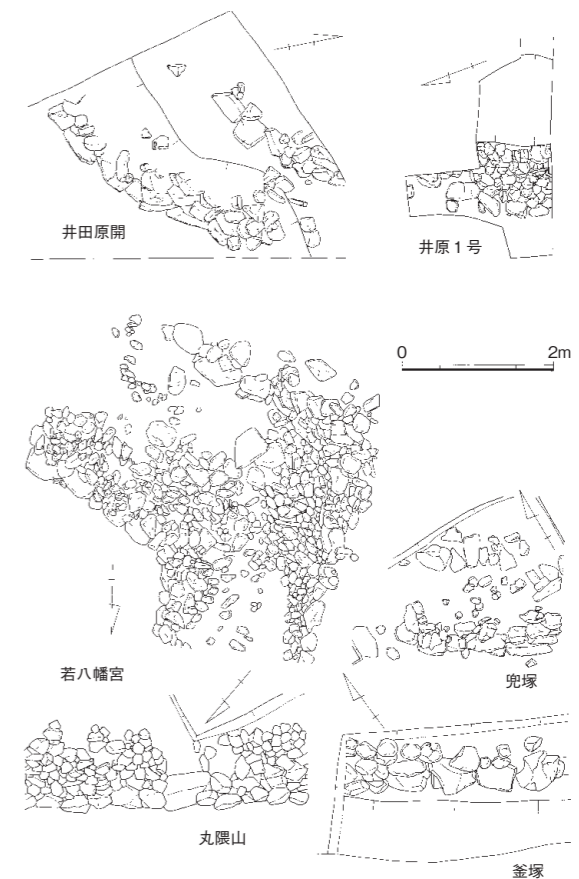
石材は花崗岩や砂岩など多様な石材を用いており、先行する丸隈山古墳では玄武岩を多用していたことは対照的である。

横穴式石室 釜塚古墳は、5世紀の北部九州型横穴式石室の変遷過程を示す古墳として注目を集めてきた。老司古墳、鋤崎古墳(福岡市)、谷口古墳(唐津市)など玄界灘沿岸に相次いで出現する初期横穴式石室に後続するが、前壁まで板石を積み上げる発生期の構造から両袖に板石を立てる構造へ移行し、玄室側壁の持ち送りの勾配を減少して石室構造の安定化を図っており、同系譜の横穴式石室としては一定の到達点を示した石室といえる(註7)。同様の構造をとるとみられる丸隈山古墳(福岡市西区)では前壁が残存していないため、築造時の状態をつぶさに残す貴重な遺構である。

この石室構造は、釜塚以後も、狐塚、西堂四反田、井原南田、鎮懐石八幡宮裏、坂ノ下4号など、当該地方における中間首長

古墳名	旧国名	規模(m)			時期	段築	備考
		墳丘径	墓域径	高			
御塔山	豊後	75.5			5c前半		造出付き
勝負塚	肥後	58.7		11.4	5c		
釜塚	筑前	56	89	10	5c前半	3段	
小坂大塚	肥後	54	79	10.5	5c前半		渡り土堤
慈恩寺経塚	肥後	53	60	8	5c前半	2段	
葛原	豊前	53	69	6	5c後半	2段	横穴式石室
玉島	肥前	48	—	9	5c前半		横穴式石室
権現塚	筑後	45	67?	5.7	5c	2段	

表3 北部九州における5世紀の主要大型円墳一覧



第48図 糸島地方の主要古墳の葺石比較(1/100)

層の墓に順次採用・継承された。狐塚古墳以外の古墳は、墳丘径が15メートルに満たない小型であったため、墓道はおのずと横方向に延びて直接墳丘の斜面に出る構造へと変化し、石室と墓道の間に段を有する構造のみが継承された。

この構造からの最終的な脱却は、前壁の袖部に板石に代わって塊石を横積みすることにより、明確な羨道部を設けた兜塚古墳以後となる（第49図）。

なお、石室の構築材は鋤崎古墳や丸隈山古墳に比べて、玄武岩の使用が減少し、古墳周辺で入手可能な花崗岩の使用割合が増加していることには留意しておきたい。

埋葬棺 釜塚古墳では、明治18年頃に石室が発掘された際の記録に、内面に朱が詰まった石櫃が報告されているが、墳頂に赤色顔料が付着する結晶片岩の石棺材が残されていることが確認され、記録の正しさを裏付けることとなった。

この他、墳丘上に現存する6枚の板石が松浦砂岩であることが判明した。唐津湾岸地域では古墳時代前期から中期にかけて首長墓の埋葬棺材として多用されているが、丸隈山古墳の大型箱式石棺にも同材を用いた石棺が使用されていることから唐津湾岸地域首長との密接な交流が想定され、今回新たに確認された石材も、石棺材である可能性が高い。

上記に関連して、松浦砂岸の石材には、厚さが18～19cmで自然面を多く残すもの（石材①・②・④・⑤・⑦）と、厚さ13～14cm前後で板状に丁寧に加工が施されたもの（石材③・⑥・⑧）の2種がある。これらが異なる埋葬棺として利用されたのであれば、赤色顔料が塗布された石棺と合わせて3基の石棺が存在した可能性がある。

釜塚古墳の石室床面積は10.5㎡ほどあり、初期横穴式石室としては最大面積を誇る（表4）。釜塚古墳を前後して築造された玄界灘沿岸地域の横穴式石室は幅広の長方形プランを有し複数の埋葬棺が安置されたものが多い。釜塚以前では鋤崎（3基）・丸隈山（2基）、釜塚以後では石棺から屍床へと変わるものの、狐塚（3基）・西堂四反田（2基以上）・井原南田（2基）であり（第49図）、釜塚古墳でも同様に複数の埋葬施設が設けられた可能性は高い。

なお、当該地方の首長系譜にある横穴式石室では、床に板石を立て屍床を区画したり、石室の壁面に「コ」の字形に配する葬列が引ヶ浦古墳以後5世紀前半の古墳に多く見受けられるが、同様の事例は横田下古墳（唐津市）、別当塚東古墳（荒尾市）、城2号墳（宇土市）など初期の肥後型石室古墳でも認められ、これら石室の工人集団との交流の結果として生み出されたものと考えられる（註8）。

古墳名	墳形	時期	規模(m)	横穴式石室計測値(m)				床面積(㎡)
				長	前壁幅	奥壁幅	高	
鋤崎	前方後円	4c後葉	62.0	3.4	2.6	2.6	2.0	8.84
丸隈山	前方後円	5c初頭	85.0	4.0	2.5	2.5	2.0	10.00
釜塚	円	5c前葉	56.0	3.8	2.7	2.9	2.1	10.64
曾根狐塚	円	5c前葉	35.0	2.6	1.7	1.7	—	4.42
西堂四反田	円	5c中葉	14.0	3.6	1.8	2.2	—	7.20
徳永古墳群1-3号	円	5c中葉	15.0	3.0	2.2	2.2	—	6.56
井原南田	円	5c後半	11.0	2.5	1.4	1.8	—	3.97
坂ノ下4号	円	5c後葉	13.5	3.0	1.4	1.5	—	4.38
飯氏兜塚	前方後円	5c後葉	53.0	4.4	2.2	2.4	1.8	10.12
飯氏二塚	前方後円	6c初頭	90.0	3.5	2.3	2.5	—	8.40

表4 糸島地方の4～6世紀初頭の主要横穴式石室規模比較（各古墳の規模は、前方後円墳は墳丘長、円墳は墳丘径）

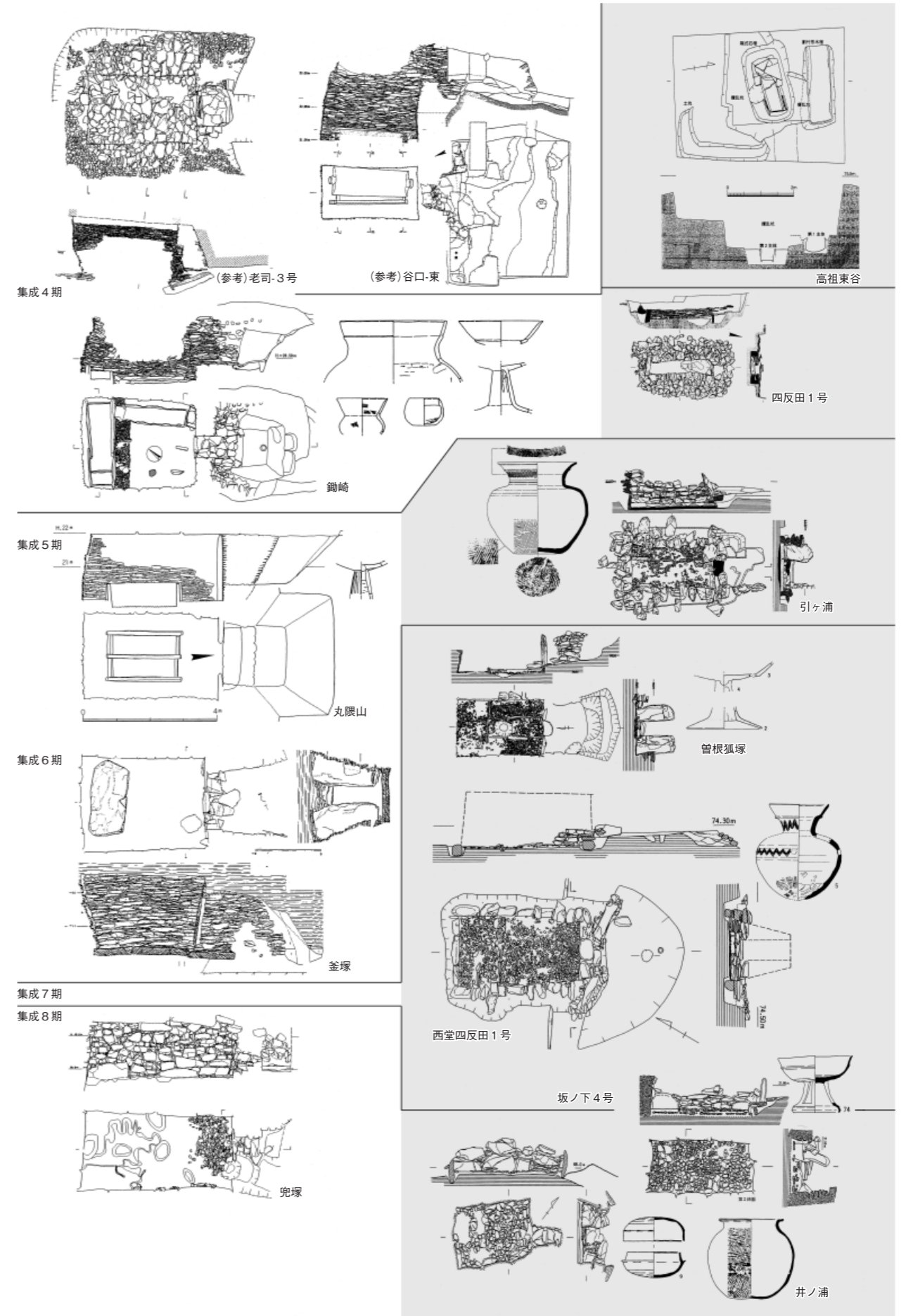
初期横穴式石室の成立期における中九州地方首長との交流の一端が垣間みえる。

今後の各材の詳細な検討によって埋葬棺の原姿や他地域との交流のさらなる解明が進むことが期待される。

埴輪 採取された埴輪

大型古墳

中・小型古墳



第49図 糸島地方における初期横穴式石室の変遷(1/160)

数が少ないが、墳丘の損傷具合に比べ表面に現れた埴輪の量は少なく、周濠トレンチからの出土量も極めて少ないことなどから、本来、使用された埴輪の総数が少なかったと推定される。

有黒斑であることや突帯の形状、調整技法の変遷の比較検討から製作時期は丸隈山古墳と鏡塚古墳との中間（5世紀前半）に位置付けられる（註9）。

出土埴輪の内訳は、円筒、朝顔形埴輪以外に楕形、家形埴輪の割合が高いことが特徴で、今回新たに確認された草摺形埴輪を含め中期前葉の形象埴輪の出土傾向とも重なる（註10）。楕形埴輪の方形区画線や綾杉文、複合鋸歯文などの線刻文様構成が粗いところも特徴といえる。

石見型木製品 出土遺物で特筆されるは石見型木製品である。

石見型製品は、奈良県石見遺跡から出土した特殊埴輪について石見型楕形埴輪と呼称したことから注目を集め、その後、石製や木製の類似資料が出土したことに端を発し、それぞれ関連する資料として命名された。近年はその起源や用途について多視点からのアプローチが進められ、各々の見解に依拠した新たな呼称も提唱されている（註11）。

分布の中心は、奈良、京都、滋賀県など近畿地方にあり（註12）、九州では西原古墳（佐賀市・5世紀後半）、岩戸山古墳（八女市・6世紀前半）、姫ノ城古墳（氷川町・6世紀前半）で石製品が出土する（註13）ものの、木製品は当該古墳のみである。材質が有機質であるため古墳の立地環境によって資料残存状態が大きく左右されることは理解できるが、九州では木製品を樹立した確実な痕跡が報告されていないことから、やはり使用された古墳数は極めて少ないとみ

るべきであろう。

同種製品の基本形は、木製品では表飾部が幅広く周囲に4段の突起状の張り出しを配するタイプが主流であるが、釜塚例のように身幅が狭く3段突起を有する例は少なく古式に位置づけられており、鈴木裕明氏、吉田野乃氏は、現段階における最古段階に位置づけた（註14）。

同種のミニチュア製品が宝塚1号墳（5世紀前半）の船形埴輪の船上の表飾品として立てられており、形状も釜塚例に似て表飾部は細身で突起の張り出しも大きい（註15）。釜塚古墳の築造年代を推定するうえで大いに参考となる。

現時点では、同種製品の最古段階とされるものの、分布の中心が近畿地方にあることから、その起源も当該地方にあると考えられている（註16）。また、製作時期は異なるものの韓国の月桂洞1号墳（6世紀前半）からも同種製品が出土していることから（註17）、韓半島南部とヤマト王権を結ぶ政治的ネットワークを裏付ける資料としても重要である。

なお、北部九州において石見型製品の使用者は極めて限定的で、5世紀前葉には玄界灘沿岸勢力（釜塚古墳のみ）であったものが、中葉以後にはいと筑後～中九州勢力に移る。使用方法についても初期段階における単体での使用から複数樹立へと変化する様も近畿地方の変化に連動しており興味深い（註18）。

組み合わせ式木製品 周濠から出土した組み合わせ式木製品は、柄と柄穴の計測値をもとに組み方を推定すると第51図（上）のとおり「日」の字状の板枠に復元することができる。両短辺は板を立てて組むのに対し、中央の棧材は横向きに組み立てられており内法で長さ90cm、幅40cm程度となる。なお、短辺材の幅が長辺材よりも広く、組んだ場合に短辺材が上下にはみ出すのが特徴で、いわゆる箱形とは異なる形状を示す。

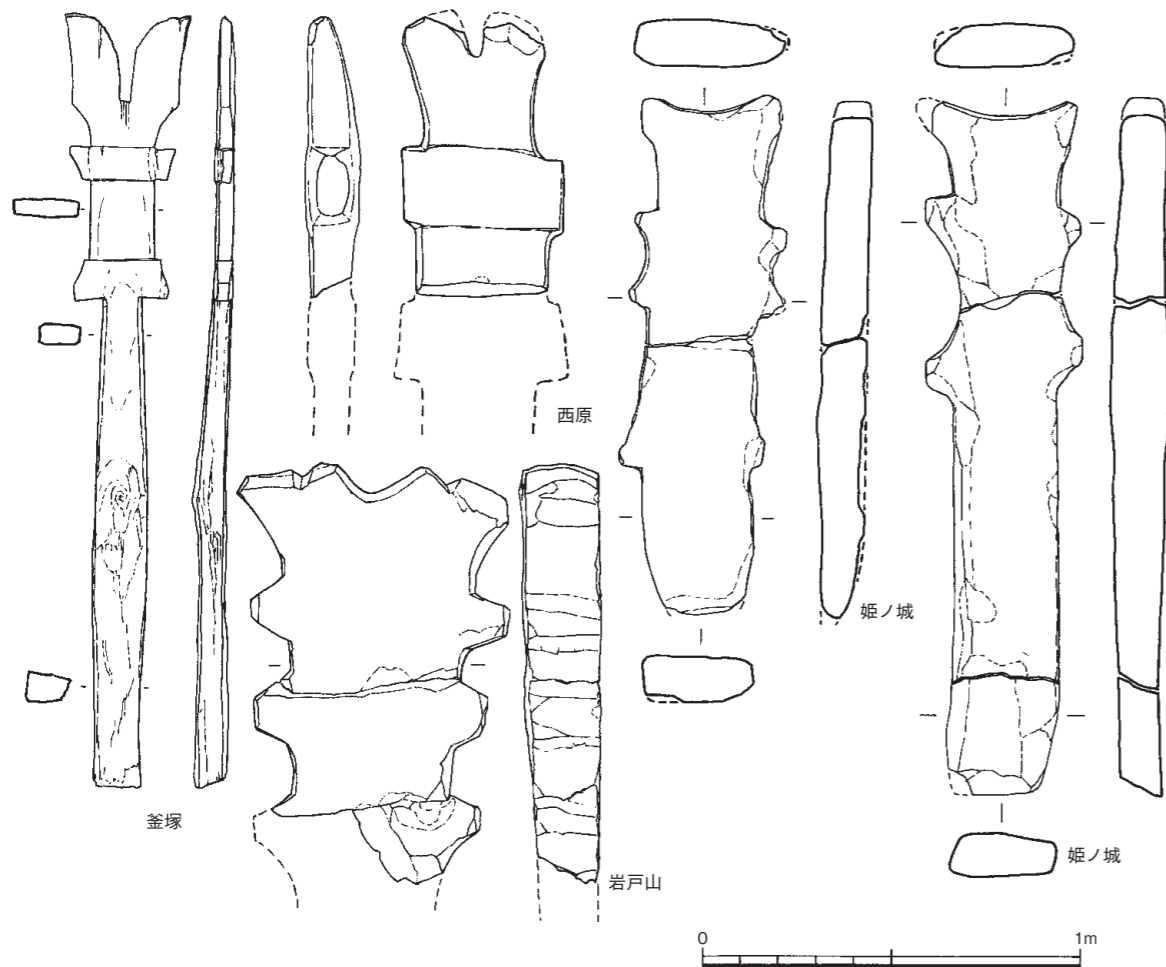
類似する組製品として服部古墳群1号、12号墳（滋賀県守山市 5世紀）から出土した箱形容器が知られる（第51図）。1号墳からの出土品は、長さ56.6cm、幅23.5cm、高さ4cmで、釜塚と同様に柄穴を設けた長辺材と柄を削り出したと棧材を組み合わせたものであり、長辺の両端は斜めに加工し底板を伴わないなど基本形態を同じくし、板幅が等しい安定した枠を形成する。大きさは釜塚資料の概ね2分の1のサイズである。箱形とするが底板はなく繊維質材を敷いた簀子状の底面構造が想定されている（註19）。

釜塚では上記の枠板とともに幅3～3.5cm前後の薄板が10枚近く出土し、あたかも束ねて遺棄されたかのような出土状態を示したことは、これらが一括的に使用されたものであることを強く示唆している。最も長い板は全長87.5cmを測り箱形の内法値に近く、仮にこの薄板を10数枚横に並べて簀子状に綴り、両端を枠板の縁に垂らして枠内に落とし込めば折敷のような使用が可能となる。葬送儀礼の終了とともに解体投棄されたのであろう。

古墳の築造時期 古墳の築造時期については、まずは当該地方における大型横穴式石室の検討結果から、鋤崎→丸隈山→釜塚→狐塚→西堂四反田へと変遷を遂げたことが明らかとなった。

最古の横穴式石室とされる鋤崎古墳は、出土した土師器が重藤編年の3A期に属することなどから4世紀後葉の築造と推定されており、西堂四反田古墳ではTK208型式の須恵器が墳丘に埋納されていたことから、おおむね5世紀中葉の年代が与えられるので、この間の石室変遷間隔を均等に配置して並べれば、釜塚古墳の築造時期は5世紀前葉に収まるものと考えられる。

こうした古墳の年代観は、出土した有黒斑埴輪や石見型製品が船形埴輪の甲板に表飾された



第50図 九州地方の石見型製品（1/20）

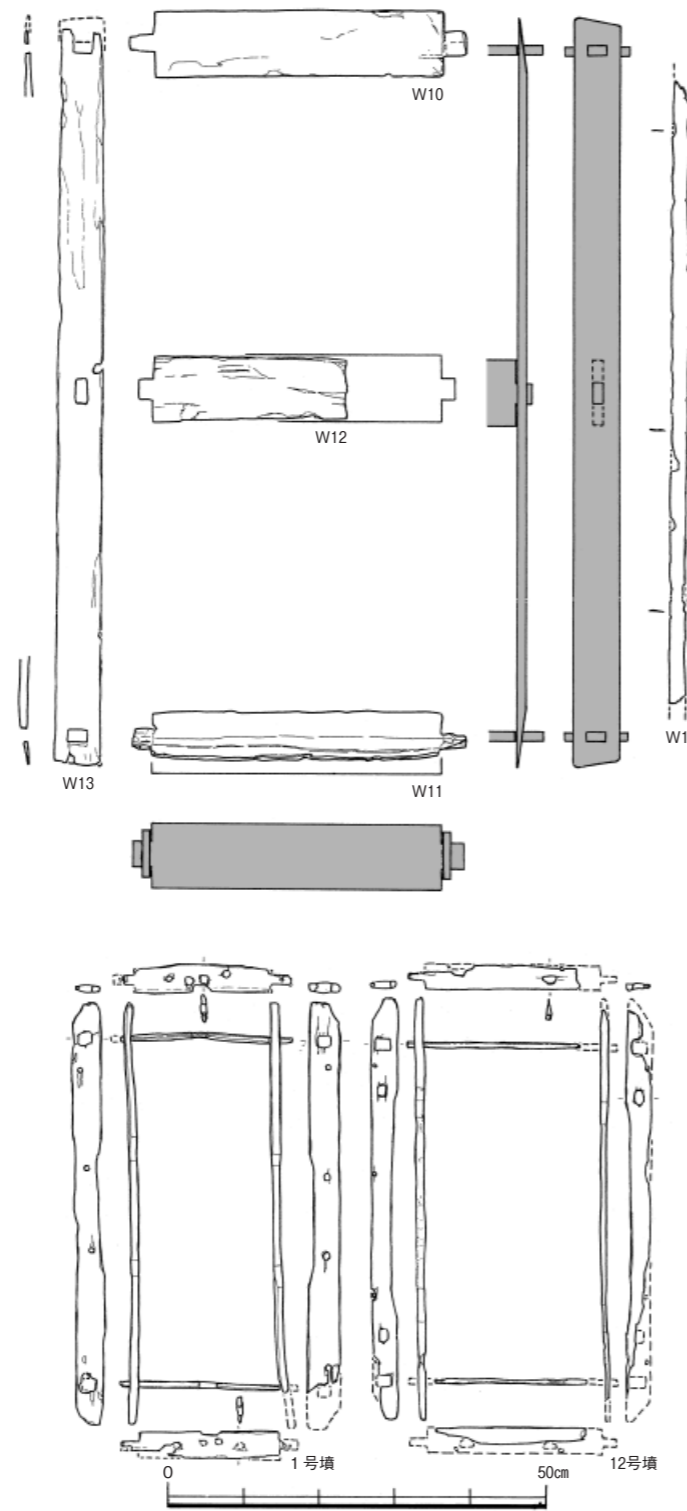
宝塚1号墳の年代観、さらには副葬品として新たに報告した柳葉形長頸鉄鏃の出現時期とも大きな齟齬はない(註20)。

被葬者像と古墳の総評 釜塚古墳は、玄界灘沿岸で最大径を有する大型円墳で、周濠・渡り土堤・外堤を配し、墳丘には大振りの葺石を廻らすなど、近畿地方の前期後葉～中期前葉の大型前方後円墳の要素が取り込まれており、被葬者とヤマト王権との密接な関係を色濃く感じさせる。石見型木製品を葬送儀礼に採用されていることもその表れだろう。

その背景には、当該地方を拠点として玄界灘沿岸の制海権を掌握し、ヤマト王権と大陸勢力とのネットワークを仲介した大首長の存在が浮かび上がる。

その一方で、総数60基超を数える前方後円墳が古墳時代のほぼ全期間を通じて継続して築造された当該地方において、釜塚古墳の築造がその後の前方後円墳の小型化に転ずる変換点となる様相(註21)は、ヤマト王権下における当該地方の地位的な変化も想起させる。

能古島・相ノ島産とみられる板状剥離の粗面玄武岩の使用量の減少は、糸島地方首長の玄界灘沿岸域における政治的影響力の低下を暗示するものであり、石室内における屍床区画の採用は有明海沿岸勢力との交流の活性化をものごとたり、筑後平野以



第51図 組み合わせ式木製品の復元案(上)と服部古墳群出土組み合わせ式木製品実測図(下・上原真人1993『木器集成図録 原始編』奈良国立文化財研究所掲載図から作成)(1/10)

南の大型前方後円墳からの石見型石製品出土は、大型前方後円墳の出現に象徴される磐井、肥の勢力の拡大に伴う、北部九州における覇権移譲の象徴ととらえることができる。

4世紀末以後に直径50m超の大型円墳や帆立貝型前方後円墳の出現が顕著となる傾向は北部九州(表3)をはじめ国内各地で確認されており(註22)、都出比呂志氏はこの現象について、「前方後円墳を築ける首長と円墳や帆立貝型前方後円墳を築く首長とが明確に区別され(中略)前方後円墳の被葬者はその地域の盟首としての地位を維持したのにたいし、大型円墳や帆立貝型前方後円墳の被葬者は前方後円墳被葬者を頂点とする地域秩序の中に組みこまれた」と解釈した(註23)。当該地域の政治情勢を検証するうえで示唆に富んだ指摘といえるだろう。

このように、釜塚古墳は当該地方の歴史にとどまらず、北部九州ひいてはわが国の古墳時代中～後期社会の動向を検証するうえでも欠くことのできない多くの情報を内包する古墳であることが明らかとなった。今後も多視点から調査研究を進めていく必要がある。

【付記】

脱稿後に、一時所在が不明となっていた第1次発掘調査に出土した埴輪・土器類と、石室から出土した刀子状鉄器(本書42頁報告分)の所在を確認した。これらについては、別の機会に改めて報告することとしたい。

註

1. 糸島地方では、天神山貝塚・今山貝塚・御床松原遺跡・石崎遺跡群・三雲南小路遺跡から出土している程度である。(小池史哲 2009 「糸島地域の縄文時代遺跡」『新修志摩町誌』(上巻)志摩町)
2. 水ノ江和同 1987 「西北九州における曾畑式土器の諸様相」『同志社大学考古学シリーズ考古学と地域文化』
3. 白石太一郎 1983 「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念古代学論叢』角田文衛博士古希記念事業会
高島敦 2006 「多重環濠をめぐって」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
4. 長友朋子 園原悠子 前田仁暉 山崎公輔 2018 「古墳の渡り土手—近畿地域を中心として—」『立命館文学659』立命館文学会
5. 井沢洋一 2015 『拜塚古墳』福岡市教育委員会
6. 末永雅雄 1977 「日本古墳の外形構造への観察」『日本學士院紀要35-1』日本學士院
7. 柳沢一男 1982 「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
8. 柳沢一男 2002 「鋤崎式横穴式石室の提唱」『鋤崎古墳』福岡市教育委員会
2019 「中期埋葬施設の多様性と階層性～九州地方を中心に」『中期古墳の現状と課題Ⅲ』中国四国前方後円墳研究会 第22回研究集会(広島大会)実行委員会
9. 岡部裕俊 2014 「曾根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要8』伊都国歴史博物館
10. 川西宏行 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64-2』日本考古学協会
高橋徹 2000 「九州の埴輪について—研究の現状と課題—」『九州の埴輪その現状と地域性』九州前方後円墳研究会
11. 名称については「木製埴輪」(久野邦夫1976)、「木製樹物」(高野学1987)、「木製立物」(若松良一1988)、玉板形立物(坂靖)などが提唱され、また表飾部の祖型について琴柱型石製品をはじめ諸説が提示されている。その起源として鈴木裕明氏は古墳前期の王権において使用された祭具の埴輪化(鈴木2019)、坂靖氏は、「Y」字形のモチーフそのものが王権の象徴と位置づけ、その表象として古墳祭祀における使用形態の多様性を容認し